大阪府埋蔵文化財調査報告2010－９

芹 生 谷 遺 跡

大阪府教育委員会

芹 生 谷 遺 跡

大阪府教育委員会

序　　文

大阪府の東南部に位置する河南町・千早赤阪村は、古代から南河内と大和葛城地域を結ぶ幹線道路である水越峠越えルートを扼する交通の要衝です。峠越えのこの道路が平地に出た、そのすぐ北側には河南台地と呼ばれる平坦な台地が広がり、水田や畑が開発されています。また現地表は条里地割が残り、良好な文化的景観として注目されている地域です。

この河南台地の南端近くには、６世紀の後半ごろに全国的にも珍しい双円墳である史跡金山古墳が築かれました。この地域を勢力基盤として支配していた豪族が大古墳を築いたのです。

河南台地の開発には、水越川から水を引く水路の建設が必須の条件でした。10世紀初めに編纂された法律の施行細則である『延喜式』神名帳にも記載されている建水分（たけみくまり）神社は、この分水地点近くに水の神を祀る神社です。このころには既に台地上の開発が進み、用水の供給とのその祀りを共通にする村落のつながりが出来ていたのでしょう。

芹生谷遺跡は、この台地上に計画された一般国道309号（河南赤阪バイパス）の建設に先立つ試掘調査によって発見された遺跡です。本報告書は、本格的な調査に先立って実施された２ヵ年の調査成果をまとめたものですが、金山古墳の築造やその後の開発の様相を予見的に提示することが出来たと考えます。この調査成果が、今後の文化財保護と地域の良好な歴史的景観の保護に活用されることを期待いたします。

調査の実施にあたり、ご協力いただいた地元の皆様をはじめ、河南町教育委員会・千早赤阪村教育委員会・大阪府富田林土木事務所ほか、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成23年３月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　野口　雅昭

例　　言

1．　本書は、大阪府都市整備部から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した一般国道309号河南赤阪バイパス道路整備工事に伴う、河南町中・芹生谷・千早赤阪村川野辺所在芹生谷遺跡の発掘調査の報告書である。

2．　現地発掘調査は、平成20年度に大阪府教育委員会文化財保護課調査第二グループ主査 上林史郎が担当して水路部分を、平成21年度に同副主査 杉本清美が担当して同じく水路部分の発掘調査を実施した。

　整理作業は、平成22年度に調査第二グループ主査 阪田育功、同副主査 杉本清美、調査管理グループ主査 三宅正浩、同副主査 藤田道子が担当者して実施した。

3．　本調査の調査番号は、平成20年度が08021、平成21年度が09030である。

4．　本調査の写真測量は、平成20年度株式会社ジオテクノ関西、平成21年度富士測量株式会社に委託した。撮影フィルムは同社が保管している。

5．　本書に掲載した遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。

6．　調査で作製した記録資料と出土遺物は大阪府教育委員会で保管している。

7．　本書は上林と杉本が執筆し、編集は阪田・杉本が行なった。

8．　調査の実施に当たっては、河南町教育委員会 赤井毅彦氏・千早赤阪村教育委員会 西山昌孝氏・和泉大樹氏の助言と協力を得た。

9．　発掘調査・遺物整理ならびに本書の作成に要した費用は、大阪府都市整備部が負担した。

10.　本報告書は、300部作成し、一部あたりの印刷単価は、777円である。

本　文　目　次

例言
第１章　調査の経緯と経過……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の方法……3
第２章　地理的歴史的環境……6
　第１節　地形環境……6
　第２節　水利環境……6
　第３節　条里地割……8
　第４節　台地の開発……9
第３章　調査の成果……14
　第１節　平成19年度試掘調査成果　……14
　第２節　平成20年度発掘調査成果……20
　第３節　平成21年度発掘調査成果……44
　第４節　まとめ……60
掲載遺物対照表……62

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図……1
第２図　芹生谷遺跡調査地位置図……2
第３図　地区割り図……5
第４図　調査区周辺地形・水利・条里図……7
第５図　金山古墳・御旅所北古墳の石室・石棺比較図……10
第６図　周辺の遺跡……13
第７図　試掘調査区位置図……14
第８図　試掘調査各調査区柱状図（１）……16
第９図　試掘調査各調査区柱状図（２）……17
第10図　試掘調査各調査区柱状図（３）……18
第11図　20年度調査区　出土遺物……25
第12図　20年度調査区　遺構平面図・断面図模式図　１（全体図）……26
第13図　20年度調査区　遺構平面図（１/100）断面模式図（縦１/40横１/100）　２……27･28
第14図　20年度調査区　遺構平面図（１/100）断面模式図（縦１/40横１/100）　３……29･30

第15図　20年度調査区　遺構平面図（１/100）断面模式図（縦１/40横１/100）　４ …… 31･32
第16図　20年度調査区　遺構平面図（１/100）断面模式図（縦１/40横１/100）　５ …… 33･34
第17図　20年度調査区　遺構平面図（１/100）断面模式図（縦１/40横１/100）　６ …… 35･36
第18図　20年度調査区　遺構平面図（１/100）断面模式図（縦１/40横１/100）　７ …… 37･38
第19図　20年度調査区　遺構平面図（１/100）断面模式図（縦１/40横１/100）　８ …… 39･40
第20図　20年度調査区　遺構平面図（１/100）断面模式図（縦１/40横１/100）　９ …… 41･42
第21図　20年度調査区　遺構平面図（１/100）　10 ……43
第22図　21年度調査区位置図……44
第23図　各調査区断面柱状図……46
第24図　全調査地遺構平面図…… 47･48
第25図　21－６区　出土遺物……49
第26図　21－１区　柱穴列平・断面図……50
第27図　21－１区　遺構断面図……51
第28図　21－１区　出土遺物……52
第29図　21－２区　遺構平・断面図……53
第30図　21－２区　出土遺物……54
第31図　21－３区・４区　全体図……55
第32図　21－３区　遺構平・断面図……55
第33図　21－３区・４区　出土遺物……56
第34図　21－４区　遺構断面図……56
第35図　21－５区　遺構断面図……58
第36図　21－５区　出土遺物……58
第37図　包含層出土遺物……59

表　目　次

表１　芹生谷遺跡発掘調査一覧表……２
表２　試掘調査成果概要一覧表……19
表３　柱穴列一覧表……49
表４　掲載遺物対照表……62

図　版　目　次

表紙

調査地全景　（南から）

図版１　試掘調査１

a　調査区より金山古墳を望む

b　試１区　壁断面

c　試２区　壁断面

d　試１区　南側里道断面

e　試３区　壁断面

f　試３区　遺構

g　試４区　壁断面

h　試４区　遺構

図版２　試掘調査２

a　試５区　壁断面

b　試５区　遺構

c　試６区　壁断面

d　試６区　遺構

e　試７区　壁断面と遺構

f　試８区　壁断面と遺構

g　試９区　遺構

h　試10区　壁断面と遺構

図版３　試掘調査３

a　試11区　壁断面

b　試12区　壁断面

c　試13区　壁断面

d　試14区　壁断面

e　試15区　壁断面

f　試16区　壁断面

g　試17区　壁断面

h　試18区　壁断面

i　試19区　壁断面

j　試20区　壁断面

図版４　試掘調査４

a　試21区　壁断面

b　試22区　壁断面

c　試23区　壁断面

d　試24区　壁断面

e　試25区－１　壁断面

f　試25区－２　壁断面

g　試26区　壁断面

h　試27区　壁断面

i　出土遺物１

j　出土遺物２

k　出土遺物３

図版５　平成20年度調査区

a　調査地全景（中央上方は史跡金山古墳）

b　20－１区　北端全景

c　20－１区　東壁断面

d　20－１区　段検出状況

図版６　平成20年度調査区

a　20－１区　中央部全景

b　20－１区　ピット群

c　20－１区　焼土坑

d　20－２区　甕出土土坑

e　20－１区　焼土坑下層ピット

f　20－１区　南端全景

20－２区　北端全景

図版７　平成20年度調査区

a　20－２区　中央部全景

b　20－２区　柱穴群

c　20－２区　溝・土坑

d・e　20－２区　土坑・柱穴群

f　20－２区　土坑・柱穴群

g　20－２区　ピット・溝

図版８　平成20年度調査区

a　20－２区　南半部全景

b　20－３区　北端　　20－４区　全景

c　20－３区　中央区全景

d　20－３区　中央部全景

図版９　平成20年度調査区　出土遺物１

a　土師器・陶磁器

b　須恵器

図版10　平成20年度調査区　出土遺物２

a　土坑11出土土器

b　石器

図版11　平成21年度調査区

調査区全景

図版12　平成21年度調査区

a　21－６区　全景（北から）

b　21－１区　全景（北から）

c　21－１区　溝71（南から）

d　21－１区　全景（南から）

図版13　平成21年度調査区

a　21－１区　建物配置

b　21－１区　柱穴列２

c　21－１区　柱穴列１

図版14　平成21年度調査区

a　21－２区　全景（南から）

b　21－２区　全景（北から）

c　21－２区　東壁断面

d　21－２区　溝269・溝280（北から）

e　21－２区　土坑256（南から）

f　21－２区　焼土坑130（南から）

図版15　平成21年度調査区

a　21－３区　全景（南から）

b　21－３区　柱穴列９（西から）

c　21－４区　全景（北から）

d　21－４区　全景（南から）

図版16　平成21年度調査区

a　21－５区　全景（南から）

b　21－５区より金山古墳を望む(南西から)

c　21－５区　検出遺構（北東から）

d　21－５区　溝388とピット（南から）

e　21－５区　溝406とピット他（西から）

f　21－５区　溝425・溝426（西から）

図版17　平成21年度調査区　出土遺物１

a　21－１区　出土遺物

b　21－２区　出土遺物

図版18　平成21年度調査区　出土遺物２

a　21－３区・４区　出土遺物

b　21－５区　出土遺物

c　21－５区　出土遺物

d・e　21－６区　出土遺物

図版19　平成21年度調査区　出土遺物３

a　石器（槍）

b　ふいご羽口片

c　ふいご羽口片

d　緑釉陶器・青磁・白磁片

第１章　調査の経緯と経過

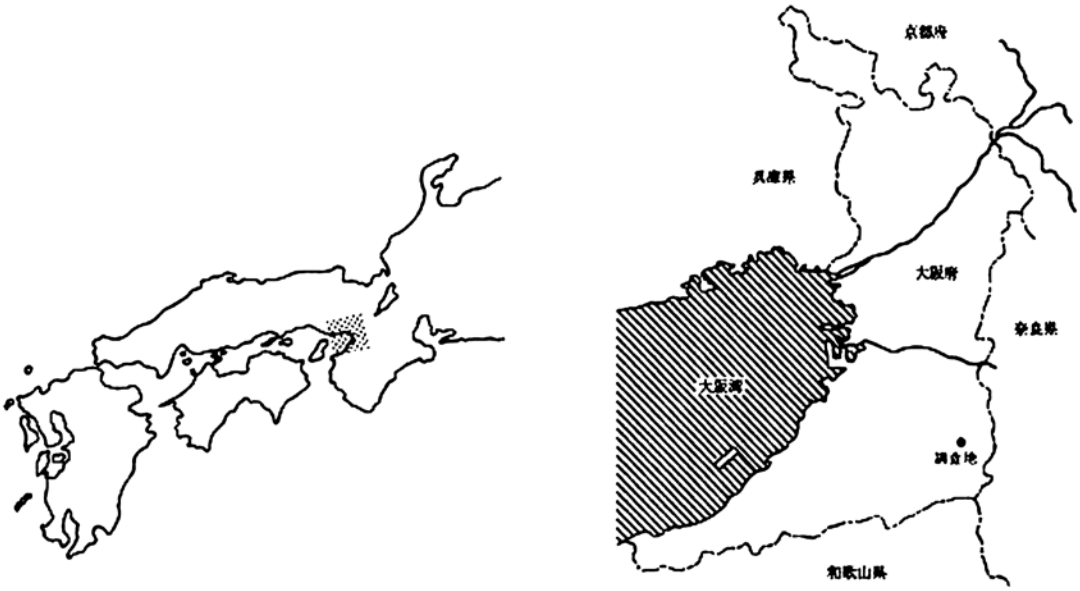
第１節　調査に至る経緯（第１・２図・表１）

平成18年９月、大阪府教育委員会文化財保護課は、大阪府都市整備部が計画する一般国道３０９号（河南赤阪バイパス）整備工事に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて、大阪府都市整備部富田林土木事務所と協議を行なった。

協議対象の一般国道３０９号（河南赤阪バイパス）整備工事とは、南河内郡河南町から千早赤阪村に至る延長2.6kmの国道３０９号のバイパス工事である。この工事は、１期区間（延長Ｌ＝0.80km）が平成17年３月に暫定２車線で供用開始されており、２期区間（延長Ｌ＝0.75km）の施工が計画されていた。２期区間については、南河内郡河南町大字中から南河内郡千早赤阪村大字川野辺にかけての全長約700ｍ、幅員約21ｍの道路を新設するものである。新設道路予定地は、この時点では、遺跡範囲外であったが、東側に隣接して、古墳時代後期の全国的にも珍しい双円墳である史跡金山古墳が存在することから、埋蔵文化財の有無を確認するため、用地買収が終了した工事予定地について、試掘調査を実施することとした。

平成19年５月から７月にかけて行なわれた大阪府教育委員会による試掘調査は、道路予定地の両サイドに27箇所の調査区（調査面積1,160㎡）を設定して、調査を進めた。現代耕土・盛土等を重機により掘削した後、その下層については人力掘削により土層の変化、遺構・遺物の検出に努めた。遺構を検出した調査区では、平面図を作成したほか、すべての調査区で土層柱状図を作成した。

試掘調査の結果、調査区１～19区・21区・23～27区で遺物包含層を確認し、古代から中世の土師器、須恵器、瓦器、土師質土器などの遺物が出土した。また、１～10区・14区・25区では、古代から中世の建物の柱穴、溝、土坑などの遺構を検出した。

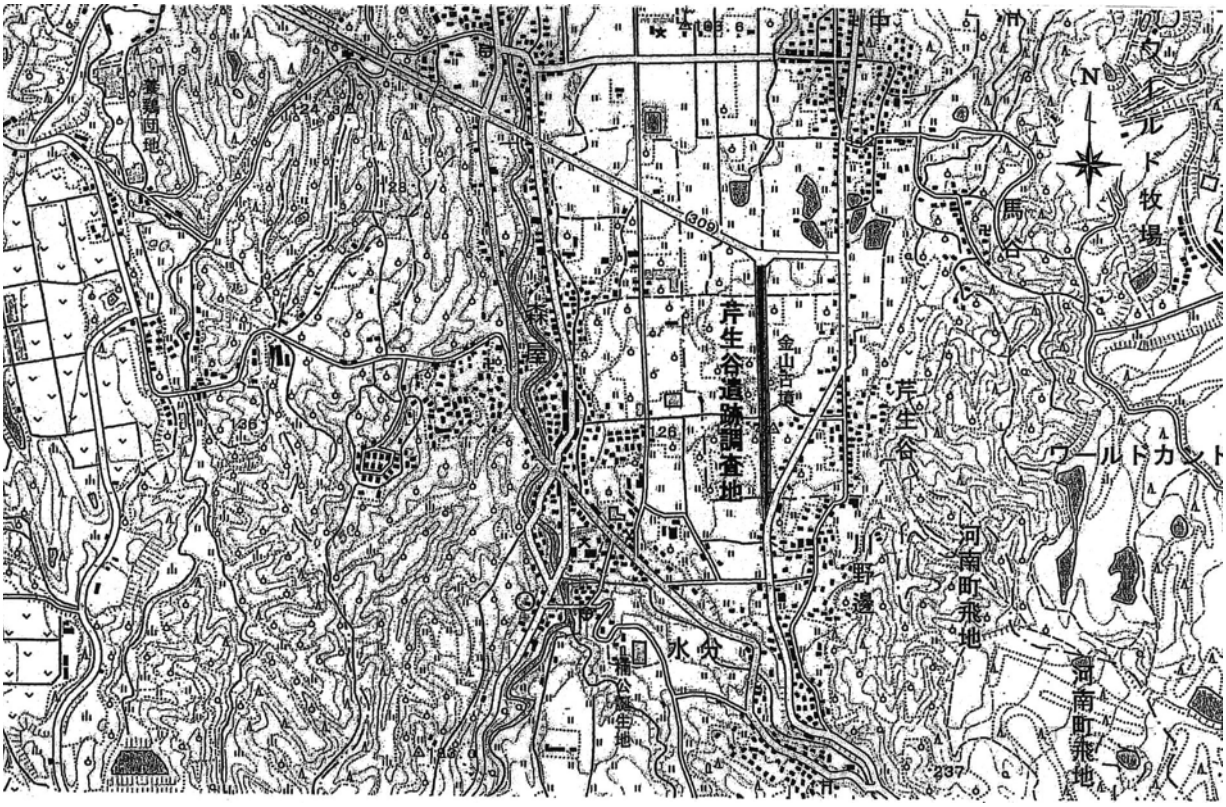


第１図　調査地位置図

その結果をもとに、遺跡発見の法手続きが執られると共に、再度協議がもたれ、道路建設工事が不可避なことから、道路建設工事に先立って、工事区域の全面発掘調査を必要とする措置が決まった。また、河南町教育委員会・千早赤阪村教育員会との協議のうえ、新規発見遺跡は「芹生谷遺跡」と命名され、埋蔵文化財包蔵地として周知されることとなった。

平成20年度には､財政再建プログラムにおいて２期区間の事業実施については､一時休止となったが、工事範囲の北側の水路・擁壁などの工事部分を発掘調査することとなった。

平成21年度には、工事範囲の南側の水路・擁壁などの工事部分を発掘調査することとなった。以上の２ヵ年の発掘調査の結果を報告するのが、本報告書である。



第２図　芹生谷遺跡調査地位置図

調査年次	調査番号	担当者	種類	調査期間	調査面積	主な成果	出土遺物（コンテナ）
平成19年度	07007	杉本清美	試掘調査	H19 5/14～ 7/6	27トレンチ 1160㎡	新規遺跡発見届 「古墳時代～中世　集落遺跡」	ｺﾝﾃﾅ 3
平成20年度	08021	上林史郎	発掘調査	H20 11/19～H21 1/16	4調査区　610㎡	古墳時代後期柱穴群・ 鎌倉時代　柱穴・落込み　他	ｺﾝﾃﾅ 2
平成21年度	09030	杉本清美	発掘調査	H21 12/1～H22 2/15	6調査区　970㎡	平安～鎌倉時代　柱穴・耕作溝・ 中世～耕作溝跡　他	ｺﾝﾃﾅ 2

表１　芹生谷遺跡発掘調査一覧表

第２節　調査の方法　（第３図）

地区割り　大阪府教育委員会の発掘調査では、遺跡・遺構の座標位置を共通した方法で表示できるよう、（財）大阪文化財センター（現　（財）大阪府文化財センター）が規定した『遺跡調査基本マニュアル』に則って地区割り区画を設定している。遺跡・遺構の位置は、国土座標系図の平面直角座標系を基準とする国土座標軸第Ⅵ座標系を使用し、起点からの距離をＸ・Ｙ値で表記している。調査区の地区割りについては、大小５段階の区画を設定している。

第Ⅰ区画は、１/10,000地形図の地区割りを利用したもので、南北６km、東西８kmとなる。経度、緯度の南西端を基準に、縦軸を南からＡ～Ｏ、横軸を西から０～８で表示する。芹生谷遺跡は大阪府の東南部に位置するＤ６区内にある。

第Ⅱ区画は、１/2,500の大阪府都市計画図の地区割りを利用したもので、第Ⅰ区画を縦1.5km、横2.0kmに16分割し、南西端を１として北東端を16とする東方向への平行方式の地区表示である。芹生谷遺跡は11区・15区にあたる。

第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画内を100ｍ単位で区画するもので、縦（南北）1.5kmを15区画、横（東西）2.0kmを20区画に区分する。区画の北東端を基点として縦を北からＡ～Ｏ、横を東から１～20で表示する。平成20年度の調査区は、15区内１N. 10、11区内１A. １Ｂに位置する。平成21年度の調査区は、11区内１C.１D.１E内に位置する。

第Ⅳ区画は、100ｍ四方の第Ⅲ区画内を10ｍ単位で区画するもので、縦、横を各10区画に区分する。区画の北東端を基点として縦を北からａ～ｊ、横を東から１～10で表示する。今回の調査区の21－５区は、Ｄ６－11－１Ｃ－５ｇ・５ｈ・５ｉ・５jなどと表記することができる。

さらに、遺物の取り上げや実測記録等の際に必要に応じて使用する区画として、第Ⅴ区画がある。第Ⅴ区画は、第Ⅳ区画内を５m単位で４分割するもので、北東端を基準として北東区画をⅠ、北西区画をⅡ、南東区画をⅢ、南西区画をⅣと表示する。今回の調査地点の一つは、Ｄ６－11－１Ｅ－３ｈ－Ⅱと表記される。

方位は国土座標に準じ座標北を示す。磁北は西に０°15′39″傾いている。水準は、東京湾平均海水面（T.P.）を使用した。

測量　各調査区の主要な遺構面測量は、ヘリコプターを利用した航空測量を行ない、１/20の遺構図・平面図と、それを縮小編纂した１/100の遺構図・平面図を作成している。なお、基準点は周辺の見通しが悪かったため、ＧＰＳ測量により３級電子基準点から調査区周縁に３級基準点及び、４級基準点を設けた。航空測量で得られたデータを元に、３次元で遺構断面が表現できるようデータ処理を行なっている。また、遺構の検出状況や遺物の出土状況で必要に応じ、国土座標に則って打設された調査基準杭を基に、現地で平板測量にて実測平面図を作成している。そのほか、必要に応じて遺構断面図や遺物出土状況図については、細部を表現するため基準杭を元に細い区割りをして実測し、１／５、１／10、１／20の図面を作成した。土層断面図は、遺構平面図と対応するため基本的に１／10、１／20で作成した。そのほか、航空測量で得られた各調査区の

カラー密着写真を基に、１／100の調査区全域の合成写真を作成している。

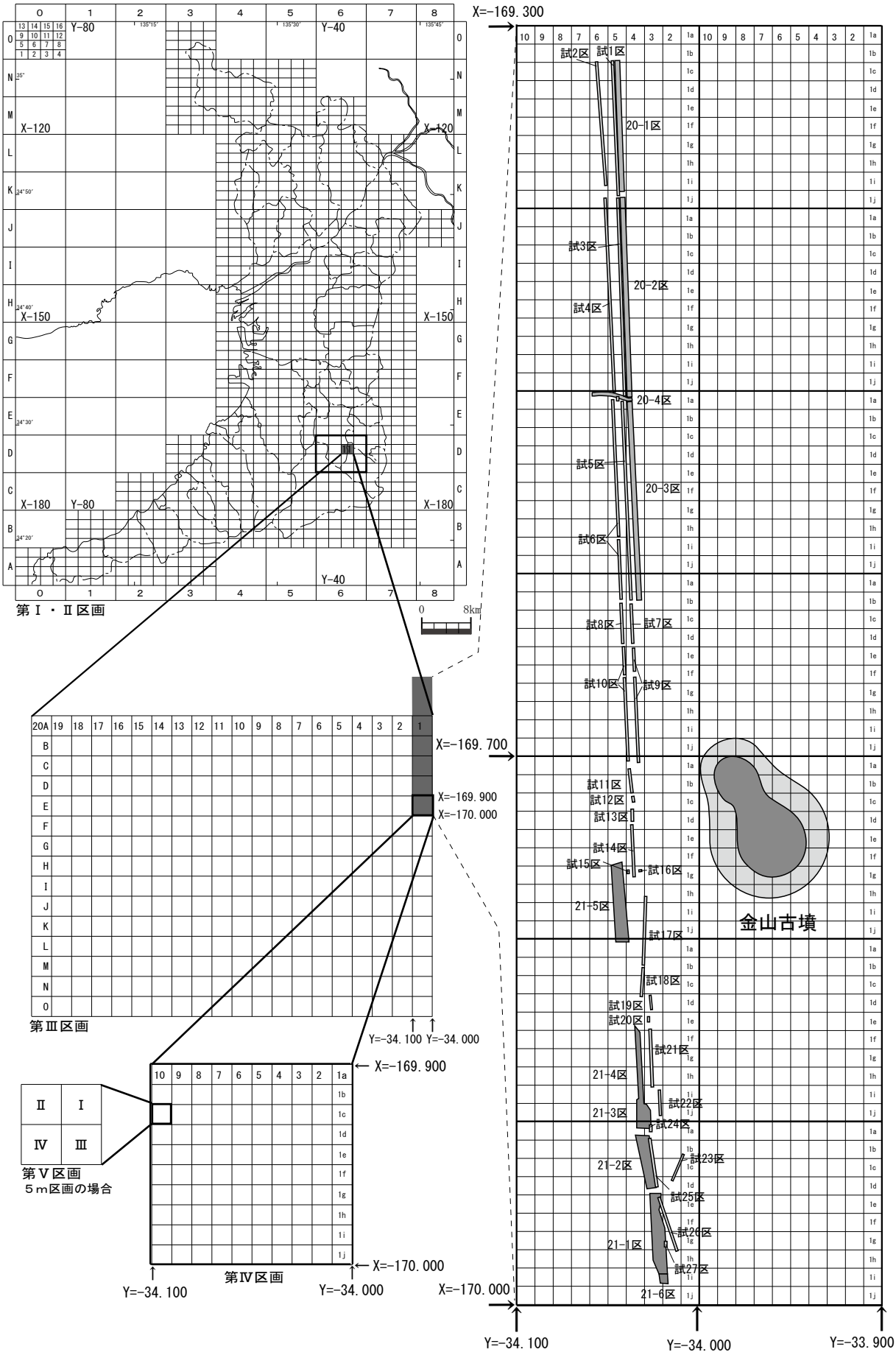
調査区　調査区番号は、調査年度ごとに調査に取り掛かった個所から順に番号を設定した。報告書作成に際し、調査年度が区別できるよう各調査区の前に年度の呼称を付与した。平成20年度の調査は、北側から順に調査区（20－１区、20－２区、20－３区）を設定し、最後に調査を実施した里道部分に番号（20－４区）を付与した。平成21年度の調査は、概ね南側から順に調査区（21－１区、21－２区、21－３区、21－４区、21－５区）を設定し、最後に調査を実施した用水取り込み部分（最南端）に番号（21－６区）を付与した。また、平成19年度に実施した試掘調査の調査区は、試１区～試27区とした。

遺構番号　遺構番号は、調査年度ごとに遺構の種別や調査区を問わず検出した順に通し番号を与えた。遺構の性格が想定できるものについては、遺構番号の前に溝・Ｐ・土坑などの遺構種別を付加した。なお、掘立柱建物や柱穴列については、整理段階で新たに１番から番号を付与した。

写真　記録保存のために、調査区全景、遺構全景、個別の遺構、遺物出土状況、土層断面などその状況に応じて写真撮影を行なった。使用したカメラは、35mm（モノクロ・リバーサル）と６×７（モノクロ・リバーサル）である。遺構の撮影に関しては、調査担当者による撮影を基本とし、顕著な遺構、遺物については写真撮影の委託を実施した。遺構・遺物の写真・スライドは登録・整理され本府文化財保護課にて保管している。

発掘調査の開始と終了　調査にあたっては、各調査区の表土、盛土および旧耕作土層を重機によって掘削した後、人力によって掘削し、遺構・遺物の確認に努めた。人力掘削後、遺構面の精査・測量・実測・写真撮影などを行なった。調査終了後は、続いて用水路・擁壁設置工事が行なわれることから、埋め戻しをすることなく工事作業に引き渡した。

遺物・遺構図面等の整理作業　出土遺物は可能な限り発掘調査時に併行して整理作業を行なった。遺物登録番号は、調査年度毎に調査区、遺構別にかかわらず、取り上げた順に番号を付与している。調査終了後は、直ちに出土遺物の登録・洗浄・注記・接合・遺物実測・石膏復元・遺物写真撮影などを行なった。出土遺物の中でも遺構の時期や性格を示すものなどを摘出し遺物実測を行なった。特に必要と判断した遺物については、残存状況にかかわらず抽出して写真撮影を行なった。本書に掲載した遺物については、表４　掲載遺物対照表にまとめている。表は基本として、調査年度ごと及び調査区ごとにまとめ、出土遺物と検出した遺構や出土地、さらに実測番号が対応できるようにしている。また、遺物実測図や写真図版と対応できるようまとめて掲載している。


第Ⅰ・Ⅱ区画
第Ⅲ区画
第Ⅳ区画
第Ⅴ区画
５ｍ区画の場合
X=-169.300
X=-169.700
X=-169.900
X=-170.000
Y=-34.100
Y=-34.000
Y=-33.900
試1区
試2区
試3区
試4区
試5区
試6区
試7区
試8区
試9区
試10区
試11区
試12区
試13区
試14区
試15区
試16区
試17区
試18区
試19区
試20区
試21区
試22区
試23区
試24区
試25区
試26区
試27区
20-1区
20-2区
20-3区
20-4区
21-1区
21-2区
21-3区
21-4区
21-5区
21-6区
金山古墳

第３図　地区割り図

第２章　地理的歴史的環境

第１節　地形環境

河内と大和を隔てる葛城山系の南端、山地の西側斜面に貼りつくように、河南台地と呼ばれる平坦な地形が南北約３km東西約１kmにわたって広がっている。現地表の標高は台地南端の川野辺地区付近でT.P.150m、そこから3.5km北の台地北端北別井集落の北でT.P.72m程度と緩やかに北に下がる。

葛城山系の基盤層は領家変成帯に属する花崗岩類（多くは花崗閃緑岩）からなるが、台地は花崗岩類が風化したマサ土で形成され、地形的には段丘中位面に分類されている。段丘中位面が大阪層群のMa12層に対応するとの知見から、おおよそ４万年前以降に形成された地形と考えられている。(1)

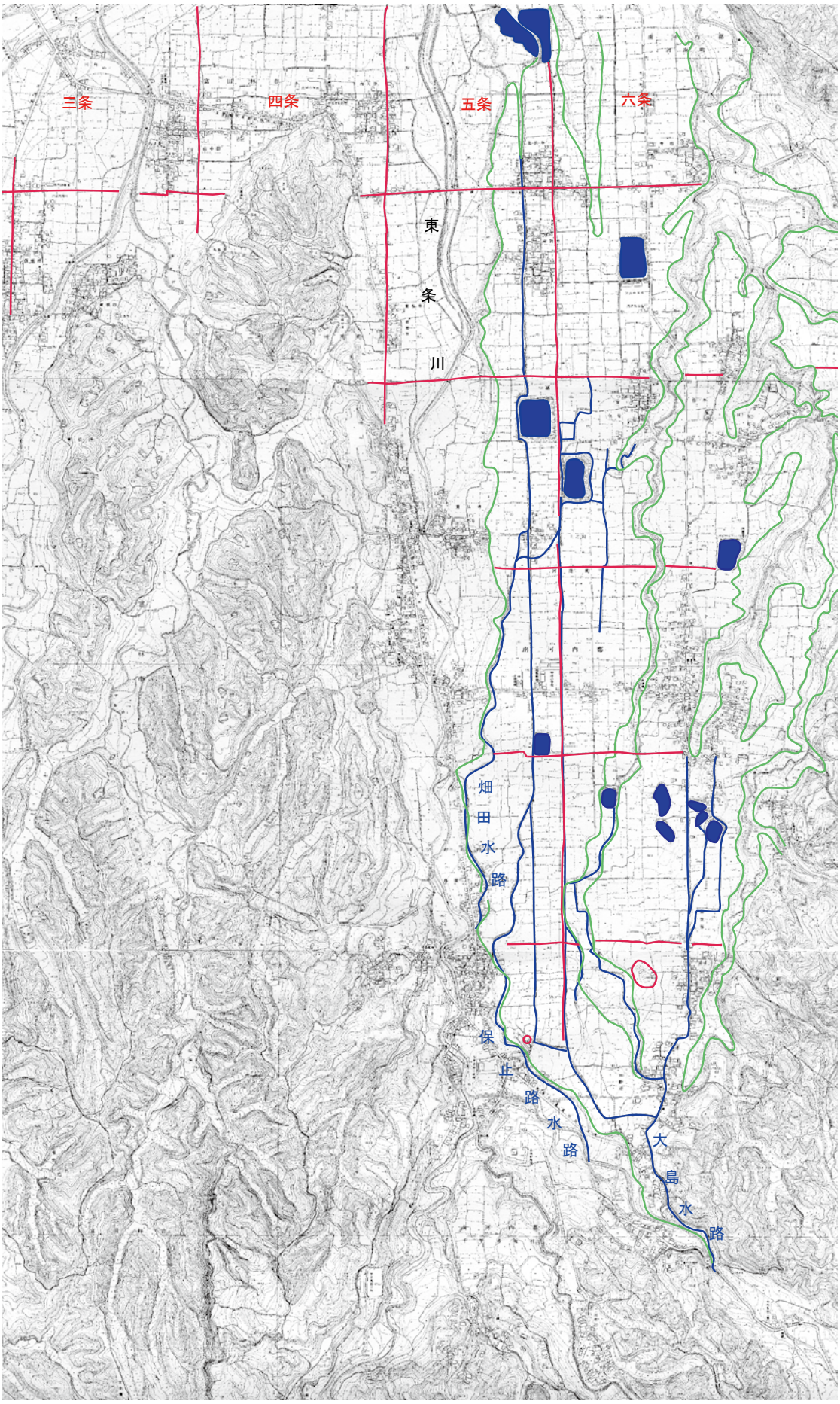
台地の南は水越川が葛城山地と金剛山を分けて流れ、奈良県御所市とつながる水越峠越えの谷筋を造って千早川に合流する。台地の西側は東条川が開析谷を形成して北流している。台地の東縁辺には山地と台地を画すように馬谷川が小規模な河谷を形成して北流しているため、葛城山系から流れ出た谷水は台地上にあがらず、梅川に合流し、千早川とともに石川に合流している。芹生谷は台地の最も南に位置し、台地を北北西から北方向に開析している。

第２節　水利環境

河南台地は平坦で、東条川や葛城山系から流れ出て台地を開析する谷筋の水を台地上面に引水するのは困難である。台地への用水は建水分神社の東方約0.1㎞にある取水樋で水越川から分水され、大島水路(2)と呼ばれる幹線水路で台地上に導かれる。大島水路は水分・川野辺・芹生谷集落の中心を通る道路に沿って、金山古墳の東を通り、台地東の山麓を緩勾配で高度を保ちながら北に流れる。

台地上には川野辺集落から北北西に芹生谷と呼ばれる谷が台地を浸食しており、台地上の水利を東西に二分している。芹生谷そのものは金山古墳近辺では標高差10ｍ近い崖面を造って台地を浸食した自然地形であるが、谷頭の水源は先の大島水路に繋がっているので、大島水路築造後に人為的にこれと連続させて、用水路の機能をもたせたのかもしれない。この谷筋の底には排水路としての水路があるが､その水路の所々から分岐した小水路が崖面を這うように築造されており、北に向かって高度を下げた水田面への用水機能を果たしている。芹生谷の水路の流末は中村の西を通って北上し、天満川となって梅川に合流する。

芹生谷の西側には東条川が形成した谷との間に東西500ｍほどの平坦地が南北約３㎞にわたって広がっている。この台地面上は条里地割が顕著に遺存しており、これに沿った基幹水路が北に流れている。この西基幹水路は水越川から取水した大島水路が水分集落の北端近くで分岐したもので、河南町と千早赤阪村境から北に延び、中村小学校の東の坪境をまっすぐ北流している。



第４図　調査区周辺地形・水利・条里図

この水路は台地上の平坦面の中でも最も高い部分に築造されており、東西の水田に給水し得る位置を選地している。

台地上にはいくつかの溜池がある。形状からみると楕円形や不整形の池が中村集落の南方に、中村の北には条里地割に合致する長方形の池が築造されている。溜池の築造は水路からの用水不足を補うものであるから、特に台地北側の開発には必要な施設である。これらの溜池のなかには築造年代の記録があるものもある。寺田池（寛永元（1624）年)、地蔵池（寛文３（1663）年)、今堂池（寛文12（1672）年)、寅ケ池（元禄10（1697）年)、などの記録があることから、これら溜池のほとんどは江戸時代の開発に伴う築造と考えられる。(3)

建水分神社の下流約600ｍ付近で水越川から取水する保止路水路、森屋付近で東条川から取水する畑田水路はそれぞれ河南台地の西縁辺にそって流れ、前者は森屋集落東方で台地上面に至り、後者は中村西北方で台地上にあがって寅ヶ池に注いでいる。この水路の灌漑範囲は台地北方であることから考えて、台地北方の灌漑のために築造された溜池と同時代に築造されたものと推定される。逆に、築造当初の大島水路は、台地の南の部分に灌漑用水を供給していたものと推測される。(4)

第３節　条里地割

台地上には条里地割が良好に遺存している。『河南町誌』によれば、「寺田の西方台地に（中略）一ノ坪、二ノ坪、三ノ坪、五ノ坪、八ノ坪、九ノ坪、十ノ坪、十一、十二ノ坪、十六」のような坪名が残っている。(5)

『観心寺勘録縁起資材帳』（以下『資材帳』と略記）記載の荘園のなかに石川郡「仲村荘」とあるのは芹生谷遺跡の北の中村と考えられるが、田地の表記に「六条鏡田里五坪三反百卅歩　六坪一反二百卅歩」などの条里呼称が見られる。また、「杜屋荘　五間萱葺屋１間　地壱町　五条杜屋里廿四坪百六十歩」との記載は千早赤阪村森屋にあたる。資材帳は元慶７年（883年）に記されたものなので、このころ以前には、台地上の耕地が条里地割で呼称されていたことがわかる。(6) このことは、台地全体に現在のような地割が実際に施工されたことを必ずしも意味するものではないが、全国的な条里プランの成立が８世紀中ごろと考えられていることから、少なくとも地割の基準線たる条里地割が、この台地上にも遅くとも『資材帳』の編まれた９世紀末以前には施行されていたといえる。

石川流域の条里地割については、塚田秀雄氏が復原に成功している。(7) 河南台地の北端に近い別井集落東方（上に揚げた『河南町誌』記載の寺田の西方台地の坪名に該当）の数詞坪地名を基に条里坪付が復原されており、これによって条里坪付と、東西南北の里境が復元できる。復原によれば、坪付けは南西隅を一里とし東へ進む千鳥型で、東西の里境ラインは上河内富田林線、南北のラインは市町境界線より１町西で別井集落の東端に近いラインとなる。台地南ではこのラインが河南町と千早赤阪村との境界（かつての大字界）となっていることもこの復原を支持して

いる。このラインは先に見た大島水路の西基幹水路が通るラインでもあり、水路と地形・条里地割が見事に整合していることが確認される。塚田は南北方向の数詞条＋固有名詞里で表示される条里地割を第４図のように提示している。『資材帳』で仲村荘が六条、杜屋荘が五条とされていることもこれと整合していることから考えても妥当な復原であると思われる。ただ、東条川の東西にまたがる五条が約５町で設定されたとの復原には塚田も「なお考察を要する」としている。

坪界線が整然とした条里区画をなすこととは対照的に、一坪内の耕地一筆の区画線が弧状を呈する部分がある。(図版５a) 芹生谷遺跡近辺が顕著で、谷地形にそった等高線で耕地を区画してきた結果である。

第４節　台地の開発

（１）金山古墳と御旅所古墳・御旅所北古墳　（第５図）

６世紀後半には、家形石棺を納めた横穴式石室をもつ古墳が台地南端に築造された。水利環境で見れば、東幹線大島水路のすぐ脇に双円墳金山古墳、西幹線脇に御旅所北古墳が、あたかも水利系統に対応するかのように、その要の位置に築造されている。

金山古墳は、双円墳の北丘の横穴式石室の玄室と羨道にそれぞれ刳り抜き式の家形石棺を納めている。史跡整備に伴う河南町教育委員会の発掘調査では、昭和21年の調査で北丘石室内２つの石棺の間からの出土が確認された須恵器高杯や石棺の型式などを根拠に６世紀末から７世紀初頭の築造と判断された。(8)

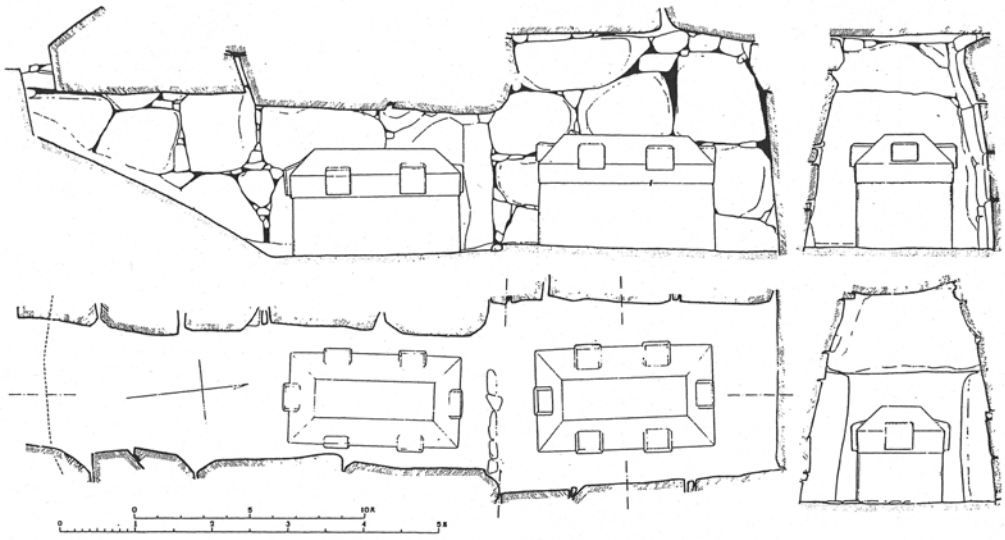
御旅所北古墳も同様に、玄室と羨道にそれぞれ組合式石棺を納めた横穴式石室を持つ古墳である。千早赤阪村教育委員会による調査で出土した土器は金山古墳出土須恵器と同型式である。また、石室の規模も金山古墳北丘の石室と極めて近い大きさを示している。

規模（m）	玄室長	玄室幅	羨道長	羨道幅
金山古墳	３．８３	２．５４	６．２５	１．７５
御旅所北古墳	３．８	２．４	６．３	１．６

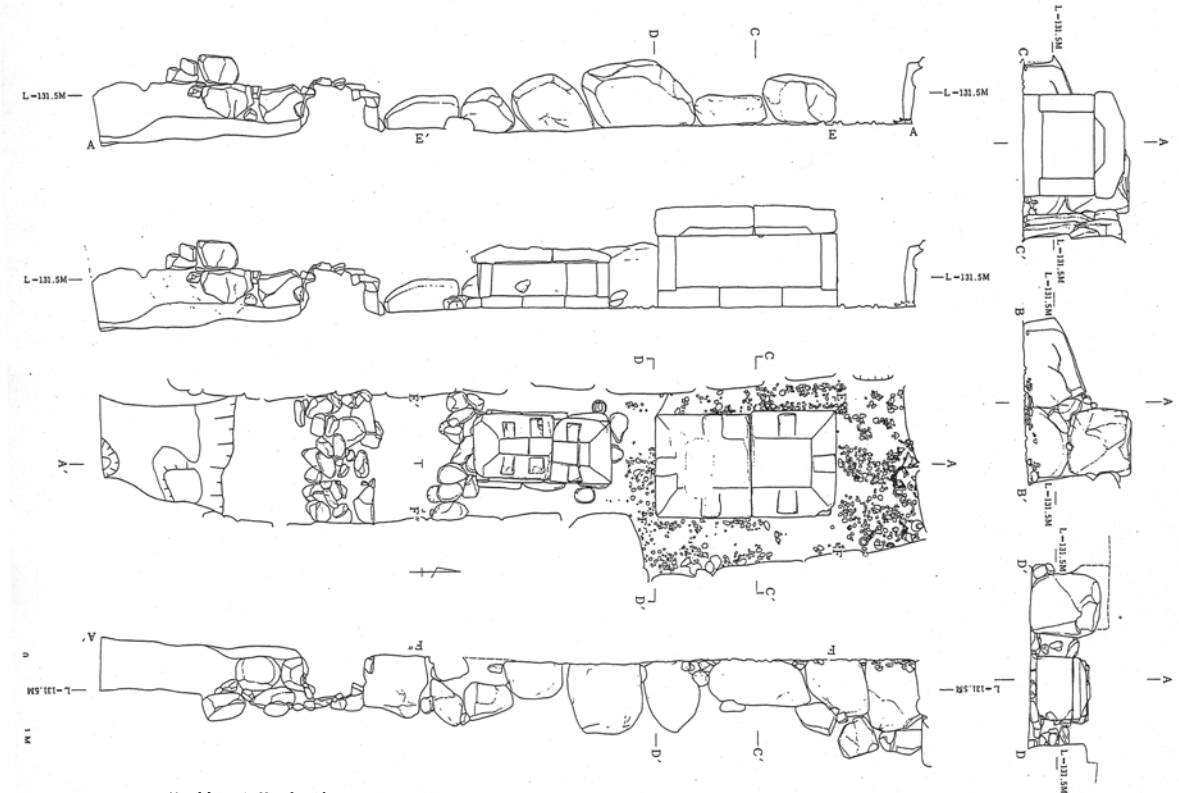
御旅所古墳は石室の側壁と思われる石列が検出されているものの、詳細は不明である。(9)

両古墳と同時期の古墳は近辺では寛弘寺古墳群45号墳があげられる。寛弘寺古墳群は河南台地と東条川を挟んで西側の丘陵上に造営された古墳群で、前期から連続する群集墳である点で、河南台地上の古墳と性格の違いを考慮せねばならない。(10) 一方、金山古墳の墳丘裾をめぐる暗渠式の排水路は45号墳のそれと類似していることも注意されている。

河南台地の北端を西に開析する平石谷には加納・平石古墳群が築造される。いずれも６世紀末から７世紀前半にかけて築造され、追葬された横穴式石室を持つ小型の円墳が７基検出されている。また、大型の方墳で切石の横口式石槨をもつシシヨツカ古墳・アカハゲ古墳・ツカマリ古墳が築かれ、なかでも平成13年度に発掘調査されたシシヨツカ古墳の出土遺物は６世紀後半（TK43型式）の年代を示すことから、従来の横口式石槨の構造型式による年代観と大きく食い違うこと



金山古墳



御旅所北古墳

第５図　金山古墳・御旅所北古墳の石室・石棺比較図

が問題となった。(11)

平石谷と北の磯長谷との間の東山丘陵には、一須賀古墳群が造営される。後期の横穴式石室を主体にした群集墳で、渡来系の遺物を出土する古墳が多いことが特徴である。Ｉ支群は６世紀初頭から築造されはじめており、７世紀中頃まで造営が続く。最大の石室を持つＤ４号墳は金山古墳と同時期であり、河南台地南端に古墳が築かれた頃に造営されていた古墳群である。

寛弘寺古墳群や一須賀古墳群のように、横穴式石室を持つ古墳群の中に築造される同時期の古墳に比べ、金山古墳と御旅所北古墳は台地上に独立して築かれることが特徴的である。古墳がその被葬者の勢力基盤となる地域に選地されたと考えれば、両古墳の被葬者が台地上の開発を主導した勢力の首長あるいはそれと密接な関係にある人物の墳墓と考えてよいだろう。ただ、河南台地だけを両古墳の被葬者の勢力圏とするには余りにも狭小に過ぎる。７世紀になると狭山池や古市大溝などの大規模な水利施設の築造や台地や丘陵上の開発が盛んに行われるようになるが、それに先駆けて広域的に水を管理支配し、河南台地の開発を主導した技術者集団の残したモニュメントが両古墳であると考えたい。

（２）台地上の発掘調査成果

台地上の発掘調査例は少ない。河南町役場の西側、河南町立河南中学校のプール部分の調査で古墳時代中期の土器を出土する溝（自然流路か）と８世紀初頭の土器を出土するほぼ南北方向の溝が検出されている。(12)

山田幸弘氏はこの成果について「河南台地の開発が古墳時代中期後半に遡る可能性を指摘できるとともに、現条里地割の施工時期を奈良時代にもとめることができる。」と考えている。(13)
和泉大樹氏は山田幸弘氏の論文を引いて「この調査地よりも上流の取水口に近い川上に位置する大島水路、保止路水路、畑田水路らの主水路の機能年代も当然その時期にまで遡って考えることは必然であろう。」と述べている。(14)

台地上の開発は、古墳が築造される６世紀後半以前に開始されたと推測されるが、河南中学校調査成果に見られるように５世紀代に遡るかどうかは、なお検証が必要である。台地上の水利が南から北へと供給されるものであれば、南方の開発が先行するであろうから、台地北方のこの調査区の成果は、別の成立契機を考えなければならないかもしれない。

千早赤阪村教育委員会が実施した川野辺遺跡の発掘調査は注目すべき成果をあげた。調査地は御旅所古墳の南東約200ｍで、現在の道路に沿った方向の溝が検出されている。幅２ｍ以上、深さ0.8ｍ以上を測る。溝内から「西」の墨書をもつ土師器杯など９世紀の遺物が多量に出土した。この溝は御旅所古墳に向かって北北西方向に走る大島水路の西幹線の前身である可能性が高い。この成果から見れば、大島水路は９世紀以前に掘削され、埋没した９世紀後半には、北東の高い位置、現状の水路が道路の北東走っている部分に付け替えられたのかもしれない。(15)

（３）条里地割の施行

先に引用した河南町調査例で検出されている８世紀初頭の土器が出土する溝はほぼ南北方向で

あるという。この頃に南北に長い台地の条里地割の基準線となるラインが設定されたのかもしれない。台地上に一時に現地表に見られるような地割が施工されたのでないことは今回の発掘調査でも明らかになったが、主要地割ラインの施工時期、坪内の耕地開発の実態については今後の調査例を待ちたい。

（1）吉川周作「５大阪盆地南部」『大阪層群』1993年

（2）『住吉大社神代記』

（3）『河南町誌』昭和43年　196・197ページ

（4）和泉大樹氏は建水分神社の社地の変遷について、神社はかつて現在地から水越川に近い字「下の宮」に祀られており、それに対置されるべき「上の宮」は金剛山そのものであり、双方で水の神を祀っていたと考える。南北朝時代に現在地に遷座し、両宮の祭りは丘陵上の現在地に収斂されたと考えている。(「金剛山麓における『水』をめぐる歴史的展開」)

（5）『河南町誌』昭和43年　54ページ

（6）『河内長野市史』第四巻資料編一　53ページ　　三浦圭一氏は仲村荘の所見年次を貞観11年（869年）としている。『国史大辞典３』851ページ

（7）塚田秀雄「富田林の条里遺構」『富田林市史』第１巻　712～730ページ

（8）小林行雄「南河内郡中村芹生谷金山古墳」『大阪府文化財調査報告書』第二輯　大阪府教育委員会　1953年
史跡整備にかかる調査成果は河南町教育委員会赤井毅彦氏のご教示による。

上林史郎氏は未調査の南丘の築造を北丘に先行するものと考え、築造時期を580年ごろと推定している。(上林史郎「平石古墳群の被葬者像」『加納古墳群・平石古墳群』大阪府教育委員会2009年)

（9）『御旅所・御旅所北古墳調査報告書』千早赤阪村教育委員会　1983年

(10)『寛弘寺古墳群発掘調査概要・Ⅷ』大阪府教育委員会　1989年

山田幸弘氏は「寛弘寺古墳群の継続的造営を積極的に評価し、大王権の介在とともに、(寛弘寺古墳群の被葬者が)在地の小首長を媒介として河南台地の開発に着手したと考えることができる。」と述べている（「石川流域における灌漑施設の復元的考察に関する覚え書き」『さやま誌』大阪狭山市文化財紀要　1993年)

山田氏は金山古墳と御旅所北古墳について言及していないが、台地上に築かれた両古墳のほうが大規模であることを考えても、寛弘寺古墳群の被葬者を台地上の開発者とするのは無理があろう。さもなくば、寛弘寺古墳群形成途上である特定人物の墳墓が台地上に移ったと考えねばならない。

(11)『加納古墳群・平石古墳群』大阪府教育委員会　2009年

ここでは、シシヨツカ古墳の遺物の年代が金山古墳出土遺物の年代とほぼ同時期であることだけを注意しておきたい。

(12) 河南町教育委員会赤井毅彦氏のご教示による。

(13) 山田幸弘「石川流域における灌漑施設の復元的考察に関する覚え書き」『さやま誌』大阪狭山市文化財紀要　1993年

(14) 第２節に述べたように保止路水路、畑田水路が条里地割施工時に遡るかどうかは検証が必要である。

(15) 和泉大樹氏のご教示を得たうえ、資料の提供をうけた。記して謝意を表します。
『川野辺遺跡発掘調査報告書』千早赤阪村教育委員会　2003年

別井遺跡
白木陣屋跡
寛弘寺古墳群
寛弘寺遺跡
[府指]寛弘寺神山墓地石造五輪塔
神山遺跡
神山丑神遺跡
大森古墳
大森遺跡
荒生谷遺跡
森屋西遺跡
[府指]森屋地蔵寄手塚
石造五輪塔
森屋1号古墳
森屋2号古墳
[国指]
金山古墳
曼陀羅院遺跡
御旅所遺跡
御旅所北古墳
御旅所古墳
矢場武遺跡
川野辺遺跡
出合遺跡
[国指]
赤阪城跡
楠公誕生地遺跡
桐山遺跡

第６図　周辺の遺跡

第３章　調査の成果

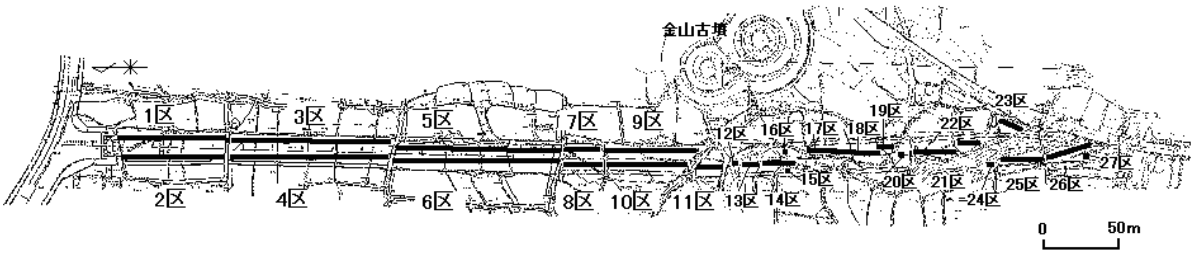
第１節　平成19年度試掘調査成果　（第７図）

調査経緯

一般国道309号（河南赤阪バイパス）整備事業に先立ち、埋蔵文化財の有無を確認するため、あらかじめ試掘調査を実施することとなった。新設道路予定地の東側に国史跡金山古墳が近接することから、同時期の遺構の広がりが想定された。

試掘調査は、平成19年５月14日から同年７月６日に実施した。新設道路予定地内に幅約1.2mの調査区を北側から順に27ヶ所（試１区～試27区）設定した（第７図）。調査区は幅約1.2m、延長は現況で調査可能な距離を設定した。調査面積は総計約1160㎡を測る（表２）。

調査は、現況の表土・盛土及び現代耕土層を重機で掘削した後、土層の変化を確認しつつ人力で掘削し、遺構・遺物等の検出に努めた。事後発掘調査を実施する際などの掘削深度の資料とするため、調査した全ての調査区で土層断面図を作成し、記録した。試掘調査で遺構が検出された場合は、基本的には遺構内を掘削せず状況把握するにとどめ、遺構検出状況の平面実測図を作成した。



第７図　試掘調査区位置図

調査成果

調査地は、南側の和泉山脈から南北方向に伸びる北流する東条川と梅川に挟まれた河南台地上に位置する。なかでも、金山古墳が位置する北側に向ってなだらかに低くなる段丘台地部とその西側に開析された谷部、さらに谷部を挟んで北側に伸びる小尾根状丘陵部に大別される。調査は北側の段丘台地部より開始した。調査区番号は、調査順に付与した。

試１区～試10区は、北側になだらかに低くなる丘陵台地部に位置する。段々に切り込まれた耕作地の１筆毎に調査トレンチを予定道路幅両端に平行して設定した。何れの調査区においても段前部では旧耕土の堆積が見られたが、段後部では上層部が削平され、現代耕土直下で地山層となる。段前部では、鉄分を含む灰黄褐色粘質シルトの旧耕土層と耕作溝・ピット・土坑等を検出し、瓦器椀片、土師質羽釜片などを含む遺物包含層を確認した。黄褐色レキ混じりの地山直上面では、建物ピットや焼土坑・溝などを検出し、須恵器杯身片・土師器小皿片や黒色土器片等を含む遺物包含層を確認した。古墳時代から平安時代に相当するものと考えられる。中でも試３区・試４区では、１辺約40～60cmを測る隅丸方形状の建物ピットがいくつか並ぶ状況が確認できた（図版

１ｆ)。試４区では、１辺約５ｍを測る方形状の落ち込みが見られた（図版１h)。竪穴住居になる可能性がうかがえる。試６区・試８区などでは、地山面で直径約１ｍを測る円形や方形状の焼土坑が見られた（図版２ｆ)。焼土塊が土坑の壁面を巡る状況から、火を用いた作業が行われたものと推測される。

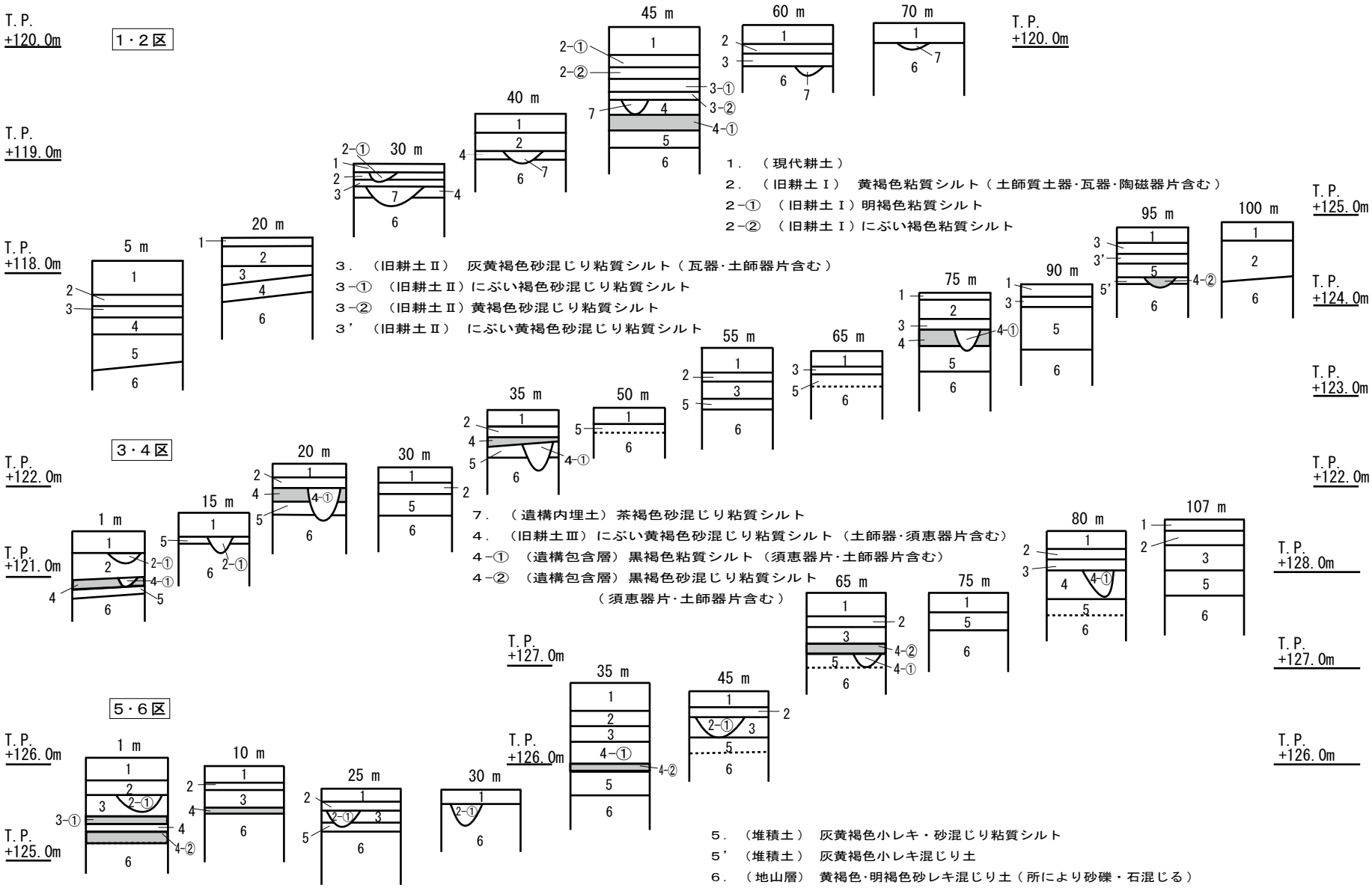
試11区・試12区・試16区～試23区は、金山古墳が位置する丘陵の西側で南側から伸びる小尾根状丘陵部の間を開析する谷部に位置する。主に、調査区南側から北流し、調査区中央部で西側へ流れる旧河川跡と旧河道周辺に広がる旧耕土層が見られた。現況では狭い谷部も整地され段状に耕作地化されていたが、試11区・試12区・試17区～試19区・試23区の下層で厚い青灰色砂の流水堆積層が見られた。旧河川内からはわずかに土師器片が出土した。旧河道周辺地（試16区）では砂が混じる灰黄褐色粘土の旧耕土層と、瓦器片・土師器片などを含む遺物包含層を確認した（図版３ｆ)。

試13区～試15区は、南側の山地から伸びる小尾根状丘陵の先端部に位置する。丘陵から北側の谷部に向う斜面地であるが、段々に整地され近年までみかん畑となっていた。段前部では厚い盛土層、現代耕土層が見られたが、段後部では上部が削平され、現代耕土直下で地山層となっている。段前部では、土師器片・瓦器片を伴う遺物包含層や土師器小皿や黒色土器片が混じるオリーブ黒色粘質土を埋土とする土坑状遺構などが見られた（図版３d)。黄褐色レキ混じり土の地山面では、焼土坑、ピット、溝などを検出し、須恵器片、土師器片を含む遺物包含層を確認した（図版３e)。

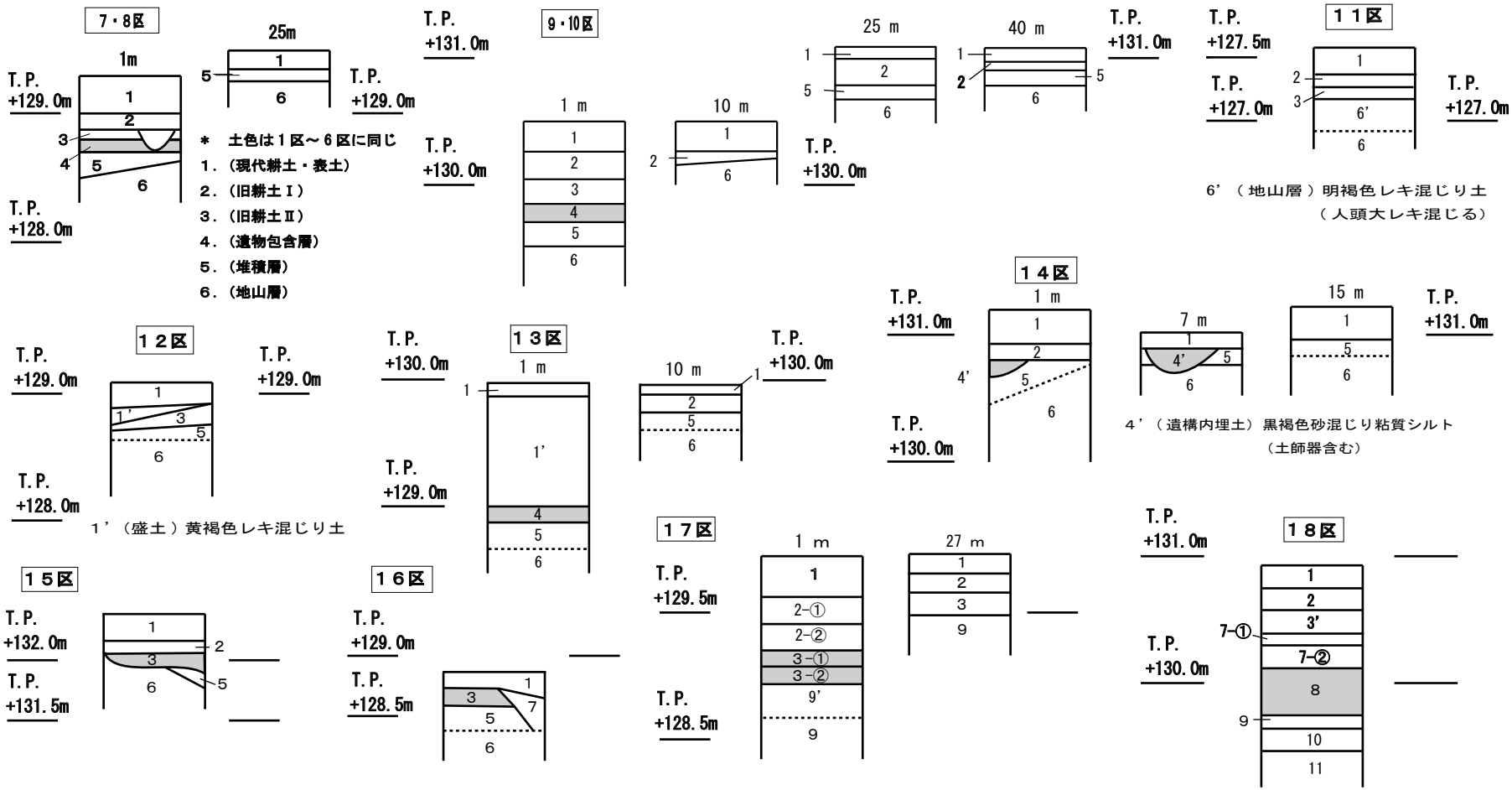
試24区～試27区は､南側の山地から伸びる小尾根状丘陵の頂部から丘陵東側斜面部に位置する。丘陵上は開墾され、段状に耕作地化されていた。段丘頂部は削平を受け、現代耕土直下で砂レキを多く含む褐色土の地山層となるが､斜面前部では砂混じり灰黄褐色土の旧耕土層と土師器小皿、瓦器椀片、土師質羽釜片などを含む遺物包含層を確認した（図版４e)。さらに下層から土師器、黒色土器椀、須恵器杯片などを含む遺物包含層も確認した（図版４f)。レキが多く混じる黄褐色の地山面では、焼土坑、土坑状遺構、小ピットなどが見られた。

小結

試掘調査の結果を受けて、新設道路予定地で遺構・遺物を検出したため、当該工事着工前に発掘調査が必要とする措置が取られた。調査の方法や調査期間などについては、本府教育委員会文化財保護課と事前に協議することとなった。また、当該地は遺跡範囲外であったが、遺構・遺物が発見されたため、文化財保護法第97条第１項に基づく遺跡発見通知が河南町教育委員会及び、千早赤阪村教育委員会を通じて提出された。その結果、新設道路予定地と周辺地を範囲とする新規発見遺跡は、「芹生谷遺跡」として周知されるに至った。



第８図　試掘調査各調査区柱状図（１）

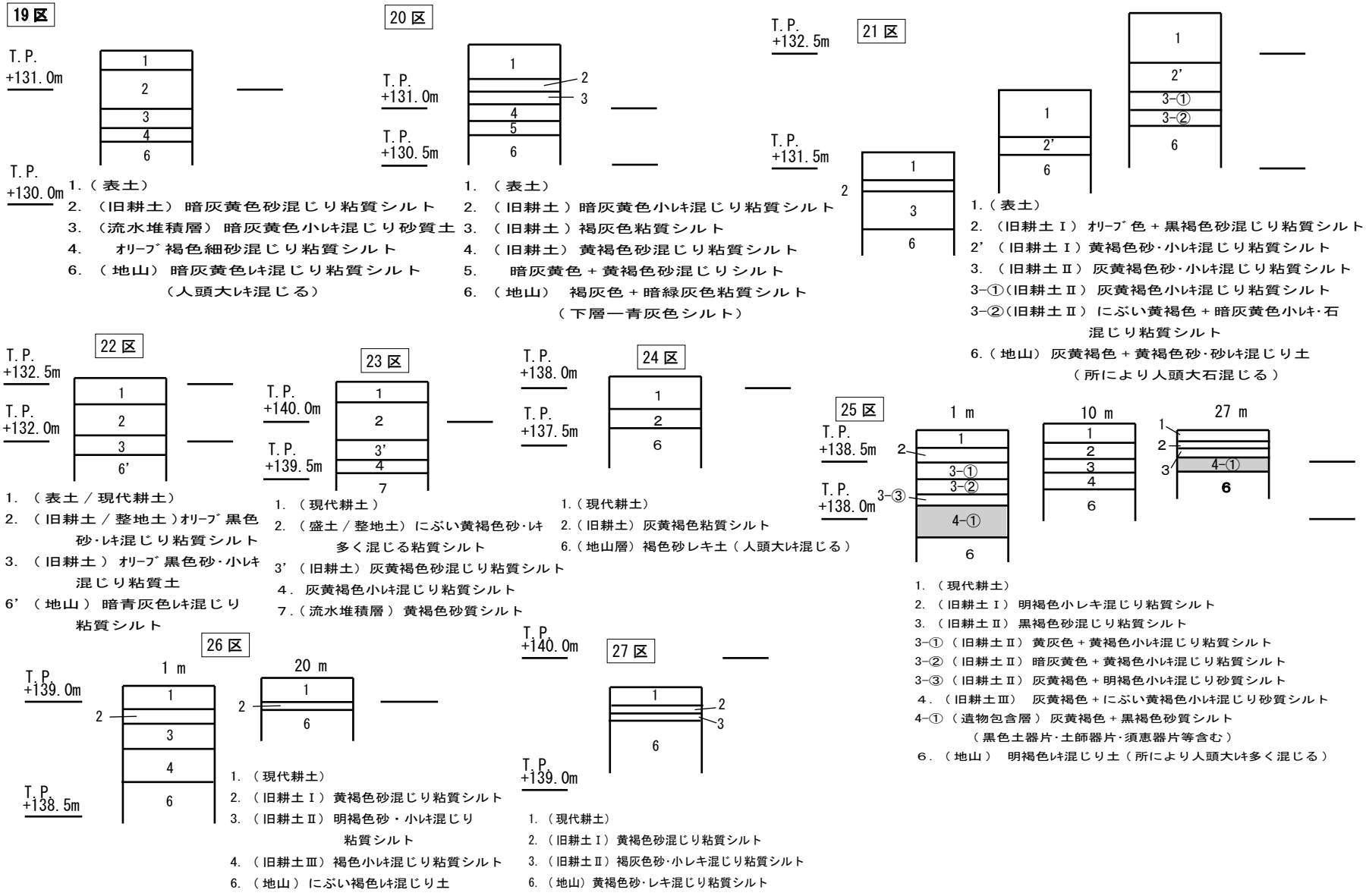


１.（現代耕土／表土）
２.（旧耕土）褐色砂混じり粘質シルト
３.（旧耕土）灰黄褐色砂混じり粘質シルト
（瓦器･瓦質土器･土師器片含む）
５.（堆積層）褐色砂・小レキ混じり粘質土
６.（地山）明褐色レキ混じり粘質土
７.（流水堆積土）暗灰黄色細砂混じりシルト
（細砂とシルトが互層を成す）

１.（現代耕土／表土）
２.（旧耕土）　黄褐色砂混じり粘質シルト
2-①　黄褐色細砂混じり粘質シルト
2-②　ｵﾘｰﾌﾞ褐色細砂混じり粘質シルト
３.　緑灰色細砂混じり粘質シルト（細砂とｼﾙﾄの互層を成す）
3’　暗黄灰色砂･ﾚｷ混じりシルト（下層細砂混じりシルト）
3-①　暗灰黄色砂質シルト（下層細砂）
3-②　黄褐色砂質シルト（下層細砂）

7-①（流水堆積層）暗黄灰色砂混じりシルト
7-②（流水堆積層）暗灰黄色／茶灰色小ﾚｷ混じり砂土
８.（流水堆積層）青灰色細砂（土師器片含む）
9’（流水堆積層）青灰色シルト
９.（流水堆積層）暗青灰色／ｵﾘｰﾌﾞ褐色砂質土
10.　オリーブ黒色粘質シルト
11.（地山）　青灰色砂･小ﾚｷ混じり粘質土

第９図　試掘調査各調査区柱状図（２）



第10図　試掘調査各調査区柱状図（3）

調査区	延長（m）	幅（m）	面積（㎡）	検 出 遺 構	出 土 遺 物
1	72.7	1.2	87.24	(中世～近世)耕作溝・(中世)耕作溝・溝・柱穴・(古墳～平安) 溝・土坑 他	土師質羽釜・瓦器椀・土師器小皿・須恵器杯身・須恵器片・土師器片 他片
2	65.0	1.2	78.00	(中世～近世)耕作溝・(中世)耕作溝・溝・柱穴・(古墳～平安) 溝・土坑・建物柱穴 他	土師質土器片・瓦器椀・土師器皿・須恵器杯身・須恵器片・土師器片 他片
3	108.5	1.2	130.20	(中世～近世)耕作溝・(中世)溝・土坑・(古墳～平安) 溝・土坑・隅丸方形状建物柱穴 他	土師質土器片・瓦器椀・須恵器杯身・甕・高杯・須恵器片・土師器片・サヌカイト 他片
4	106.0	1.2	127.20	(中世～近世)耕作溝・(中世)溝・土坑・(古墳～平安) 溝・土坑・焼土坑・隅丸方形状建物柱穴 他	土師質羽釜・瓦器椀・土師器皿・黒色土器片・須恵器杯・甕片・土師器片 他片
5	108.5	1.2	130.20	(中世～近世)耕作溝・(中世)耕作溝・土坑・柱穴・(古墳～平安) 溝・土坑・建物柱穴 他	土師質土器片・瓦器椀・土師器皿・黒色土器片・須恵器片・土師器片 他片
6	107.5	1.2	129.00	(中世～近世)耕作溝・(中世)溝・土坑・柱穴・(古墳～平安) 溝・土坑・方形状焼土坑(径約1m) 他	瓦質土器片・土師器質土器片・瓦器椀・皿・土師器皿・須恵器杯・甕・土師器片　他片
7	24.5	1.2	29.40	(中世～近世)耕作溝・(中世)耕作溝・土坑・柱穴・(古墳～平安) 溝・柱穴 他	土師器質羽釜・瓦器椀・小皿・須恵器片・土師器片・サヌカイト 他片
8	28.0	1.2	33.60	(中世～近世)耕作溝・(中世)溝・土坑・柱穴・(古墳～平安) 柱穴・円形状焼土坑 他	土師器質羽釜・瓦器椀・小皿・須恵器片・土師器片 他片
9	63.0	1.2	75.60	(中世)耕作溝・土坑・(古墳～平安) 溝・柱穴・不定形焼土坑 他	土師器質羽釜・瓦器椀・小皿・青磁片・須恵器片・土師器片 他片
10	52.0	1.2	62.40	(古代～中世)溝・柱穴・方形状焼土坑・方形状土坑(竪穴住居か) 他	土師器質羽釜・瓦器椀・黒色土器片・須恵器杯･甕・須恵器片・土師器片 他片
11	15.0	1.2	18.00	（遺物包含層確認）	陶磁器片・土師器質小皿・瓦器椀・土師器片 他片
12	2.5	1.5	3.75	（遺物包含層確認）	瓦器椀片・土師器片 他片
13	11.0	1.2	13.20	（遺物包含層確認）	瓦器椀片・土師器片 他片
14	16.5	1.2	19.80	(古代～中世) 柱穴・土坑・円形状土坑 他	土師質小皿・羽釜・瓦器椀・土師器片 他片
15	2.2	2.1	4.62	（遺物包含層確認）	土師質土器片・瓦器椀 他片
16	1.8	1.2	2.16	（遺物包含層確認）	須恵質片口鉢・瓦質羽釜片・瓦器片 他片
17	28.2	1.2	33.84	(古代～中世) 溝(流路跡) （遺物包含層確認）	土師質土器片 他片
18	18.0	1.2	21.60	(古代～中世) 旧流路跡	土師質土器片 他片
19	9.5	1.2	11.40	(中世～近世)溝・暗渠 他	土師質土器片・瓦器片 他片
20	2.0	1.5	3.00		
21	26.8	1.2	32.16	(中世～近世)溝・暗渠 他 （遺物包含層確認）	瓦質甕片・瓦器椀・小皿・土師質土器片須恵器片 他片
22	13.0	1.2	15.60	(中世～近世)溝・暗渠 他	
23	16.8	1.2	20.16	(中世～近世) 旧流路跡	土師質土器片・瓦器椀 他片
24	3.6	1.2	4.32	（遺物包含層確認）	土師質土器片・瓦器椀・黒色土器片 他片
25	26.8	1.2	32.16	(中世～近世)耕作溝・(古代～中世)方形状土坑・小柱穴 他	瓦質土器片・土師質皿・羽釜・甕片・瓦器椀・黒色土器片・須恵器坏・甕片 他片
26	30.0	1.2	36.00	(中世～近世)耕作溝・(古代～中世)土坑・小柱穴 他 （遺物包含層確認）	土師器片・瓦器椀 他片
27	2.4	2.4	5.76	（遺物包含層確認）	土師器片
調査面積合計			1160.37		

表２　試掘調査成果概要一覧表

第２節　平成20年度発掘調査成果

平成20年度の発掘調査区は、幅２ｍの南北に細長い調査区である（図版５ａ）。調査区の長さが290ｍと長いため、周辺に残存する条里地割を利用し、坪境を境とし、北端部を20－１区（長さ72ｍ）、中央部を20－２区（長さ114ｍ）、南端部を20－３区（長さ109ｍ）、中央部の東西方向部分を20－４区（長さ23ｍ）と呼び分けた（第３図）。調査区総延長は、318ｍとなる。

現地表の標高は、最も高い調査区南端でT.P.125.0ｍ、北端でT.P.117.9ｍ、比高7.1ｍである。発掘調査で検出された地山上面の高さは、南端でT.P.124.5ｍ、北端でT.P.116.4ｍ、比高8.1ｍである。

１．20－１区

（層位）　調査前までは、田圃であった。耕土・床土を除去すると、中世の遺物包含層が現れるが、所によっては、花崗岩のばいらん土の地山がすぐに検出された。

（段）　調査区北端から32ｍ南の箇所で、花崗岩風化砂粒の入る地山層が北東側に落ち込んでいた（図版５ｂ）。調査区北端では、深さ1.6ｍに達した。埋土は、小石まじりの灰色粘土で、５層に分層された。最下層の厚さ40cmに達する鉄分まじり灰色粘土層中やその上の厚さ25cmの灰色粘土層から鎌倉時代の瓦器・土師器などが出土したことから、その時代の段落ちと判明した。埋土がほぼ水平に堆積し続けている状況からすると、この段は、途中で、断面に溝状の落ちも認められたことから、水田利用されながらも徐々に埋まっていったものと判断された（図版５ｄ）。

なお、この段の下の部分、調査区北端から13ｍの箇所では、地山層が東西方向に幅65cm、高さ20～25cm、土手状に削り残されていた（図版５ｃ）。水田畦畔の可能性が考えられた。

段の肩部近くで、長さ64cm、幅54cm、深さ６cmの楕円形ピットが地山上で検出された。遺物が出土せず、時期不明である。

（中世溝群）　調査区中央部の北寄り15ｍ部分で、厚さ30cmの遺物包含層である灰褐色土の下から、中世の溝群が検出された（図版６ａ）。幅50cmほどの浅い溝が２条ほど、南北方向に30～50cmの間隔をあけて、緩やかな屈曲をもちながら、掘削されていた。西端の溝の南端は東に直角に曲がっていた。

（ピット群）　中世溝群の南側で、ピット群が同じ層位で検出された（図版６ｂ）。径10～40cmの大きさの異なるピットが、細い溝などと共に18個固まって検出された。径40cmの柱穴らしき円形ピットが１ｍ間隔で３個並んでいたが、建物の東西への広がりなどは不明である。柱穴らしきピットの１つは、深さ50cmに達するものであった。

（焼土坑）　ピット群の南側で、焼土坑が同じ層位で検出された（図版６ｃ）。南北1.8ｍ、東西は２ｍ以上伸びていた。溝状を呈していたが、南北へも伸びていた。埋土には、赤い焼土が充満していた。土坑の下層には、径が46cmの円形ピットを含め、３個のピットが連接して検出され

た（図版６ｄ）。西側のピットが一番深く、40・30・20cmの深さであった。

焼土坑の南側75cmの箇所で、東西方向に、２ｍにわたって、幅50～60cm、深さ10cmの溝が一条検出された。埋土は、黒灰色土であった。この溝を切って、南北方向に長さ80cm、幅40cm、深さ12cmの楕円形土坑も検出された。

（大型土坑）　焼土坑の南側で、大型土坑が同じ層位で検出された（図版６ｅ）。南北2.9ｍ、東西２ｍ以上の大きな不整形土坑である。掘削は、２段にわたり、その中央が、南北１ｍ、東西1.2ｍ以上深くなっていた。埋土上層は、灰褐色土で、下層は、暗灰色土であった。土坑は、東側の調査区外に伸びていた。

２．20－２区

20－１区と20－２区を区分する坪境より20ｍ南側は、現耕土の直下が花崗岩のばいらん土である赤褐色土（地山）であった（図版６ｆ）。中世の遺物包含層である灰褐色土は、調査区の北端1.5ｍ部分のみ残存していた。灰褐色土の厚さは、北端で18cm、北側から1.5ｍ以南には残存せず、後世、20－２区北端部は田圃造成によりすっかり削平されてしまった様子である。

（柱穴群）　20－２区北端から20ｍ南側で、現在の田圃は一段上がり（64cm）、遺構面上に後に耕土が盛土された部分には、遺構が良く残存していた（図版７ａ）。調査区北端からだと94ｍ南の箇所で、中世の包含層である厚さ12cmの灰褐色土の下から、径40～60cmのやや隅丸方形気味の柱穴が４個固まって検出された（図版７ｂ）。いずれも、その中央部に径16～20cmの柱痕が残存していた。柱穴の深さは、60～70cmと深かった。

（溝群）　柱穴群の南側に接して、３本の東西方向の溝が検出された。内、１本目は、東側で幅160cm、西側で80cmあり、深さは、９cmであった。埋土は、暗灰色粘土であった。２本目は、２ｍ南側にあり、東側で幅130cm、西側で幅150cm、深さは、29cmあった。溝の幅は、北側に大きく広がっていた。埋土は、暗灰色粘土であった。３本目は、1.5ｍ南側にあり、東側で幅210cm、西側で幅270cm、深さは、24cmであった。暗灰色粘土の埋土中に、小石が多数含まれていた。

溝群の南側１ｍの箇所で、径1.1ｍの楕円形の浅い土坑が検出された。埋土中に、10～20cm大の石が多数含まれていた（図版７ｃ）。

（柱穴群）　20－２区北端から34ｍ南側で、現在の田圃は、さらに一段上がっていた（50cm）。その面には、中世の包含層である灰褐色粘土層の下から柱穴や土坑・溝などの遺構が数多く検出された（図版７ｄ・ｅ・ｆ）。

段の北端から３ｍ南側で、径60・70cmの柱穴が東西方向に1.1ｍ離れて検出された。東側の深さが50cm、西側の深さが40cmであった。埋土は、黄褐色ブロックまじりの黒色粘土であった。

段の北端から９ｍ南側で、径40cmの柱穴が東西方向に0.9ｍ離れて検出された。東側の深さが38cm、西側の深さが35cmであった。共に径16cmの柱痕が残存していた。埋土は、黄褐色ブロックまじりの黒褐色粘土であった。この柱穴列は、古墳時代の掘立柱建物跡と推定された。

また、柱穴にまじって、灰褐色系粘土を埋土とする中世の円形・楕円形土坑なども８基検出された。この面で、大小の花崗岩自然石が多数検出されたが、地山の粘土層中に含まれた自然石が露出している状況であった。

（ピット・溝）　20－２区北端から55ｍ南側で、現在の田圃は、さらに一段上がっていた（73cm）。その面には、その北端部のみに、ピットや溝などの遺構が検出された（図版７ｇ）。ピットは、径40cmの隅丸方形のもので、径16cmの柱痕があった。

そのピットを切って、斜め方向に２条と東西方向に１条の溝が検出された。溝の幅は、20～35cmで、深さは６cm、埋土は中世の灰褐色土であった。

その溝から16ｍ南までは、現耕土・床土のすぐ下が地山で、遺構は残存しておらず、田圃造成により削平されてしまった様子である。

（建物ピット・溝）　20－２区北端から74ｍ南側で、現在の田圃は、さらに一段上がっていた（50cm）。その面には、その北側半分の範囲に、厚さ30cmの灰褐色土（遺物包含層）の下層から、建物ピットや溝などの遺構が検出された（図版８ａ）。建物ピットは、南北方向に径34・38cmの円形ピットが２個、1.7ｍ離れて検出された。ピットの中央に15・16cmの柱痕が残っていた。ピットの深さは、北側が32cm、南側で28cmで、埋土は灰色土層であった。

ピットの周辺には、幅20～40cmの中世の溝が、斜め方向と南北・東西方向に固まって検出された。深さは、２～７cmと浅いものであった。

溝の南側11ｍの箇所で、東西方向の溝が検出された。東側で、幅１ｍ、西側で幅70cmあり、深さは10～12cmであった。この溝の周辺、南北15ｍの間は、灰褐色土の堆積もなく、現耕土・床土を除去すると、即地山で、遺構の残存は少なかった。

（土坑・ピット群）　20－２区北端から100ｍ南側で、現在の田圃は、さらに一段上がっていた（30cm）。その面には、厚さ10～20cmの灰褐色土の堆積もあり、その下層にも北側で厚さ30cmの鉄分まじりの灰褐色土の堆積もあった。いずれも、田圃の南側を削り、北側に盛って、一枚の田の面積を広げるための造成工事による堆積層であった。両層の下層から、土坑やピット群が検出された（図版８ｂ）。

土坑11は、調査区の東壁隅でその西側部分が検出されたもので、南北方向で長さは50cmあった。土坑の底からは、茶褐色・生焼けの古墳時代後期の須恵器甕の大破片（図版10ｄ）が出土した。青海波のついた体部内面を上に向けて、埋置されていた。

土坑11の南側1.4ｍの箇所には、径20～40cmのピットが８個検出された。いずれも、径15～20cmの柱痕が残存していた。ピットの深さは、37～44cmであった。ほぼ１ｍ間隔で検出されたピットの並びの方位は、正方位から45度傾いているが、２間×２間の総柱の建物が復元された。

建物の南側3.5ｍで、長さ2.1ｍ以上、幅1.1ｍ、深さ５cmの浅い楕円形土坑も検出された。土坑の南側４ｍで、坪境となる。

３．20－３区

20－２区と20－３区を区分する坪境の北側と南側では、地山面で30cmの段差があった。

（溝・ピット群）　坪境から南に６ｍの箇所で、灰褐色土の下から、南北方向に幅20～30cmの溝が長さ10ｍにわたって検出された。その北端に、小ピットがあり、東側に枝分かれしていた。

その溝の南側1.4ｍの箇所で、東西方向に幅20～60cmの溝が平行して７条検出された。その南端の溝は、西側端部が北側に折れ曲がっていた（図版８ｃ）。

溝の南側に、径35～45cm、深さ６～８cmの浅い楕円形ピットが３個、幅20～40cmの溝が80cm離れて、平行に検出された。溝の南西隅に径20～40cmの小ピットや土坑が４基検出された。

（溝群）　坪境から南に28ｍの箇所で、地山面で30cmの段差があった。その面の北側部分で、溝や土坑・ピットなどが検出された。

溝は、幅20～30cmのものが南北方向に３条、東西方向に３条、交差して掘られていた。溝の北端部には、径1.7ｍの楕円形土坑や小ピットも２個検出された（図版８ｄ）。

溝群の南側1.2ｍの箇所で、径25cmの柱穴が検出された。径14cmの柱痕が残存していた。

柱穴の南側10cmの箇所で、東西方向の溝が検出された。東側で、幅70cm、西側で幅１ｍ、深さ８cmあった。

その溝の南側2.5ｍの箇所で、東西方向の溝が検出された。幅15～20cm、深さ６cmの浅いものであった。この溝より南側に、遺構は検出されなかった。

４．20－４区

20－２区と20－３区を区分する坪境から西側に23ｍ、緩やかに曲がるのが20－４区である。

20－４区は、耕土・床土を除去すると、風化ばいらん土の地山であった。地山上にピットが３個、土坑が４基検出された（図版８ｂ）。

ピットは、径が20～30cmの小さいもので、土坑は、長さが60・90cmの楕円形土坑が２基、長さが90cmと1.9ｍのものが２基であった。土坑の内、大きなものは、調査区外に、その主要部が伸びているもので、長さ30cmの石などが含まれていた。

５．出土遺物（第11図・図版９・10）

土坑11から出土した須恵器（17）を除いて、すべて地山上層に形成された旧耕作土からの出土である。

須恵器17は比較的大きな破片で土坑11の底に敷かれる常態で出土している。接合できたのは頚部直下・体部・底部に近い体部で、その他に１点口縁端部の小片が出土している。図版10に示した以上に接合できなかったので、ある程度破砕した後埋置されたようである。体部最大径が28cm程度に復元される小型の甕である。やや内湾気味に立ち上がる口縁端部の外面直下に小さい突帯をつまみ出すように端部を強くナデている。体部外面は左上がりの平行タタキ、内面は同

心円のあて具痕を残す。焼成は軟らかく茶褐色を呈しており、明らかに窯焼成ではない。胎土古墳時代後期のものであろう。

古墳時代の遺物としては、須恵器器台（15・16・32)、坏（13・14・30・31）が出土している。坏身（13）は陶邑Ⅱ型式２段階、坏身（14）底部はヘラ切り不調整。器台（15）は脚柱部の小破片であるが、やや古い様相を示すか。全体として古墳時代後期６世紀後半以降の遺物を中心としながら、それ以前の遺物を少し含む状況である。

８世紀以降12世紀ごろまでの遺物の出土はほとんどない。13世紀以降の遺物が多い。12は東播系須恵質ねり鉢で13世紀初めころ、その他瓦器・土師器皿等の遺物は13世紀代のものである。33は中国製青磁碗口縁部小片、２は白磁碗口縁部である。１は近世陶器小皿、現代耕土の直下灰色土からの出土である。

石器は現代耕作土から下層の地山直上層まであらゆる層から出土しいている。表面は灰色に風化しており、すべて縄文時代の遺物である。19は石錐で刃部を欠損しているが刃部の基部にまで強い擦痕がある。23は掻器、尖端部には強い剥離痕がある。20は図下辺の刃部には連続する微細な剥離があり使用痕が認められる。そのほか、図版10下25から29は石器製作に伴う剥片である。

６．小結

幅は２ｍであるが、南北290ｍを調査した結果、様々なことが判明した。出土遺物は、遺物収納用コンテナに２箱である。

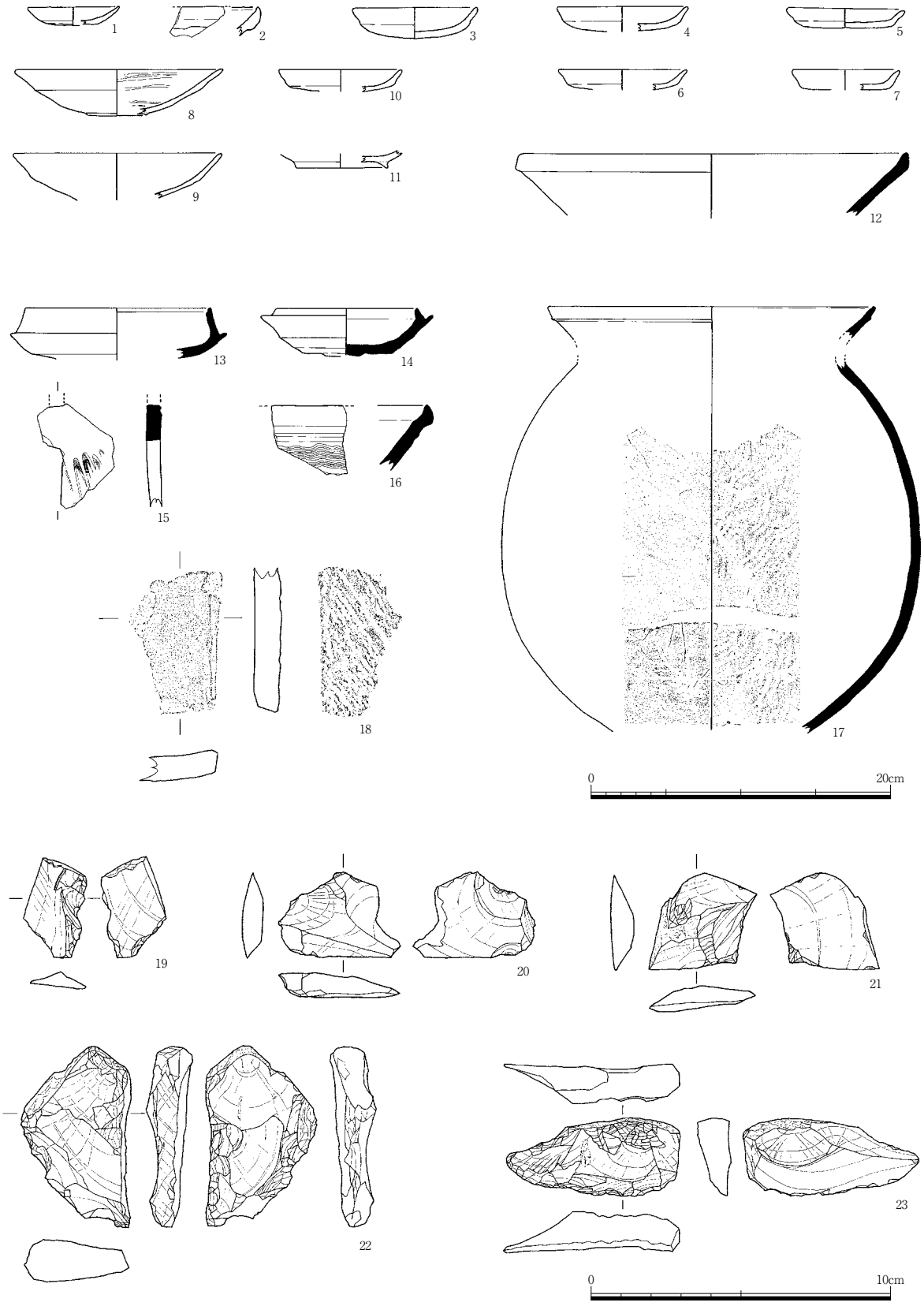
① 中世包含層などから、外面が灰色に風化したサヌカイト製削器や石錐、剥片が多数出土したので（図版10ｃ）、近辺に縄文時代の石器製作址の存在が推測された。

② 20－２区で古墳時代後期の須恵器・土師器を含む遺物が出土し（図版９ａ）、黒褐色土を埋土とする柱穴群や土坑・溝が検出されたので、古墳時代後期の集落跡の存在が判明した。

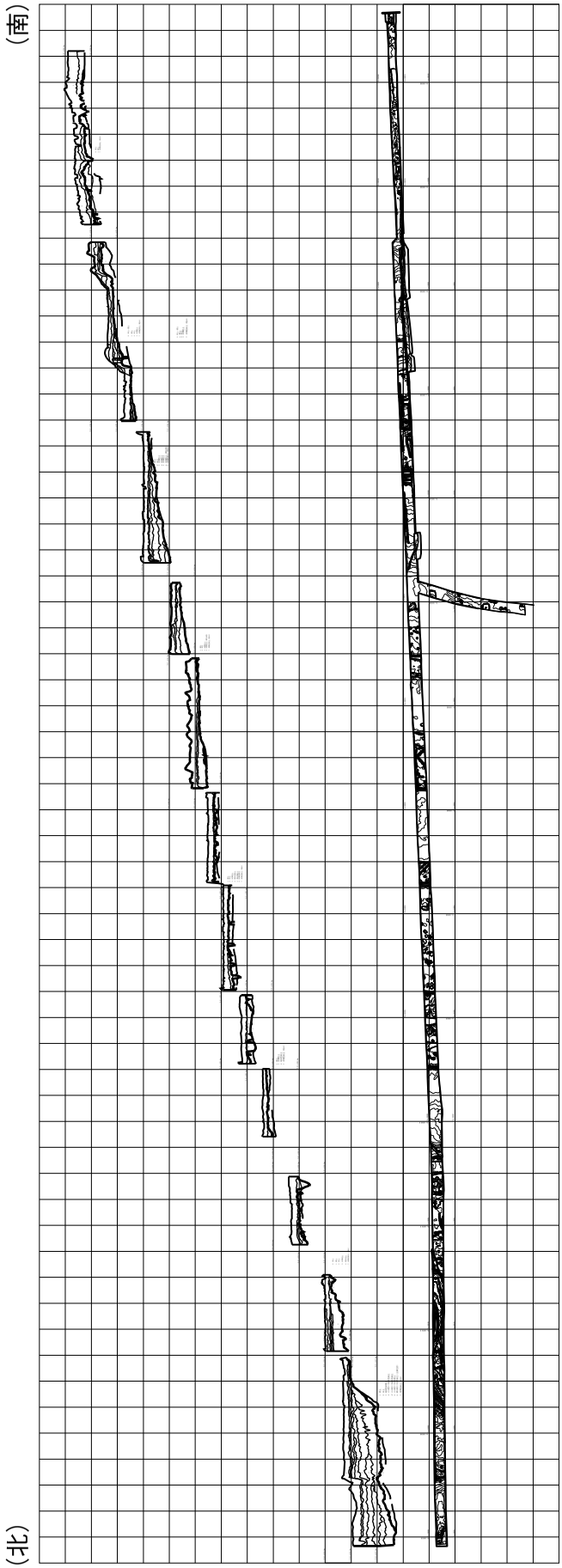
③ 全調査区で、中世、鎌倉時代の瓦器・土師器・平瓦・玉縁式丸瓦・東播ねり鉢・青磁・白磁などを包含する遺物包含層が検出され（図版10ｂ）、柱穴群や土坑・溝が多数検出されたので、中世集落跡・水田・畑遺構の存在が判明した。

④ 調査地の南北で比高差が11ｍあり、その斜面を13段の水田で分割していた。坪境での区画割り、水田の造成は、中世、鎌倉時代以降のものと推測された。

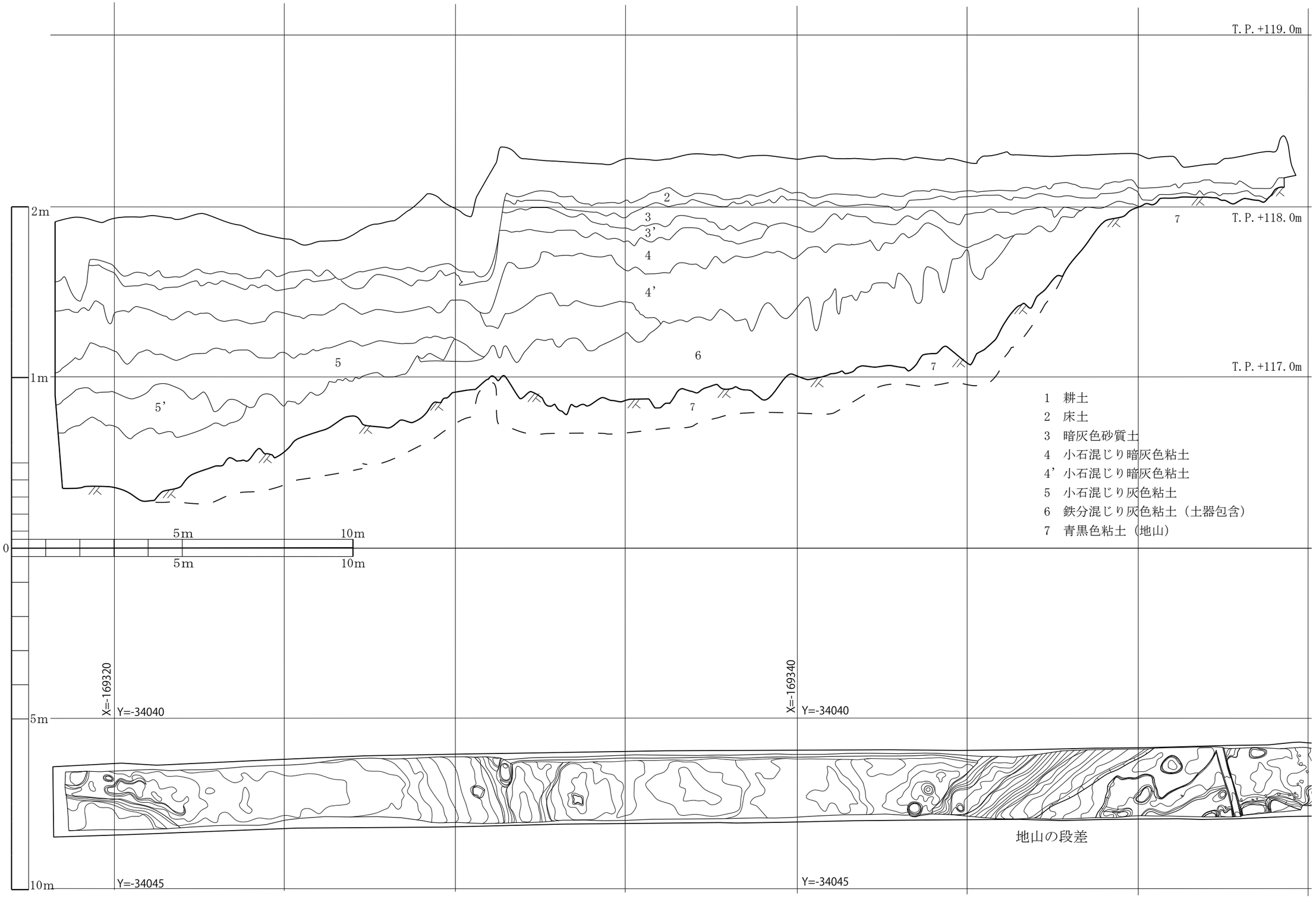
⑤ 南が高く、北が低い自然地形を雛壇造成するのに、南側の土地を削って北側に盛り、水田を作ったため、それ以前の遺構は水田の北側にはよく残っていたが、削られた南側は即地山層であった。地山は、一抱えもある花崗岩が含まれている土石流堆積で、石の除去には、相当の労苦が伴ったものと推測された。



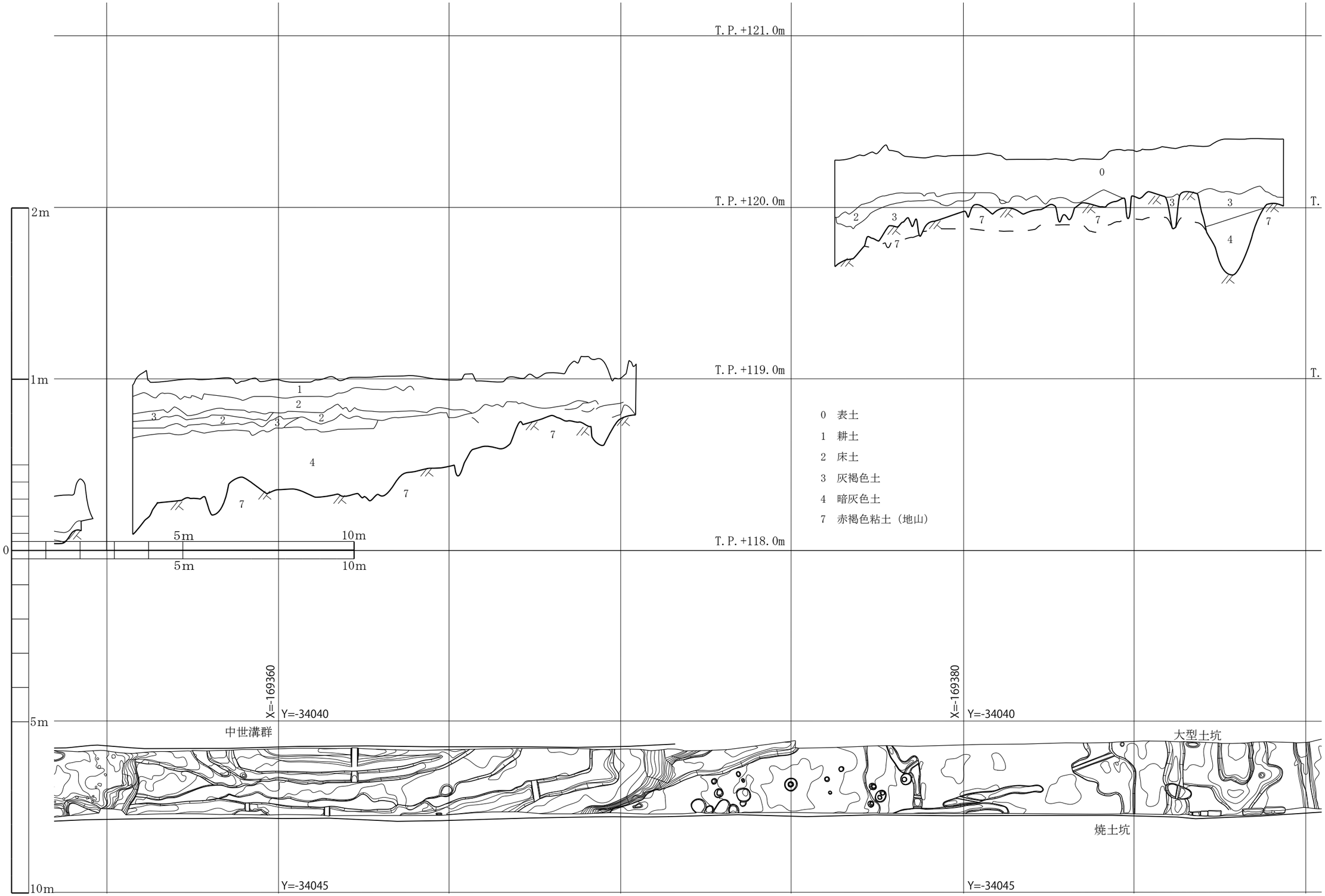
第11図　20年度調査区　出土遺物



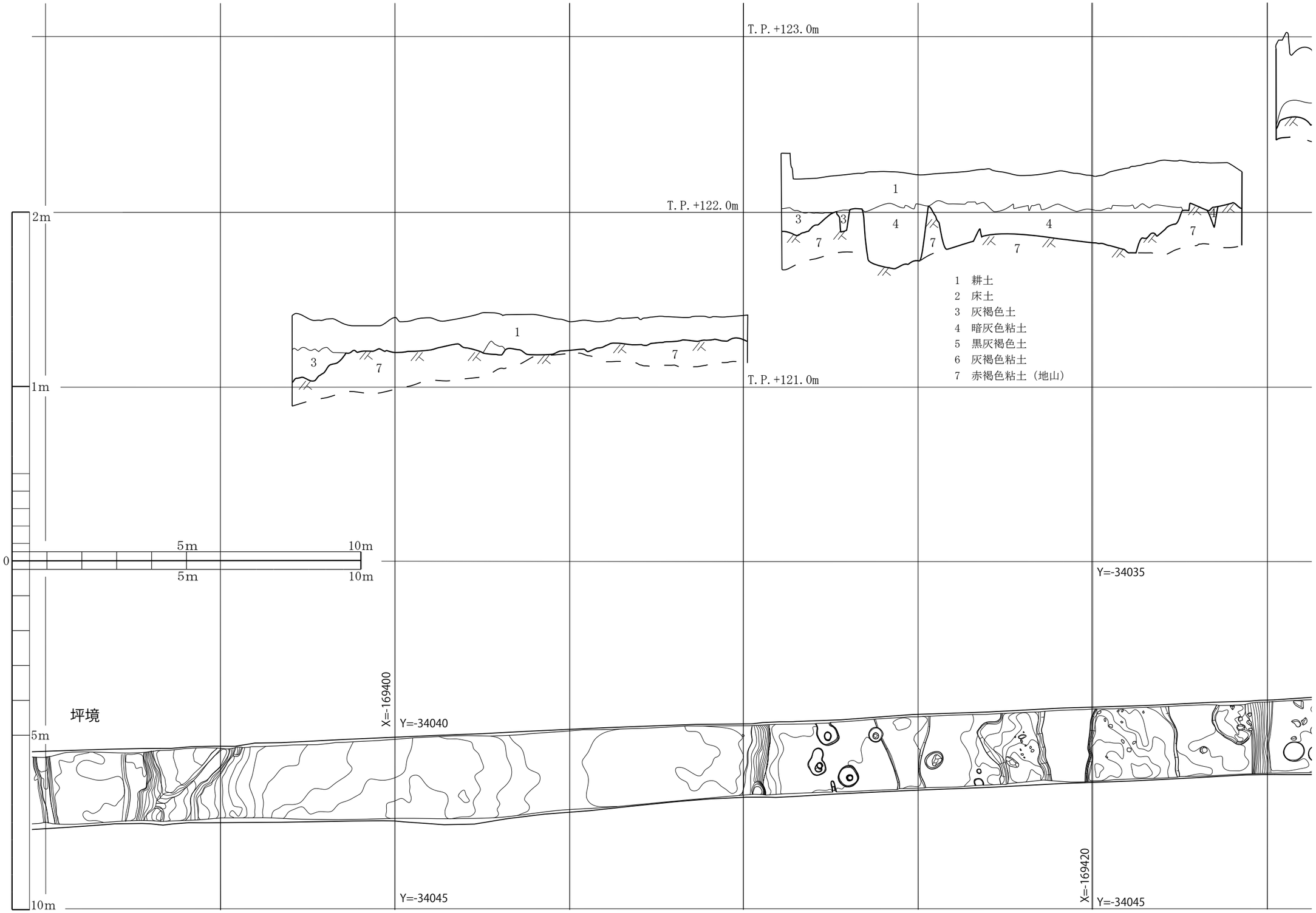
第12図　20年度調査区　遺構平面図・断面図模式図　1（全体図）



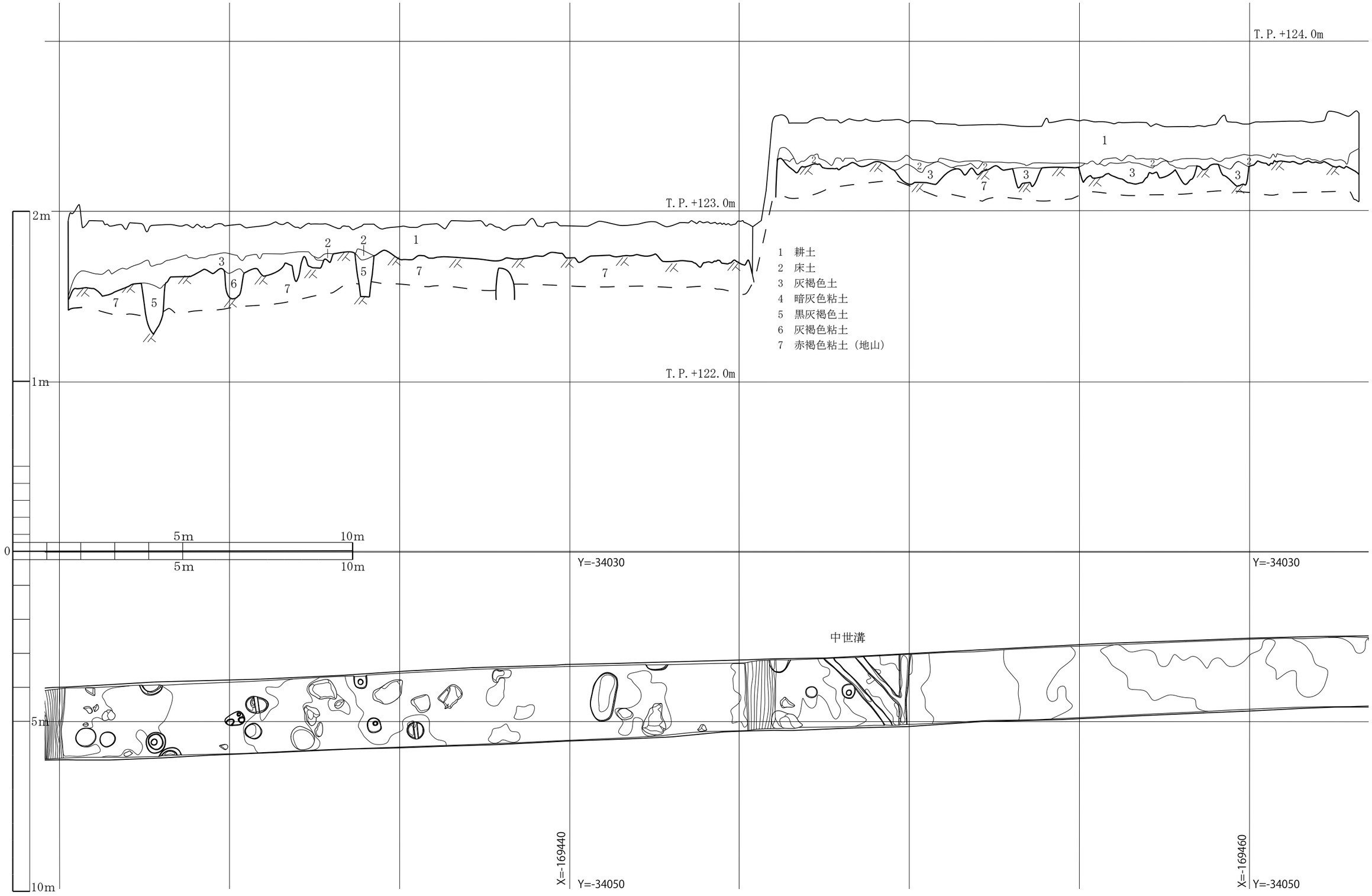
第13図　20年度調査区　遺構平面図（1/100）断面模式図（縦1/40横1/100）　2



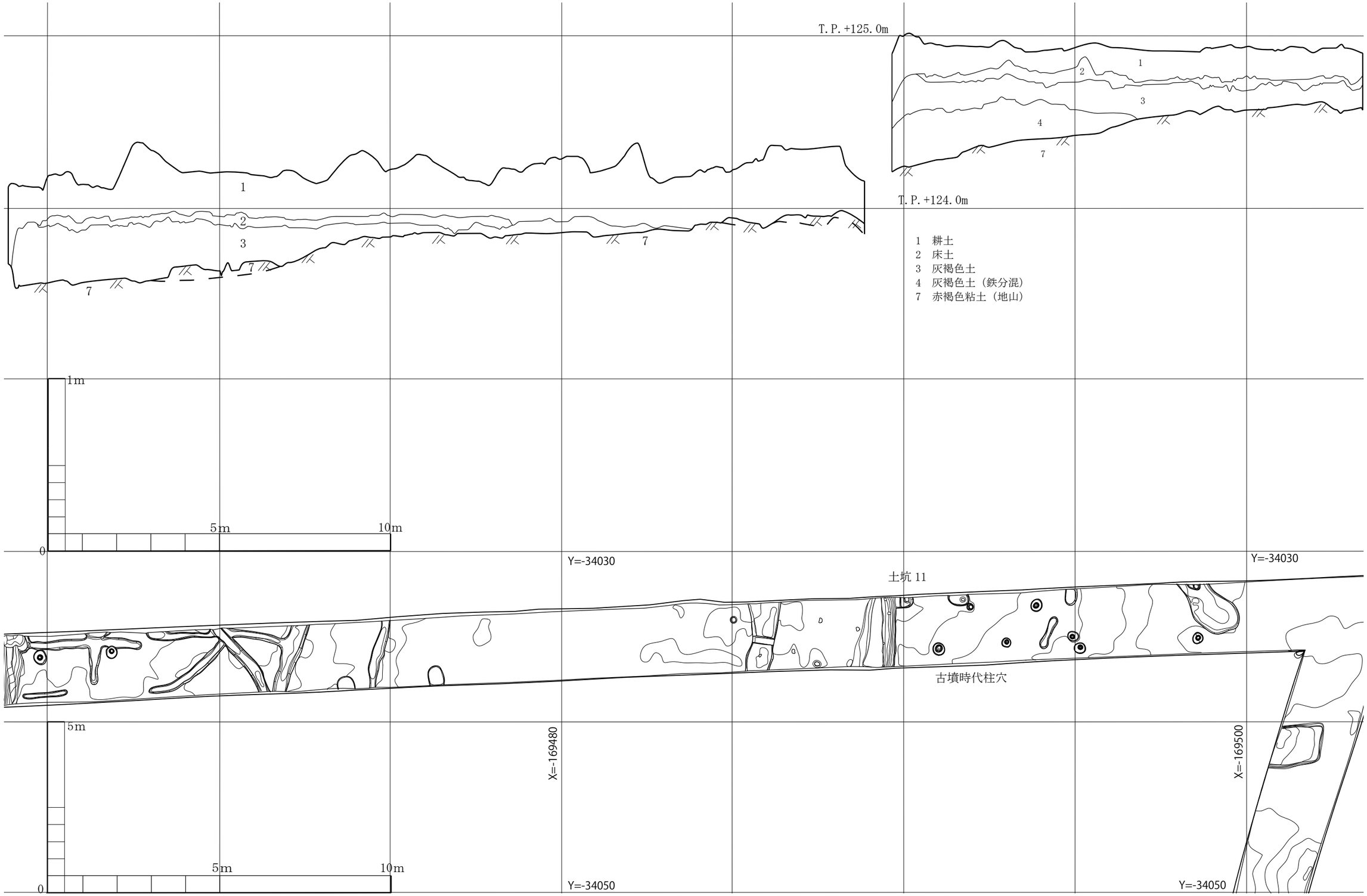
第14図　20年度調査区　遺構平面図（1/100）断面模式図（縦1/40横1/100）　3



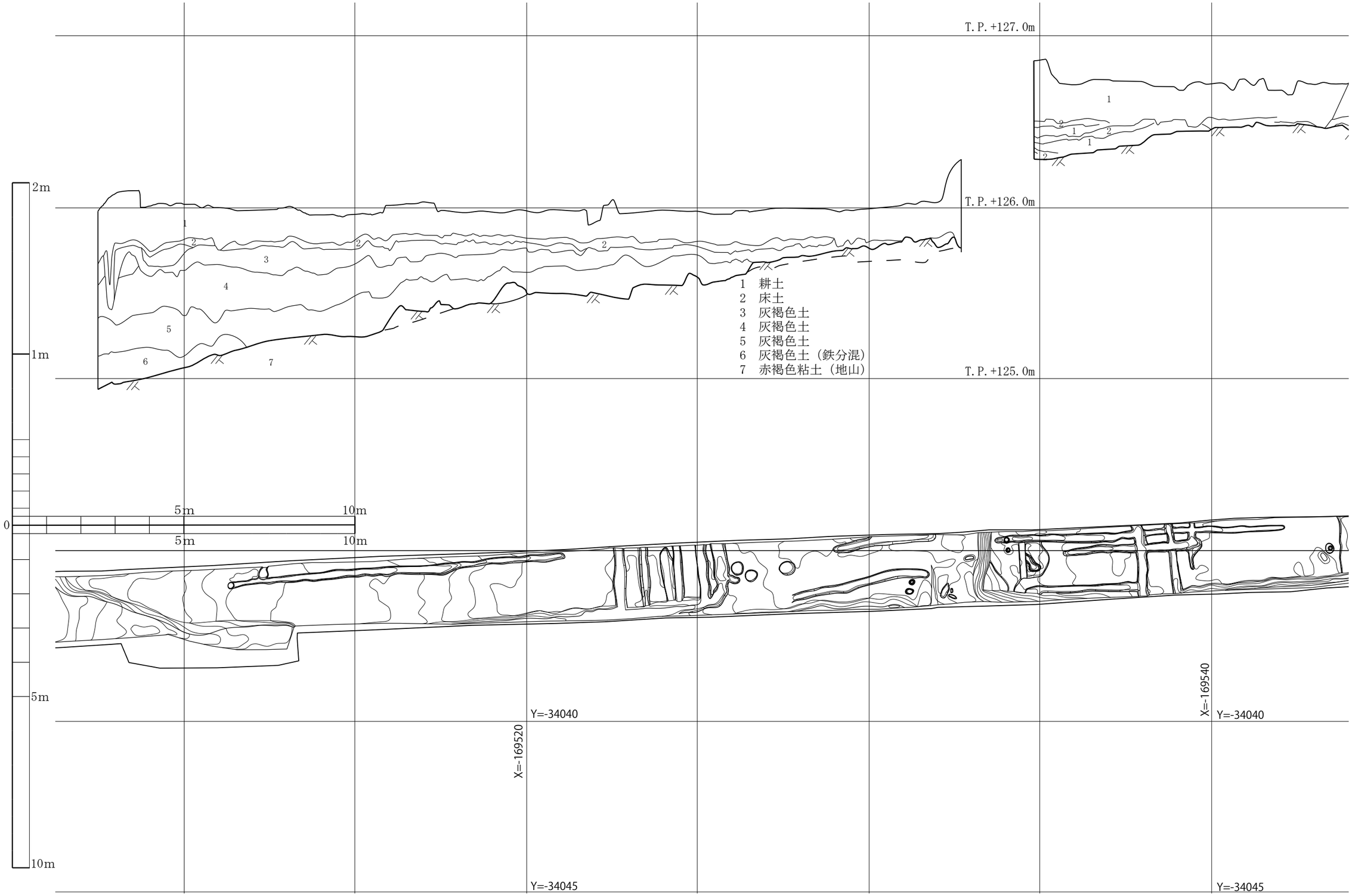
第15図　20年度調査区　遺構平面図（1/100）断面模式図（縦1/40横1/100）　4



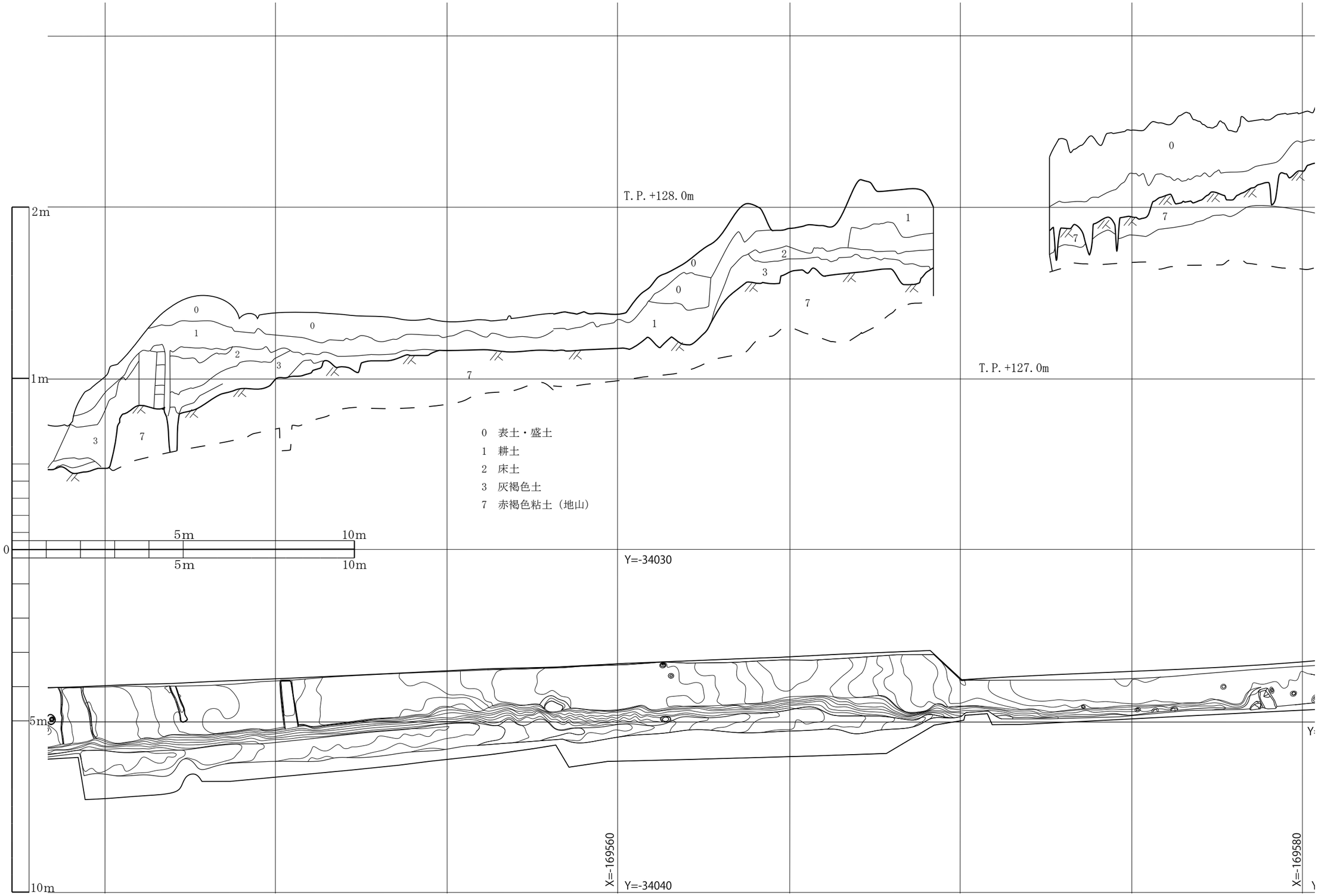
第16図　20年度調査区　遺構平面図（1/100）断面模式図（縦1/40横1/100）　5



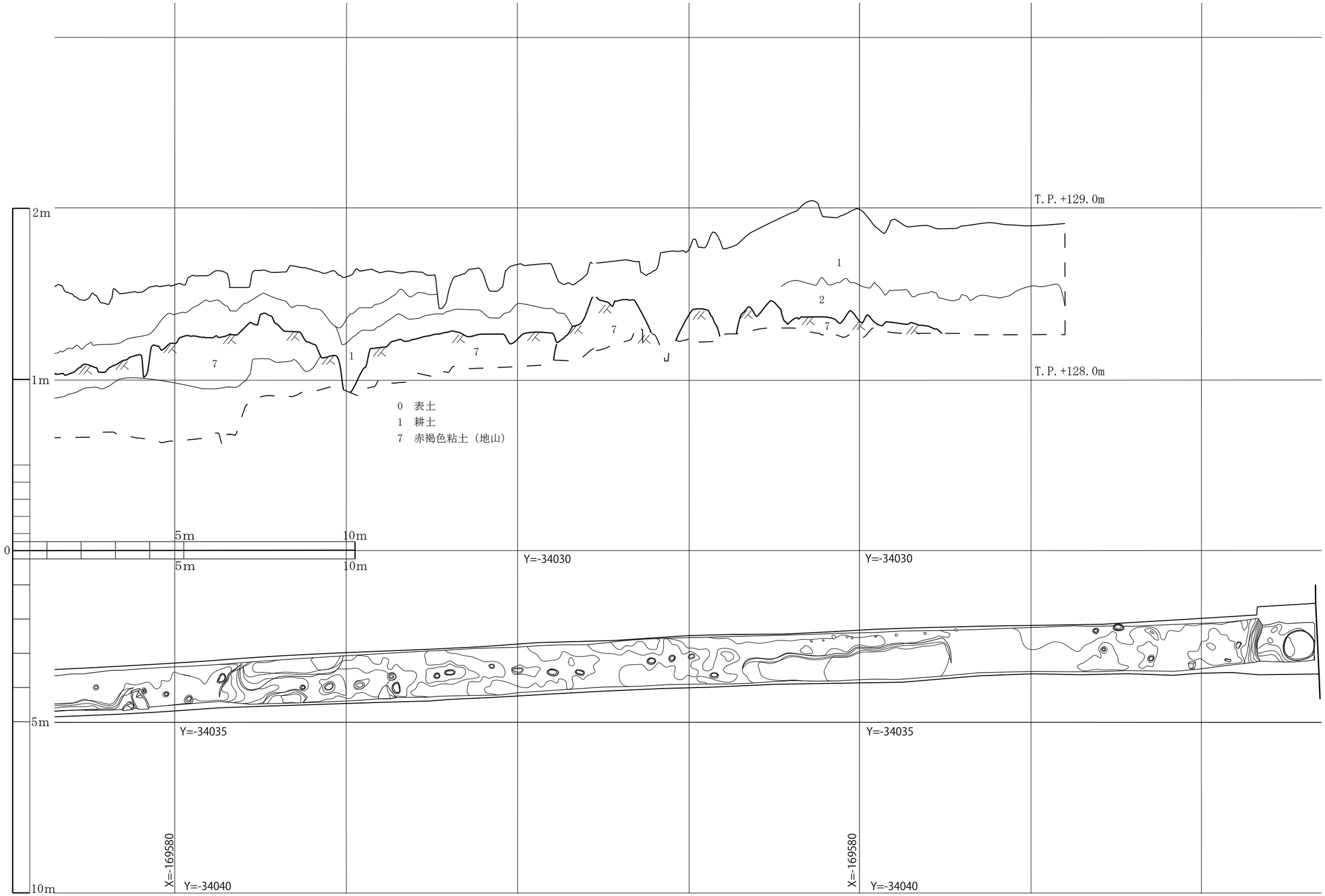
第17図　20年度調査区　遺構平面図（1/100）断面模式図（縦1/40横1/100）　6



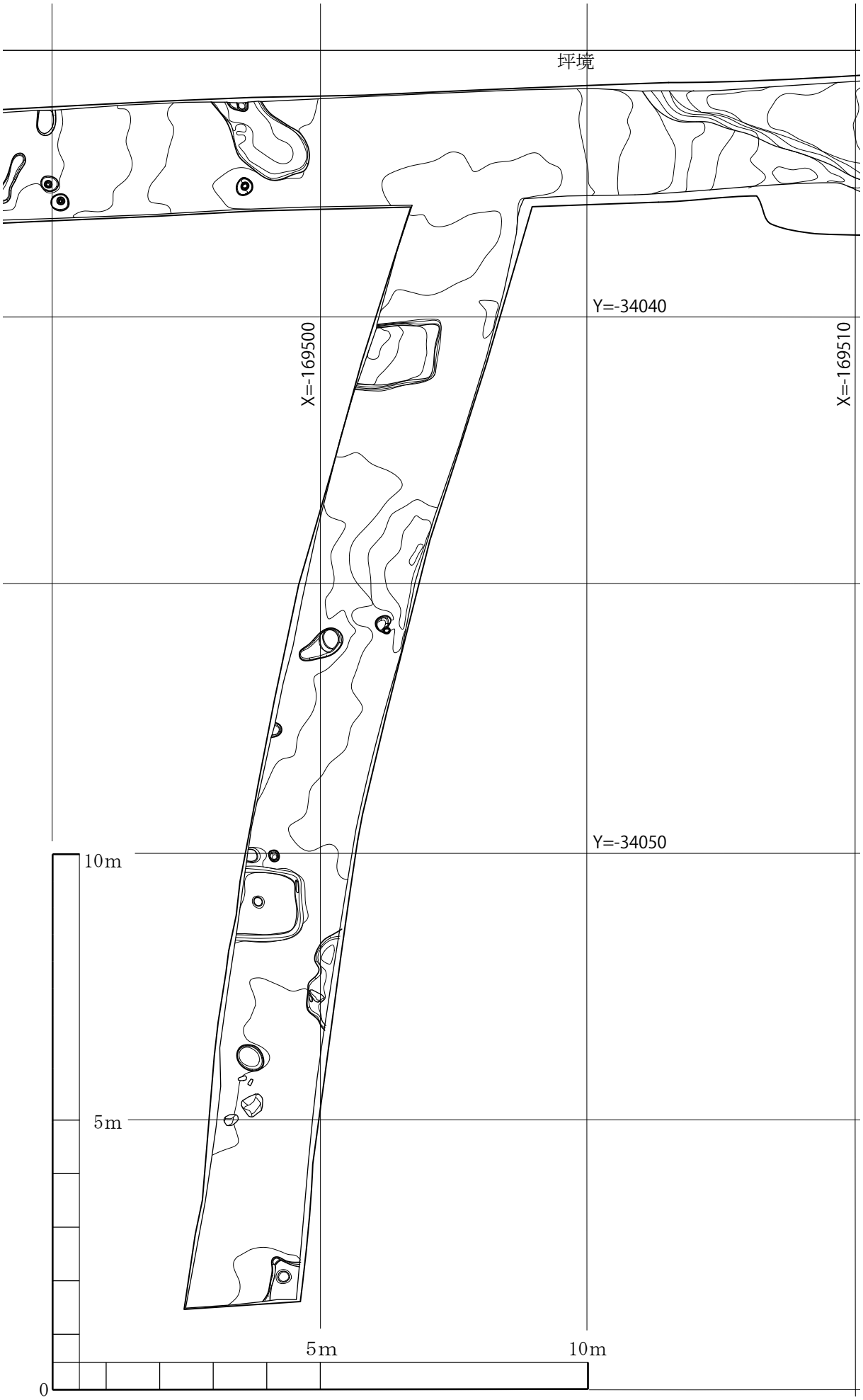
第18図　20年度調査区　遺構平面図（１/100）断面模式図（縦１/40横１/100）　7



第19図　20年度調査区　遺構平面図（１/100）断面模式図（縦１/40横１/100）　8



第20図　20年度調査区　遺構平面図（１/100）断面模式図（縦１/40横１/100）　9



第21図　20年度調査区　遺構平面図（1/100）　10

第３節　平成21年度発掘調査成果

調査経緯　（第22図）

平成21年度の発掘調査地は、金山古墳の位置する丘陵と谷部を挟んで北側に伸びる小尾根丘陵の頂部、丘陵中腹部へ至る急斜面部、丘陵中腹の段丘部にあたる。前年度の発掘調査に引き続き、道路予定地西側の用水路の切り替え部分と擁壁部分の調査を行なった。南側から小尾根丘陵頂部に21－６区（34.5㎡）・21－１区（264㎡）・21－２区（201.5㎡）を、丘陵斜面部には21－３区（70㎡）・21－４区（136㎡）、丘陵中腹段丘部には21－５区（264㎡）を設定した。概ね幅３～７ｍで南北方向に伸びる細長い調査区である。調査区総延長は181.5ｍ、調査面積は総計970㎡を測る。

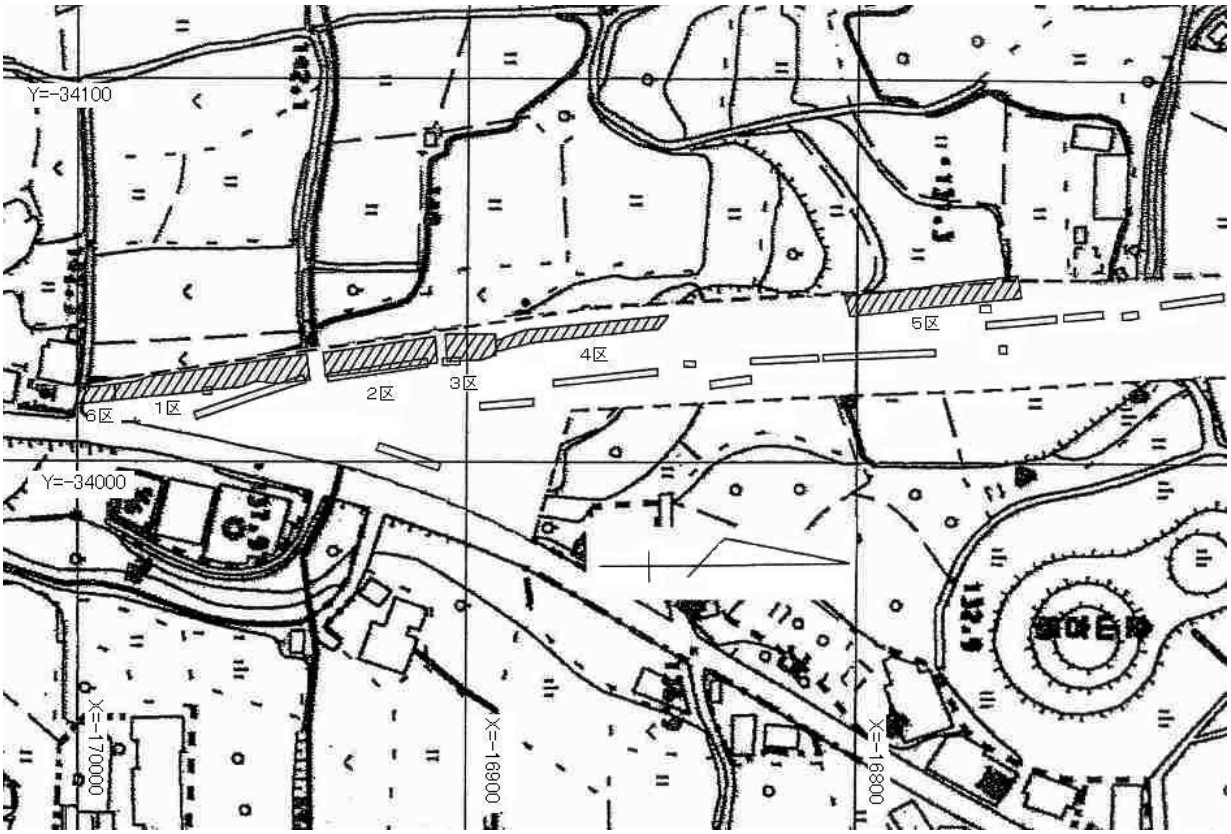
基本層序（第23図）

調査地における基本的な土層の堆積は、概ね８層に大別することができる。

第０層　（１・２・３）　現況地盤の表土層および盛土層。主に傾斜面地では黒褐色砂質土の表土（３）、耕地整備された段全部などでは褐色レキ・砂が多く混じる盛土層（２）が見られた。

第１層　（４・５・６）　調査区全域で見られた現代耕土層。黒褐色土ないしオリーブ黒色土に黄褐色ブロック土が混じる粘質シルトを基本とする層で、調査区全域で確認することができた。わずかに陶磁器片、土師器片などが混じる。下層面には黄褐色に鉄分沈着層が見られた。

第２層　（７・８・９）　黄灰褐色ないしオリーブ黒色粘質シルトを基本とする堆積層で、中世の旧



第22図　21年度調査区位置図

耕作土層である。上層の第１層現代耕土層の削平をうけるが、段々に整地された耕作地の段前部で確認することができた。部分的に２～３層に細分することができる。土層内からは瓦器椀、土師質小皿・羽釜、瓦質甕などが出土した。第２層下面で、ピット、スキ溝、溝、土坑などの遺構を検出した。

第３層　(10･11･12)　褐灰色ないしにぶい黄褐色粘質シルトを基本とする堆積層で、古代末から中世の旧耕作土層である。第２層同様に上層の削平をうけ、耕作地段前部で確認することができた。部分的に２～３層に細分することができる。土層内からは黒色土器、土師器皿、須恵器片などが出土した。第３層下面で、ピット、溝、焼土坑などの遺構を検出した。

第４層　(13･14)　黄灰褐色ないし褐灰色土を基本とする堆積層で、古代および中世の遺物包含層である。(13) 黄灰褐色小レキ混じり粘質シルト層は、21－１区下段北東部から21－２区南東部で確認された。所により炭化物が含まれる。土層内からは土師器片、黒色土器片などが出土した。(14) 黒褐色および褐灰色小レキ混じり粘質シルト層は、21－２区北東部から21－３区南東部のわずかな範囲で確認された。土層内からは土師器小皿・皿などが出土した。

第５層　(15･16･17)　オリーブ黒色レキ混じり土を基本とする堆積層で、人頭大レキや小レキを多く含む。21－６区で南から東方向に落ちる谷部を埋めた埋土である。いく度かにわたり埋められたらしく、細分することができる。いずれも、こぶし大レキ・人頭大レキを多く含む。遺物は陶磁器片がわずかに出土した。

第６層　(18･19･.20)　にぶい黄褐色土を基本とする堆積層である。主に21－４区の斜面地の堆積土層である。砂やレキが多く混じり砂質土や砂混じり土となる。遺物はわずかに土師器の細片が出土した。

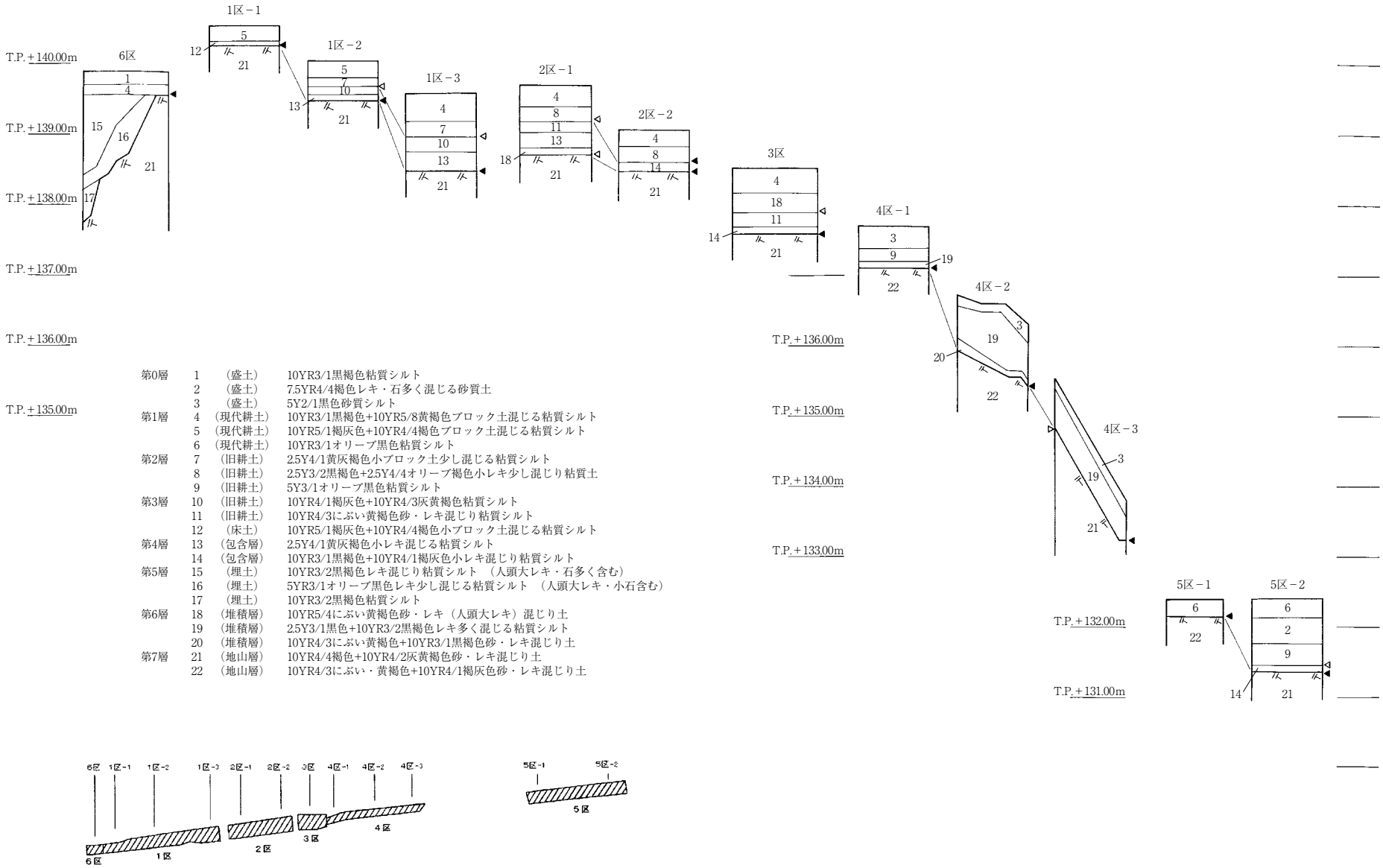
第７層　(21･22)　地山相当層である。褐色レキ混じり土を基本とする。砂レキ、人頭大レキなどを多く含む。ところにより花崗岩の風化したばいらん土を含む。耕作地段後部ではほとんどが現代耕土層の直下で地山層となる。地山直上面では石槍やサヌカイト剥片などが見られた。

１．21－６区　(図版12a)

調査地最南端の調査区で、用水路の取り付け部である。幅2.5～3.5ｍ、延長約11ｍで調査面積は34.5㎡を測る。21－６区は、調査前には作業小屋が建っており、地盤はコンクリート舗装されていた。調査に際しコンクリート撤去作業が行なわれたため、最後に調査に取りかかった。

コンクリート舗装および盛土層を撤去すると、調査区北側で旧耕土層が見られた。旧耕土層を除去するとレキが多く混じる褐色土の地山層となる。検出高は､T.P.139.5～139.6ｍを測る。地山層は、調査区の北から約２ｍ付近から南東側に向って一段低くなる。さらに、調査区中央部付近から南西側に向けて一気に低くなり谷部に至る。高低差は４ｍ以上を測る。調査区南側では、いく度かにわたり谷部を埋めたようであるが、一時期組まれた石垣の一部が埋まっていた。

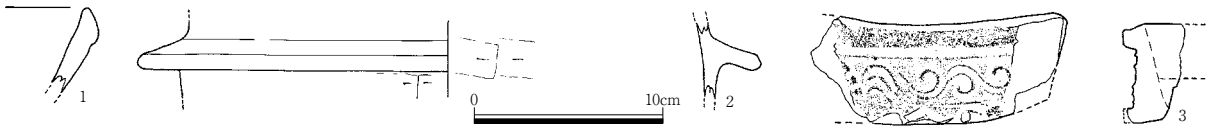
石垣は、一辺約50cm大の方形状の川原石が南北方向に２～３段積みで約４ｍ、南端で西方向



第0層	1	（盛土）	10YR3/1黒褐色粘質シルト
	2	（盛土）	7.5YR4/4褐色レキ・石多く混じる砂質土
	3	（盛土）	5Y2/1黒色砂質シルト
第1層	4	（現代耕土）	10YR3/1黒褐色+10YR5/8黄褐色ブロック土混じる粘質シルト
	5	（現代耕土）	10YR5/1褐灰色+10YR4/4褐色ブロック土混じる粘質シルト
	6	（現代耕土）	10YR3/1オリーブ黒色粘質シルト
第2層	7	（旧耕土）	2.5Y4/1黄灰褐色小ブロック土少し混じる粘質シルト
	8	（旧耕土）	2.5Y3/2黒褐色+2.5Y4/4オリーブ褐色小レキ少し混じり粘質土
	9	（旧耕土）	5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト
第3層	10	（旧耕土）	10YR4/1褐灰色+10YR4/3灰黄褐色粘質シルト
	11	（旧耕土）	10YR4/3にぶい黄褐色砂・レキ混じり粘質シルト
	12	（床土）	10YR5/1褐灰色+10YR4/4褐色小ブロック土混じる粘質シルト
第4層	13	（包含層）	2.5Y4/1黄灰褐色小レキ混じる粘質シルト
	14	（包含層）	10YR3/1黒褐色+10YR4/1褐灰色小レキ混じり粘質シルト
第5層	15	（埋土）	10YR3/2黒褐色レキ混じり粘質シルト　（人頭大レキ・石多く含む）
	16	（埋土）	5YR3/1オリーブ黒色レキ少し混じる粘質シルト　（人頭大レキ・小石含む）
	17	（埋土）	10YR3/2黒褐色粘質シルト
第6層	18	（堆積層）	10YR5/4にぶい黄褐色砂・レキ（人頭大レキ）混じり土
	19	（堆積層）	2.5Y3/1黒色+10YR3/2黒褐色レキ多く混じる粘質シルト
	20	（堆積層）	10YR4/3にぶい黄褐色+10YR3/1黒褐色砂・レキ混じり土
第7層	21	（地山層）	10YR4/4褐色+10YR4/2灰黄褐色砂・レキ混じり土
	22	（地山層）	10YR4/3にぶい・黄褐色+10YR4/1褐灰色砂・レキ混じり土

第23図　各調査区断面柱状図

第24図　全調査地遺構平面図



第25図　21－６区　出土遺物

に屈曲して約1.5ｍ並ぶ。敷地の南東端にあたる。石垣を埋めた埋土からは、わずかに軒平瓦（３）、陶磁器、土師質羽釜（２）、瓦質片口鉢（１）などが出土した。現在、調査区の東側をほぼ南北方向に道路（主要地方道柏原駒ヶ谷千早赤阪線）が伸びているが、道路整備をする際に谷部を埋め、水路を暗渠とし埋設したようである。石垣も道路整備の際に埋められたようである。

２．21－１区　(図版12・13)

21－１区は、南側から伸びる小尾根状丘陵の頂部にあたり、南北方向に細長い調査区である。幅４～７ｍ、延長約44ｍで、調査面積は264㎡を測る。現況は、段々に開墾された耕作地で、南西側の上段部、調査区の広範囲をしめる中段部、調査区北側で一段下がる下段部に大別できる。

現代耕土層を除去すると、耕作地の上段部から中段部の南側で、褐色および灰黄褐色レキが混じる地山層となる。調査区中段中央部から北側の段前部では、黄灰褐色土ないし褐灰色土の旧耕土層や黄灰褐色土の遺物包含層が見られた。地山直上層では、建物ピット、溝、土坑などの遺構を検出した。検出高は、上段部でT.P.140.2ｍ、中段部でT.P.139.1～139.6ｍ、下段部でT.P.138.5～138.8ｍを測る。調査区中段部で試掘調査時の試27区が、下段部では試26区が架かる。

掘立柱建物・柵列　(第26図・図版13)

調査区の中段部および下段部で、直径20～50cm程の大きさが異なるピットを検出した。中でも掘立柱建物や柵列となる柱穴列がいくつか見られた（表３）。

柱穴列１は、調査区北側の下段部で検出した。段落ちのラインに沿ってピットが並ぶ。桁行２間ないし３間、梁間１間で、主軸方向はＮ－43°－Ｗを示す。建物になると考えられる。ピットは直径約40cmの隅丸方形状で、深さは10～40cmを測る。P104内から土師質小皿片が出土した。

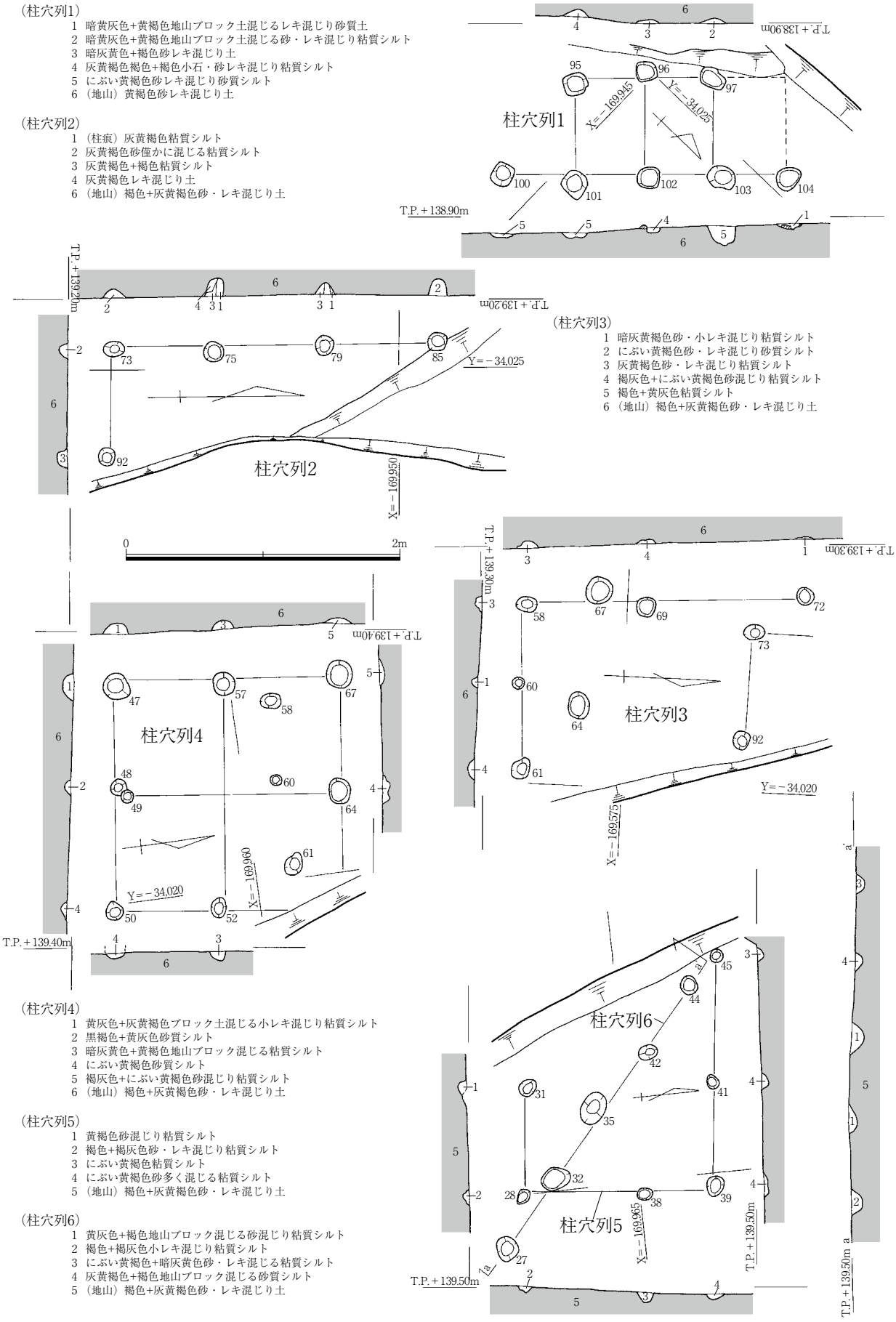
柱穴列２～７は、調査区の中段部で検出した建物柱穴列および柵列である。柱穴列２は、中段の北側部で検出した。桁行３間、梁間１間の検出であるが、東側の調査区外に伸びると思われる。また、北側は下段の区画整備をした際に、一部削られたようである。建物になると考えられる。主軸方向はほぼ真北を示す。P75・P85 内から黒色土器椀片、土師器細片などが出土した。柱穴

掲載番号	調査	形態	桁行		梁間		柱間（m）	方位	柱形状	柱穴　(m)		挿図
			間	(m)	間	(m)				規模	深さ	
列1	21-1区	建物	4	5.50	1	1.80	1.25～1.8	N- 43°-W	隅丸方形	0.4～0.5	0.1～0.4	第26図
列2	21-1区	建物	3	6.00	1	2.00	1.8～2.0	N- 0°-W	円形	0.3～0.5	0.15～0.35	第26図
列3	21-1区	柵列	2～3	5.00	2	3.00	1.5～2,7	N- 1°-W	楕円・円形	0.2～0.4	0.2～0.4	第26図
列4	21-1区	建物	2	4.20	2	4.20	2.1	N-7°-W	円形・隅丸方形	0.3～0.5	0.2～0.3	第26図
列5	21-1区	建物	2	4.20	2	3.50	1.4～2.3	N-7°-W	楕円	0.25～0.4	0.1～0.2	第26図
列6	21-1区	柵列	4	6.00	—	—	1.5	N-50°-W	楕円・円形	0.3～0.5	0.15～0.2	第26図
列7	21-1区	柵列	2	3.60	1	2.70	1.7～2.7	N- 1°-W	楕円・円形	0.2～0.45	0.1～0.15	第26図
列8	21-2区	建物	2	3.20	1	2.30	1.5～2.3	N -5°-W	隅丸方形	0.3～0.5	0.1～0.15	第29図
列9	21-3区	建物?	3	8.30	1	—	1.8～2.0	N -5°-W	円形・隅丸方形	0.2～0.35	0.05～0.1	第32図

表３　柱穴列一覧

（柱穴列1）
1 暗黄灰色+黄褐色地山ブロック土混じるレキ混じり砂質土
2 暗黄灰色+黄褐色地山ブロック土混じる砂・レキ混じり粘質シルト
3 暗灰黄色+褐色砂レキ混じり土
4 灰黄褐色褐色+褐色小石・砂レキ混じり粘質シルト
5 にぶい黄褐色砂レキ混じり砂質シルト
6 （地山）黄褐色砂レキ混じり土

（柱穴列2）
1 （柱痕）灰黄褐色粘質シルト
2 灰黄褐色砂僅かに混じる粘質シルト
3 灰黄褐色+褐色粘質シルト
4 灰黄褐色レキ混じり土
6 （地山）褐色+灰黄褐色砂・レキ混じり土



（柱穴列3）
1 暗灰黄褐色砂・小レキ混じり粘質シルト
2 にぶい黄褐色砂・レキ混じり砂質シルト
3 灰黄褐色砂・レキ混じり粘質シルト
4 褐灰色+にぶい黄褐色砂混じり粘質シルト
5 褐色+黄灰色粘質シルト
6 （地山）褐色+灰黄褐色砂・レキ混じり土

（柱穴列4）
1 黄灰色+灰黄褐色ブロック土混じる小レキ混じり粘質シルト
2 黒褐色+黄灰色砂質シルト
3 暗灰黄色+黄褐色地山ブロック混じる粘質シルト
4 にぶい黄褐色砂質シルト
5 褐灰色+にぶい黄褐色砂混じり粘質シルト
6 （地山）褐色+灰黄褐色砂・レキ混じり土

（柱穴列5）
1 黄褐色砂混じり粘質シルト
2 褐色+褐灰色砂・レキ混じり粘質シルト
3 にぶい黄褐色粘質シルト
4 にぶい黄褐色砂多く混じる粘質シルト
5 （地山）褐色+灰黄褐色砂・レキ混じり土

（柱穴列6）
1 黄灰色+褐色地山ブロック混じる砂混じり粘質シルト
2 褐色+褐灰色小レキ混じり粘質シルト
3 にぶい黄褐色+暗灰黄色砂・レキ混じる粘質シルト
4 灰黄褐色+褐色地山ブロック混じる砂質シルト
5 （地山）褐色+灰黄褐色砂・レキ混じり土

第26図　21－1区　柱穴列平・断面図

列３は、柱間距離がやや不均等であるが、桁行２間以上、梁間２間を検出した。柱穴列２の周囲の柵列と考えられる。柱穴列４は、桁行２間、梁間２間の建物になると考えられる。主軸方向はN－７°－Wを示す。ピットは直径30～50cmの円形ないし隅丸方形状で、深さは10～20cmを測る。P64内から瓦器椀片、土師器片などが出土した。柱穴列５は、柱間がやや不均等であるが、桁行２間、梁間２間の建物と考えられる。主軸方向は柱穴列４と同様にN－７°－Wを示す。ピットは直径25～40cmの楕円形状で、深さは10～20cmを測る。柱穴列６は、柱間約1.5mを測る柱穴列で、主軸方向はN－50°－Wを示す。柵列と考えられる。P35内から瓦器椀片、土師器細片などが出土した。柱穴列７は、柱穴列３の南側で対似する柱穴列で、柵列と考えられる。

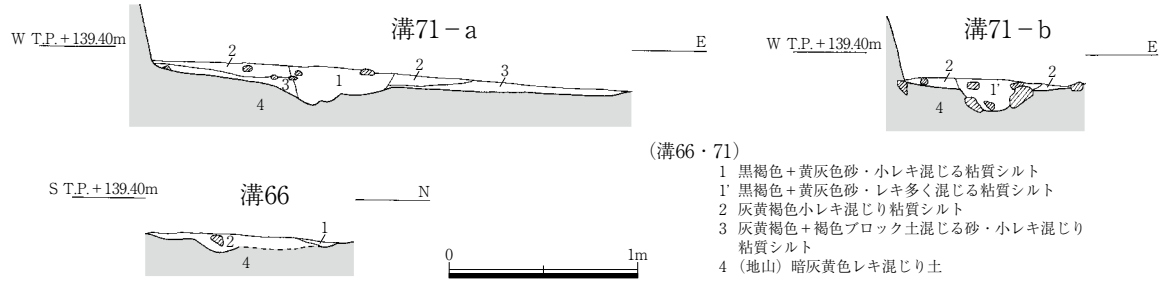
検出した柱穴列は、直接的な切り合いが見られないため、前後関係が定かではないが、特徴として、方位を意識しほぼ真北を示すもの（柱穴列２～５・７）と耕作地の段などの地形に沿って45°～50°の傾きを持つもの（柱穴列１・６）が見られる。中でも、柱穴列４と５、柱穴列３と７は近接する辺が対似しており、同時期に相当するものと考えられる。柱穴列の時期として、３時期ないし４時期と推定される。ピット内から出土した遺物は、概ね平安時代末から鎌倉時代（10～14世紀）頃に相当する。

溝71・溝66　（第27図・図版12ｂ・c）

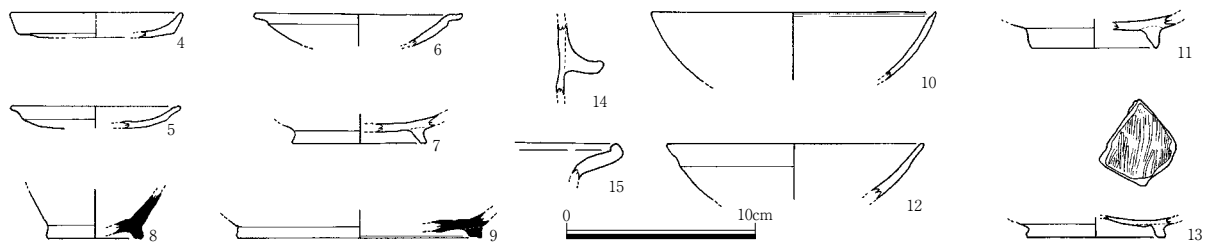
溝71は、調査区中段の西側端で検出した緩やかに湾曲する南北方向の溝である。検出幅は0.5～2.5ｍ、深さは５～20cmを測る。溝の断面形は、中央部が半円形状に深く切り込んでいる。溝66は、溝71の南端から屈曲して東西方向に伸びる溝である。検出幅は約1.1ｍ、深さは５～10cmを測る。埋土は、黒褐色ないし灰黄褐色土でこぶし大のレキや小石が多く混じる。溝内から土師器小皿（６）・坏、黒色土器A類椀（10･11）、土師質羽釜（14）・土師器甕口縁部（15）、瓦器椀（13）、須恵器杯（９）・小瓶（８）、フイゴ羽口片（47～49）などが出土した。これらの溝は、柱穴列２の南側から西側を囲むように位置していることから、建物周囲に付帯された溝になるものと推測される。

溝３・溝17・溝23　（第27図・図版12ｄ）

溝３は、調査区南端の地山面で検出した南北方向に直線的に伸びる溝である。さらに溝３に直交して東西方向に溝17が伸びる。溝23は溝３の北側で検出した溝で、東西方向に伸びた後東端が屈曲して南北方向に伸びる。概ね正方位を意識して掘削されている。溝の検出幅は25～30cm、深さは５～10cmを測る。建物や耕作地を区画する溝と考えられる。溝23内から土師器小皿片などが出土した。



第27図　21－１区　遺構断面図



第28図　21－１区　出土遺物

出土遺物　(第28図・図版17・19)

21－１区では、溝71から遺物がまとまって出土したが、遺物を伴う遺構は少なかった。包含層から出土した遺物も細片が多く、図化できるものは僅かであった。旧耕土層からは、瓦器椀 (12)、土師器小皿（４・５)、土師質羽釜・甕などの細片と共に、中国製白磁碗 (41)、青磁碗片などが出土した。鎌倉・室町時代 (13～15世紀) 頃に相当する。さらに下層の旧耕土層からは、黒色土器Ａ類椀、土師器椀（７)・皿、須恵器杯・小瓶・甕片などが出土した。地山直上の遺物包含層からは、土師器細片、黒色土器椀片と共に、フイゴ羽口片 (46) や製塩土器などの細片が出土した。平安時代末 (10～11世紀) 頃に相当する。

３．21－２区　(図版14)

21－２区は、１区に続いて小尾根状丘陵頂部に位置する、南北方向に細長い調査区である。幅6.5～８ｍ、延長約31ｍで、調査面積は201.5㎡を測る。現況は、段々に開墾された耕作地で、南西側の一部で耕作地上段部がかかるが、その他は中段部となる。中段部は北側に向って緩やかに低くなる様相を示す。

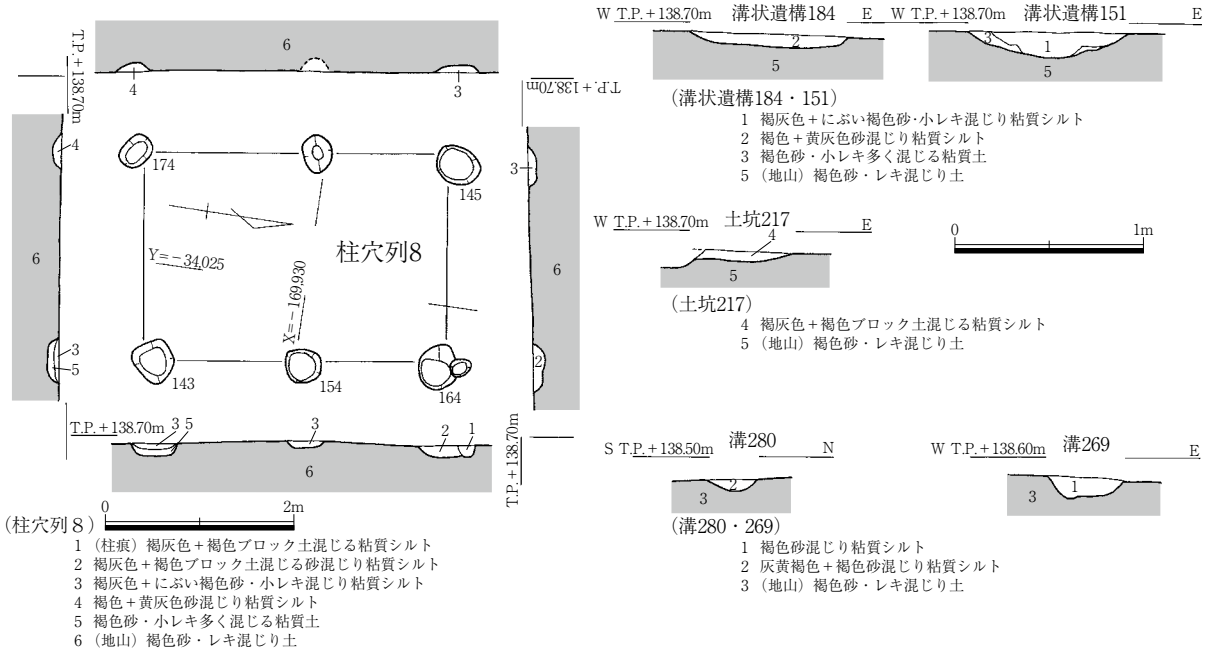
現代耕土層を除去すると、黄灰褐色土ないし褐灰色土の旧耕土層が見られた。旧耕土層直下でピット、スキ溝群、溝状土坑、土坑などを検出した。調査区南東部では、にぶい黄褐色土の旧耕土層と黒褐色土の遺物包含層の下面から、ピット、焼土坑、不定形土坑などを検出した。検出高は上段部でT.P.139.0ｍ、中段部でT.P.138.65～138.0ｍを測る。調査区の東辺は、試掘調査時の試25区にあたる。

柱穴列８　(第29図・図版14)

調査区の南側中央部でピットをいくつか検出した。柱穴列８は、桁行２間、梁間２間の掘立柱建物と考えられる。主軸方向はＮ－５°－Ｗを示す。ピットは直径30～50cmの隅丸方形状で、深さは約10cmを測る。ピット内から土師質羽釜片、土師器細片などが出土した。

溝状遺構151・184・217　(第29図・図版14)

調査区南東部から、やや緩やかな弧を成して西北方向に伸びる溝状遺構である。検出時は溝状土坑として個別に検出したが、一連の遺構と考えられる。自然地形に沿った区画溝となる。検出幅は約70cm、深さは５～15cmを測る。埋土は、褐灰色砂・小レキ混じり土で、遺構内から土師器椀・皿、黒色土器A類椀、須恵器杯、瓦器椀、瓦質甕片などが出土した。



第29図　21－２区　遺構平・断面図

スキ溝群１　(第25図・図版14)

調査区中央部では、区画溝の北側で南北方向のスキ溝群１を検出した。検出範囲は、南北約11m、東西約４ｍで、東側は調査区外に広がる。検出高はT.P.138.5ｍを測る。スキ溝は幅10～20cm、深さは５～10cmを測る。スキ溝内からわずかに須恵器杯、土師器椀・杯・小皿、黒色土器椀、瓦器椀、土師質羽釜、須恵質甕などの細片が出土した。

スキ溝群１の西側では、小ピットがいくつか南北方向に並ぶ状況が見られた。耕作地を画する柵列になると考えられる。

スキ溝群２・溝269・溝280　(第25・29図・図版14)

調査区北側部で、斜め方向に広がるスキ溝群２を検出した。検出範囲は、南北約９ｍ、東西約３ｍで、西側および北側は溝269、溝280や柵列となるピット列により区画されている。検出高はT.P.138.3～138.4ｍを測る。スキ溝の方向はN－20°－Wを示す。スキ溝内から黒色土器A類椀、土師器皿、土師器細片などが出土した。

溝269は、スキ溝群２の西端を直線的に限る区画溝で、検出幅15～25cm、深さ３～５cmを測る。溝280は、溝269の北端から東方向に垂直に屈曲する区画溝で、検出幅25～40cm、深さ約10cmを測る。埋土は、灰黄褐色砂混じり土で、溝内から須恵器杯・壺、黒色土器、瓦器碗・小皿、土師質羽釜などの細片が出土した。また、溝269に沿って直線的に並ぶピット列のP277からは、須恵器杯、「て」の字状の口縁部をもつ土師器皿（16）などが出土した。

スキ溝群１とスキ溝群２は直接的な切り合い関係は見られなかったが、いずれも平安時代末から鎌倉時代（10～14世紀）頃の様相を示す。

土坑255・落込み256　(第29図・図版14)

スキ溝群２の北側および東側で土坑255、落込み256を検出した。埋土は、砂・小レキが多く混

じる黒褐色および褐灰色土で、層厚は30～40cmを測る。北東側に向って落ちる傾斜地やくぼ地を埋めたものと見られる。土坑255からは、土師器皿・小皿・椀、羽釜、瓦器椀などの細片が出土した。落込み256からは、土師器小皿（21）、土師質羽釜、黒色土器椀、瓦器椀（23・25）、須恵器甕、緑釉陶器（43）などの細片が出土した。

焼土坑130　（図版14）

調査区の南東端で、にぶい黄褐色土の旧耕土層と黒褐色土の遺物包含層を掘削した下面から焼土坑と不定形土坑、ピットなどを検出した。焼土坑130は、検出幅は南北約４ｍ、東西約1.5ｍの広がりを持つ土坑で、南側および東側はさらに調査区外に広がる。埋土は、砂レキが多く混じる黒褐色土で、土師器片が多く含まれる。地山面上で、炭化物・焼土が数箇所残っていた。焼土坑内から土師器小皿（18・19）・椀、土師質羽釜、黒色土器、須恵器甕、瓦器椀のほか、フイゴ羽口片（52）が出土した。焼土坑130周辺で検出した不定形土坑内にも焼土や炭化物片が含まれていた。火を用いた作業の場であったと考えられる。

その他の遺構

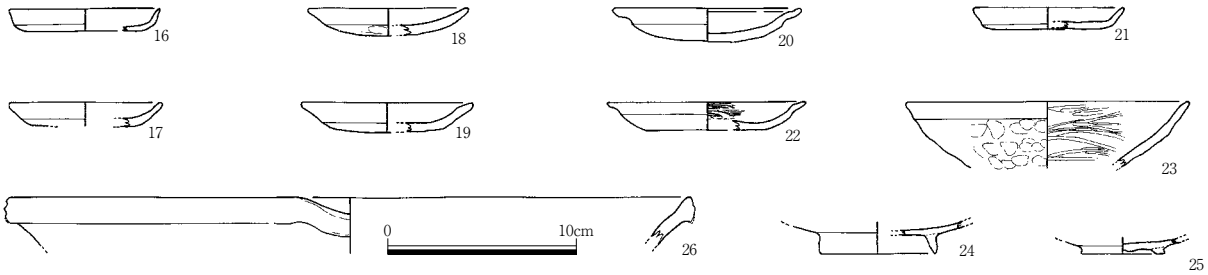
調査区南西端の上段部では南北方向のスキ溝、小ピットなどを検出した。遺構内からは土師器細片が出土した。

出土遺物　（第30・37図・図版17・19）

21－２区では、溝状遺構151や焼土坑130、落込み256などで遺物の出土が見られたが、細片が多かった。包含層から出土した遺物も細片が多く、図化できるものは僅かであった。旧耕土層からは、土師器皿・小皿（12）、瓦器椀・小皿（22）、須恵質片口鉢（26）、土師質羽釜、瓦質甕、中国製白磁碗片（42）などが出土した。鎌倉・室町時代（13～15世紀）頃に相当する。さらに下層の旧耕土層からは、土師器皿・椀、黒色土器、須恵器杯・甕、土師質羽釜などが出土した。黒褐色土の遺物包含層からは、土師器皿、黒色土器、須恵器杯・甕、フイゴ羽口片（50·51）やサヌカイト剥片などが出土した。平安時代末から鎌倉時代（10～13世紀）頃に相当する。小レキが混じる褐色の地山面でサヌカイト製石槍（40）が出土した（図版19a）。

４．21－３区　（第31・32・33図・図版15）

21－３区は、小尾根状丘陵部から斜面地にかかる調査区で、北東部に向って低くなる。調査区は幅４～７ｍ、延長約12.5ｍで、調査面積は70㎡を測る。現況は、南側から約10m付近までは耕



第30図　21－２区　出土遺物

作地であったが、北側は斜面地の緩衝地となっていた。

現代耕土層を除去すると、オリーブ褐色土の旧耕土層、さらに調査区中央部付近では黒褐色土の遺物包含層を確認した。地山直上面では溝、ピットなどを検出した。検出高は、T.P.137.8～137.5ｍを測る。調査区南東端で、試掘調査時の試24区がかかる。

柱穴列９　（第32図・図版15）

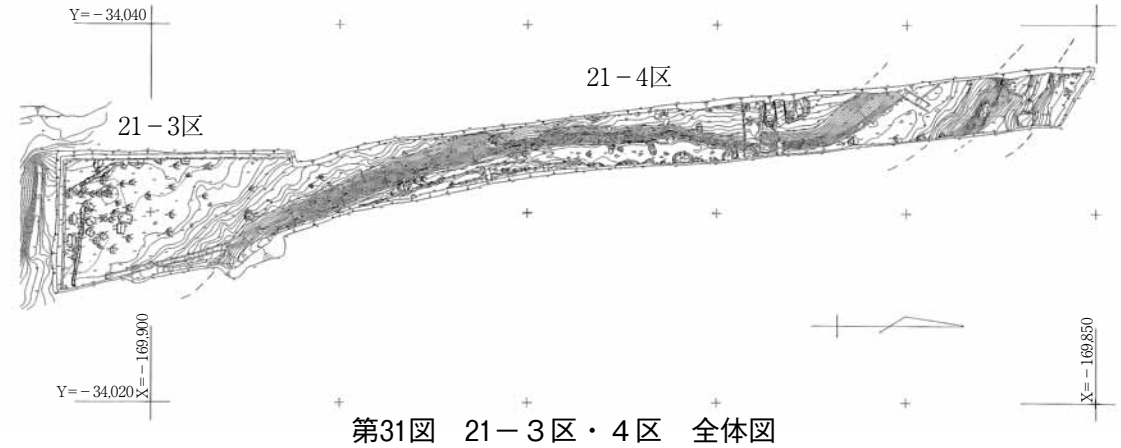
調査区の央部で柱穴列を検出した。柱穴列９は、概ね桁行３間、梁間１間で、柱間が不均等な作業小屋などの建物と考えられる。主軸方向はＮ－５°－Ｗを示す。直径20～35cmの円形ないし隅丸方形状で、深さは約10cmを測る。ピット内から土師器細片が出土した。

溝320・溝292　（第32図・図版15）

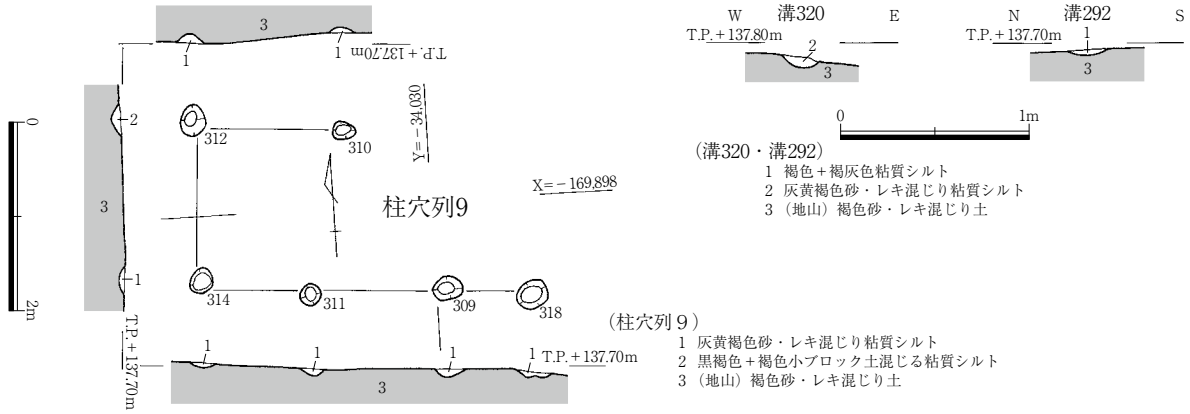
溝320は、調査区の南側で西北方向に直線的に伸びる溝である。21－２区の溝269と同一方向のＮ－20°－Ｗを示す。耕作地の区画溝と考えられる。検出幅は約25cm、深さは約５cmを測る。埋土からサヌカイト剥片などが出土した。溝292は、調査区南側壁際でほぼ東西方向に伸びる溝である。一時期の耕作地の区画溝と考えられる。検出幅は約20cm、深さは約３cmを測る。遺物は出土しなかった。

その他の遺構

調査区内では、柱穴列以外にもピットをいくつか検出した。直径10～20cmの小ピット、一辺径40cm程の方形状のピットが見られた。深さは３～８cmを測る。埋土は、灰黄褐色小レキ混じ

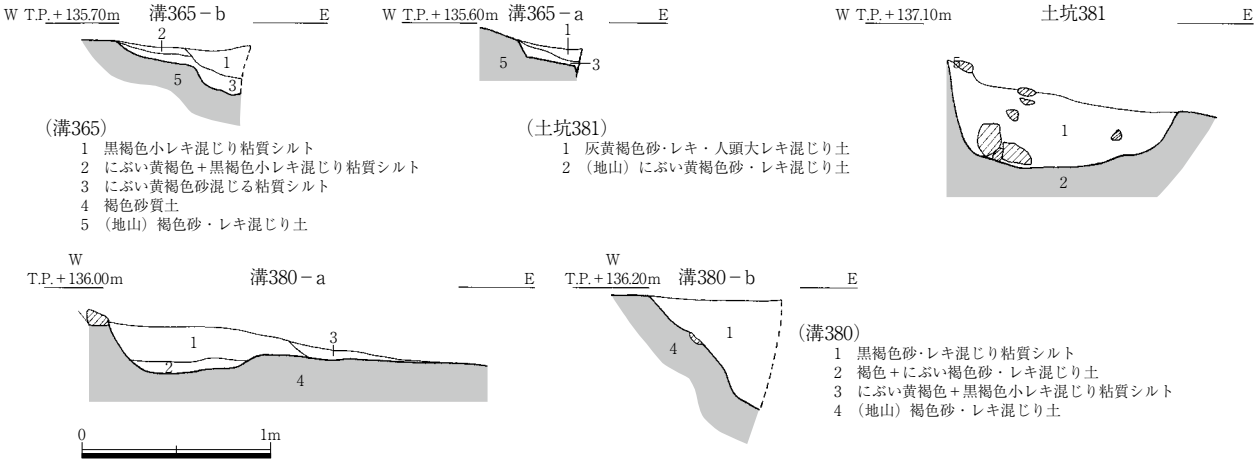


第31図　21－３区・４区　全体図



第32図　21－３区　遺構平・断面図

第33図　21－３区・４区　出土遺物



第34図　21－４区　遺構断面図

り土で、ピット内から黒色土器Ａ類椀片、土師器小皿などが出土した。耕作に伴う杭、柵列などと考えられる。

出土遺物　（第34図・図版18）

21－３区では、出土遺物も少なく、図化できるものはほんの僅かであった。遺物包含層から土師器皿・椀、土師質羽釜、黒色土器椀、須恵器甕、瓦器椀、瓦質片口鉢（27）、サヌカイト片などが出土した。概ね、平安時代末から鎌倉・室町時代（10～15世紀）頃に相当する。

５．21－４区　（第31図・図版15）

21－４区は、21－３区の北側で小尾根状丘陵頂部から丘陵中腹部へ至る急斜面部にあたり、北側ないし東側に向って一気に低くなる。高低差は４ｍ以上を測る。幅約3.5ｍ、延長約42.5ｍの南北方向に細長い調査区で、調査面積は136㎡を測る。現況は急斜面地で、耕作地として利用されず雑草、低木が生い茂る緩衝地である。表土および盛土層を除去すると、にぶい黄褐色砂・レキが多く混じる堆積土層が見られた。褐色レキ混じり土の地山直上面では、溝、ピット、土坑などを検出した。検出高はT.P.137.3～133.2ｍを測る。

溝365　（第34図・図版15）

調査区南東部で、急斜面からやや暖斜面へ移行する斜地裾部に掘削された溝で、南北方向に伸びる。北側は調査区外に至る。検出幅は30～80cmであるが東側は調査区外となる。検出長は約13ｍ、深さは５～45cm、検出高はT.P.135.8～135.5ｍを測る。埋土は、上層が黒褐色粘質土、下層はにぶい黄褐色砂混じり土である。溝内から瓦器椀、土師器細片が出土した。

溝380　（第34図・図版15）

調査区北側で、急斜面から暖斜面に移行する張り出し部の裾部で、僅かに円弧を成して緩やか

に東西方向に伸びる溝である。溝365に続くと考えられる。検出幅は約1.5ｍ、深さは10～50cm、検出高はT.P.135.6ｍを測る。埋土は、上層が黒色レキ混じり粘質土、下層はにぶい黄褐色砂・小レキ混じり土である。溝内から土師器細片が出土した。

土坑381・土坑375　（第34図・図版15）

土坑381は、調査区中央部付近の斜面地上部の張り出し部で検出した土坑である。検出幅は約1.3ｍで西側は調査区外に至る。検出長は約2.5ｍ、深さは52cm、検出高はT.P.136.8ｍを測る。埋土は、にぶい黄褐色レキ混じり土で、50cm大の石がいくつか見られた。耕作地を開墾した際、不要な石を土坑内にまとめて廃棄したものと推測される。

土坑375は、調査区中央部の急斜面裾部で検出した土坑で、土坑381同様に遺構内に50cm大の石が埋められていた。埋土中から土師器小皿（28）が出土した。

出土遺物　（第33図・図版18）

21－４区では、遺構に伴う遺物の出土はほとんど見られなかった。表土層から陶磁器片、堆積土層からは、土師器椀・皿・小皿（29･30）、広い高台をもつ黒色土器椀、瓦器椀、土師質羽釜、須恵器甕のほか、サヌカイト剥片などがいくつか出土した。概ね、平安時代末から鎌倉・室町時代（10～15世紀）頃に相当する。

６．21－５区　（図版16）

21－５区は、丘陵中腹の段丘部にあたり、南北方向に細長い調査区である。幅約６ｍ、延長約44ｍで、調査面積は264㎡を測る。現況は、段丘面に開墾された耕作地で、近年までみかん畑となっていた。調査区南西部は南側から伸びる丘陵の先端部に当たり、急な斜面地となっている。

現代耕土層・盛土層を除去すると、調査区南側から中央部では、にぶい黄褐色大レキ混じり土の地山層となる。巨石が風化したばいらん土が多く見られた。調査区中央部から北側では、オリーブ黒色土の旧耕土層、さらに北端部では、黒褐色小レキ混じり土の遺物包含層が見られた。地山直上面では、溝、土坑、ピットなどを検出した。検出高はT.P.132.2～131.3ｍを測る。

溝425・溝426・東西溝　（第35図・図版16）

調査区南側で検出した溝である。溝425は南西から北東方向に伸びる溝で、検出長は約6.5ｍを測る。溝426は南から北方向に伸びる溝で、北端で溝425にあたる。検出長は約5.5ｍを測る。東西溝は溝425、溝426の下層で検出した溝で、やや湾曲しながら東西方向に伸びる。検出長は約６ｍを測る。何れの溝も検出幅は15～30cm、深さは５～10cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色砂レキ混じり土でこぶし大石が多く混じる。溝内から遺物は出土しなかった。

溝406　（第35図・図版16）

調査区北部で検出した東西方向に伸びる溝である。検出幅は30～70cm、深さは５～10cmを測る。埋土は、上層が黒褐色土、下層が褐色砂質土で、土師器の細片が出土した。この溝406を境として北側が５～８cm低くなる。耕作地端の区画溝に相当する。

溝388　（第35図・図版16）

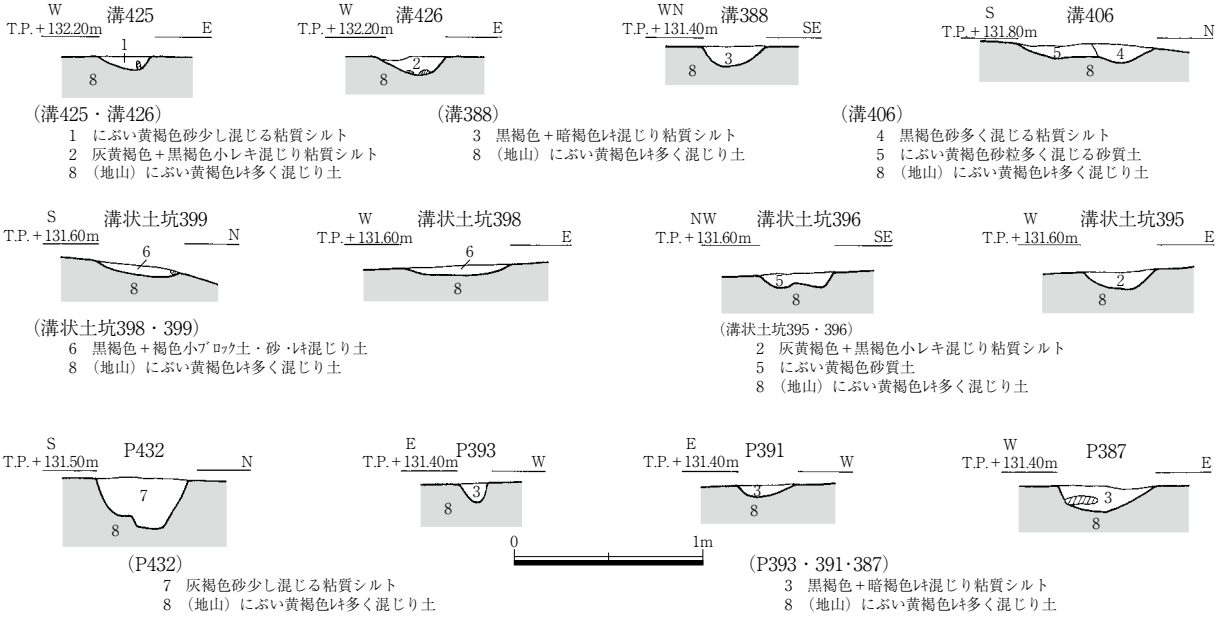
調査区北西端で検出した溝で、北東から南西に直線的に伸びる。溝の北側で小ピットがいくつか見られた。検出幅は20～40cm、深さは５～10cmを測る。埋土は、黒褐色ないし暗褐色レキ混じり土で、土師器椀・小皿、瓦器椀などが出土した。

溝状土坑399・398・396・395　（第35図・図版16）

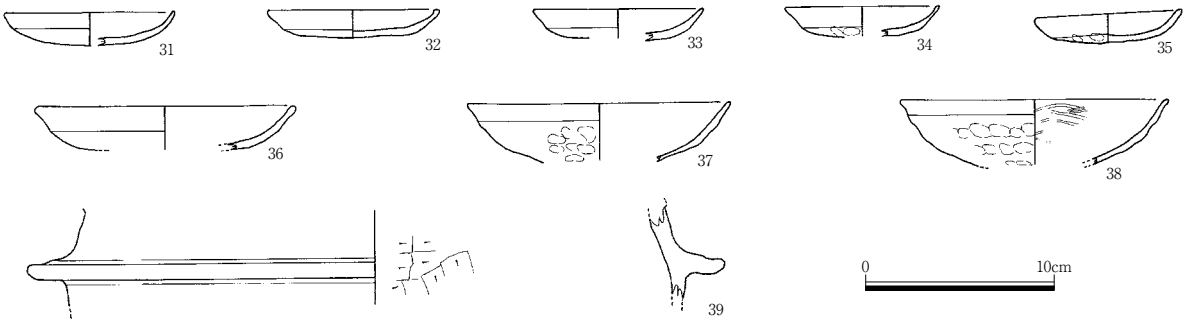
溝406と溝388に挟まれ、南側から北西方面に僅かに低くなる面で検出した溝状遺構である。耕作溝と思われる。溝状遺構389・399は溝406に、溝395・396は溝388に並んで方向を同じにしている。溝状遺構の検出幅は35～50cm、深さは５～11cmを測る。埋土は、黒褐色土に褐色ブッロク土や小レキが混じる粘質シルトで、土師器小皿・椀高台、黒色土器、瓦器椀などが出土した。

ピット群（P432･393･391･387）　（第35図・図版16）

調査区北端の溝388付近で、ピットをいくつか検出した。P432は西壁にかかるピットで、検出径55cm、深さ25cmを測る。埋土は、灰褐色粘質土で、土師質羽釜片が出土した。P387は北側が撹乱で欠けるが検出径60cm、深さ15cmを測る。ピット内からは小レキと共に瓦器椀（37･38）・小皿、土師器小皿（33･34）・坏（36）などの細片が出土した。P391､P393は、直径約30cm、深さ５～10cmを測るピットで、土師器小皿（31）、瓦器椀、サヌカイト片などが出土した。



第35図　21－５区　遺構断面図



第36図　21－５区　出土遺物

その他の遺構

調査区中央部では、レキを多く含む地山面で溝状あるいは不定形な土坑状の痕跡が見られた。埋土は、ブロック土を含む灰褐色土で小レキが多く混じる。掘削すると、遺構の底はかなりの凹凸があり安定せず、地山層のブロック土が多く混じることから、木の根を掘り返した際の痕跡と考えられた。周辺地区では今現在も、みかん畑が広がっている。

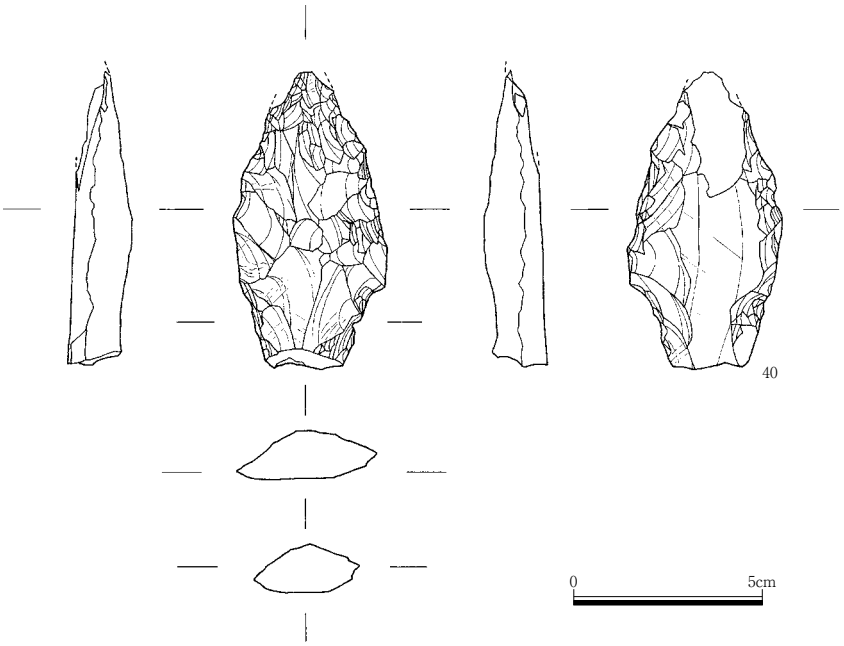
出土遺物　（第36図・図版18･19）

21－５区では、調査区北側で検出した溝やピットなどから遺物が見られたが、出土した遺物はわずかであった。主に黒褐色小レキ混じり土の遺物包含層から、土師器皿・小皿（32･35）・椀高台部、黒色土器椀、瓦器椀・小皿、須恵器甕、土師質羽釜（39）などの細片が出土した。また、中国製青磁碗片（44）、サヌカイト片、フイゴ羽口片（53）なども含まれていた。概ね、平安時代末から鎌倉・室町時代（10～15世紀）頃に相当する。

７．小結

今回の発掘調査では、調査区の幅が狭く、また急斜面にあたる個所もあったが、いくつかの成果を上げることができた。

① 地山面や遺物包含層からサヌカイト製石槍（40）、石器、剥片などがいくつか出土した。周辺に縄文時代の遺構が存在する可能性がうかがえた。



第37図　包含層出土遺物

② 南側の小尾根丘陵部では、いくつかの柱穴列を検出した。検出された遺物として、土師器椀・「て」字状皿、広い高台を持つ黒色土器椀、高台を持つ瓦器椀などを含むことから、平安時代末頃から鎌倉時代（10～14世紀）に至る集落跡の存在がうかがえた。

③ 21－２区などで、焼土坑や炭化物を含む遺構を検出したほか、ふいご羽口片がいくつか出土した。この地周辺で、火を用いた作業場が存在したものと推測される。

④ 21－２区で、正方位を意識したスキ溝群や区画溝などを検出した。中世には、条里を伴う開拓整備された農耕地が広がっていたことがうかがえた。

第４節　まとめ

調査成果

平成20・21年度に実施した芹生谷遺跡における発掘調査、および先行して行なわれた試掘調査の成果として、いくつかの知見を得ることができた。

① 調査区全域で、遺物包含層や地山直上面から石槍や石錘をはじめ、サヌカイト剥片などが出土した。出土した石器に伴う遺構は検出されなかったが、石器作成に伴う剥片が出土していることから、周辺に縄文時代の石器製作跡の存在が推測される。

② 20－２区など北側のなだらかな台地上で、金山古墳と同時期に相当する古墳時代後期の須恵器・土師器を含む遺物が出土し、柱穴群や土坑、溝を検出した。建物の範囲などは明確にはできなかったが、古墳時代後期の集落跡の存在が判明した。

③ 南側の小尾根状丘陵部の21－１区・２区で、平安時代後期の土師器・黒色土器・緑釉陶器などを含む遺物包含層やピット、溝、土坑を検出した。遺構の広がりや規模は明確にはできなかったが、平安時代後期の集落跡の存在が判明した。

④ 調査区全域で、瓦器・土師器・瓦・青磁・白磁などが出土し、柱穴群や土坑、溝、耕作溝など多くの遺構を検出した。遺構の広がりや規模を復元することはできなかったが、中世集落跡・耕作地の存在が判明した。

⑤ 20－１区で、赤い焼土が充満した焼土坑を検出した。21－２区では、炭化物・焼土が残る焼土坑130を検出した。焼土坑130からは、土師器皿・黒色土器・瓦器椀などと共にフイゴ羽口片が出土した。フイゴ羽口片は、調査地内からいくつか出土していることから、調査地付近で火を用いた作業場が存在した可能性がうかがえた。

⑥ 21－２区をはじめ調査区ほぼ全域で、方位を意識したスキ溝や区画溝などを検出した。スキ溝内からは、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器などの細片が出土した。正方位を示す溝は、条里地割の基準線となることから、平安時代後半から鎌倉時代頃には、条里を伴う開拓整備された農耕地が広がっていたものと推測される。

⑦ 土地の傾斜面で高い部分を削平し低い部分に盛土を施し雛壇状に造成していたことが、堆積した耕土の土層断面から看取された。段の低い部分（段前部）では、造成前の遺構や遺物包含層が残っていたが、削られた高い部分（段後部）では、即地山層となっていた。河南台地上の水利開発と共に、耕地開発が大規模に行われたことがうかがえた。

２年間にわたる発掘調査および、調査に先行して実施された試掘調査では、いずれも南北に長く幅の狭い調査区であった。また、調査区全体を通して現代耕土による削平が著しく、遺物の出土量が極めて少なかった。そのため、検出された遺構の面的な広がりを把握するには十分ではな

いが、 調査地に残る遺跡の性格を予見的に把握することができた。

中でも、６世紀後半頃の須恵器を埋置した土坑、さらに出土遺物から同時代と推定される建物ピットを検出したこと。また、古墳時代前期や中期頃に相当する遺物はほとんどなかったが、古墳時代後半以降の遺物が急激に増加していること。これらの遺構が、金山古墳や御旅所北古墳・御旅所古墳の築造と関係するものであるか即断できないが、今後の課題としておきたい。

表４　掲載遺物対照表

番号	調査番号	地区	遺構名	種類	器種	挿図	図版	実測番号
1	08021	226m～	灰色土	陶器	小皿	第11 図	図版9a	001
2	08021	90m～	灰色粘土	中国製白磁	碗	第11 図	図版9a	007
3	08021	20m～	灰色粘土	土師質土器	小皿	第11 図	図版9a	003
4	08021	190m～	灰色粘土	土師質土器	小皿	第11 図	図版9a	002
5	08021	190m～	灰色粘土	土師質土器	小皿	第11 図	図版9a	005
6	08021	190m～	灰色粘土	土師質土器	小皿	第11 図	図版9a	006
7	08021	12.8m～	灰色粘土	土師質土器	小皿	第11 図	図版9a	004
8	08021	12.8m～	灰褐色シルト	瓦器	椀	第11 図	図版9a	009
9	08021	20m～	灰色粘土	瓦器	椀	第11 図	図版9a	010
10	08021	37.5m～	人力掘削土	瓦器	小皿	第11 図	図版9a	008
11	08021	92.8m	遺構　4	瓦器	椀(底部)	第11 図	図版9a	016
12	08021	190m～	灰色粘土	須恵質土器	ねり鉢	第11 図	図版9a	011
13	08021	171.8m	人力掘削土	須恵器	杯身	第11 図	図版9b	015
14	08021	171.8m	人力掘削土	須恵器	杯身	第11 図	図版9b	014
15	08021	20m～	灰色粘土	須恵器	器台(脚柱部)	第11 図	図版9b	012
16	08021	171.8m	人力掘削土	須恵器	器台(杯部)	第11 図	図版9b	013
17	08021	171.8m～	土坑　11	須恵器	小型甕	第11 図	図版10a	023
18	08021	200m～	灰褐色土	瓦	平瓦	第11 図	—	022
19	08021	171.8m	人力掘削土	石器	石錐	第11 図	図版10b	018
20	08021	92.8m～	遺構　4	石器	剥片	第11 図	図版10b	019
21	08021	190m～	灰褐色土	石器	剥片	第11 図	図版10b	017
22	08021	46.0m～	遺構　9	石器	剥片	第11 図	図版10b	020
23	08021	60m～	人力掘削土	石器	掻器	第11 図	図版10b	021
24	08021	12.8m～	灰褐色土	石器	掻器	—	図版10b	—
25	08021	106.9m～	機械掘削土	石器	剥片	—	図版10b	—
26	08021	20m～	灰褐色土	石器	剥片	—	図版10b	—
27	08021	12.8m～	灰褐色土	石器	剥片	—	図版10b	—
28	08021	53.2m～	人力掘削土	石器	剥片	—	図版10b	—
29	08021	127.7m～	機械掘削土	石器	剥片	—	図版10b	—
30	08021	171.8m～	人力掘削土	須恵器	杯蓋	—	図版9b	—
31	08021	171.8m～	人力掘削土	須恵器	杯蓋	—	図版9b	—
32	08021	106.9m～	機械掘削土	須恵器	器台	—	図版9b	—
33	08021	200m～	灰褐色土	中国製青磁	碗	—	図版9a	—
34	08021	160.0m～	人力掘削土	瓦質	片口鉢	—	図版9a	—
35	08021	200m～	灰褐色土	土師質土器	羽釜	—	図版9a	—

番号	調査番号	地区	遺構名	種類	器種	挿図	図版	実測番号
1	09030	6区	包含層	瓦質	片口鉢	第24図	図版18d	035
2	09030	6区	包含層	土師質土器	羽釜	第24図	図版18d	034
3	09030	6区	包含層	瓦	軒平瓦	第24図	図版18e	036
4	09030	1区	包含層	土師器	小皿	第28図	図版17a	004
5	09030	1区	包含層	土師器	小皿	第28図	図版17a	008
6	09030	1区	溝　71	土師器	小皿	第28図	図版17a	003
7	09030	1区	包含層	土師器	椀(高台)	第28図	図版17a	007
8	09030	1区	溝　71	須恵器	小瓶(高台)	第28図	図版17a	011
9	09030	1区	溝　71	須恵器	杯(高台)	第28図	図版17a	012
10	09030	1区	溝　71	黒色土器	椀	第28図	図版17a	002
11	09030	1区	溝　71	黒色土器	椀高台)	第28図	図版17a	006
12	09030	1区	包含層	瓦器	椀	第28図	図版17a	001
13	09030	1区	溝　71	瓦器	椀(高台)	第28図	図版17a	005
14	09030	1区	溝　71	土師質土器	羽釜	第28図	図版17a	009
15	09030	1区	溝　71	土師器	甕(口縁部)	第28図	図版17a	010
16	09030	2区	P-277	土師器	小皿	第30図	図版17b	017
17	09030	2区	包含層	土師器	小皿	第30図	図版17b	021
18	09030	2区	土坑　130	土師器	小皿	第30図	図版17b	014
19	09030	2区	土坑　130	土師器	小皿	第30図	図版17b	013
20	09030	2区	P-216	土師器	小皿	第30図	図版17b	016
21	09030	2区	土坑　256	土師器	小皿	第30図	図版17b	015
22	09030	2区	包含層	瓦器	小皿	第30図	図版17b	020
23	09030	2区	土坑　256	瓦器	椀	第30図	図版17b	018
24	09030	2区	P-206	黒色土器	椀(高台)	第30図	図版17b	022
25	09030	2区	土坑　256	瓦器	椀(高台)	第30図	図版17b	019
26	09030	2区	包含層	須恵質土器	片口鉢	第30図	図版17b	023
27	09030	3区	包含層	瓦質	片口鉢	第34図	図版18a	024
28	09030	4区	P-375	土師器	小皿	第34図	図版18a	025
29	09030	4区	包含層	土師器	小皿	第34図	図版18a	027
30	09030	4区	包含層	土師器	小皿	第34図	図版18a	026
31	09030	5区	P-393	土師器	小皿	第36図	図版18c	030
32	09030	5区	包含層	土師器	小皿	第36図	図版18c	031
33	09030	5区	P-387	土師器	小皿	第36図	図版18b	039
34	09030	5区	P-387	土師器	小皿	第36図	図版18b	037
35	09030	5区	包含層	土師器	小皿	第36図	図版18c	032
36	09030	5区	P-387	土師器	坏	第36図	図版18b	029
37	09030	5区	P-387	瓦器	椀	第36図	図版18b	038
38	09030	5区	P-387	瓦器	椀	第36図	図版18b	028
39	09030	5区	包含層	土師質土器	羽釜	第36図	図版18b	033
40	09030	2区	包含層	石器	石槍	第37図	図版19a	040
41	09030	1区	包含層	中国製白磁	碗(体部片)	—	図版19d	—
42	09030	2区	包含層	中国製白磁	碗(口縁部)	—	図版19d	—
43	09030	2区	土坑　256	緑釉陶器		—	図版19d	—
44	09030	5区	包含層	中国製青磁	碗(口縁部)	—	図版19d	—
45	09030	6区	包含層	中国製青磁	碗(高台)	—	図版19d	—
46	09030	1区	包含層	フイゴ羽口		—	図版19c	—
47	09030	1区	溝　71	フイゴ羽口		—	図版19c	—
48	09030	1区	溝　71	フイゴ羽口		—	図版19c	—
49	09030	1区	溝　71	フイゴ羽口		—	図版19c	—
50	09030	2区	包含層	フイゴ羽口		—	図版19c	—
51	09030	2区	包含層	フイゴ羽口		—	図版19c	—
52	09030	2区	土坑　130	フイゴ羽口		—	図版19c	—
53	09030	5区	包含層	フイゴ羽口		—	図版19b	—

報　告　書　抄　録

ふりがな	せるたにいせき
書名	芹生谷遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２０１０－９
編著者名	上林史郎・杉本清美
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前２丁目　TEL　06－6941－0351（代表）
発行年月日	2011年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積(㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
せるたにいせき 芹生谷遺跡	おおさかふみなみかわちぐん 大阪府南河内郡 かなんちょうせるたになか 河南町芹生谷・中 ちはやあかさかむらかわのべ 千早赤阪村川野辺	27382 27383	65 50	34° 28′ 10″	135° 37′ 46″	2008年11月～ 2009年１月 2009年12月～ 2010年２月	1,580㎡	一般国道309号河南赤阪バイパス

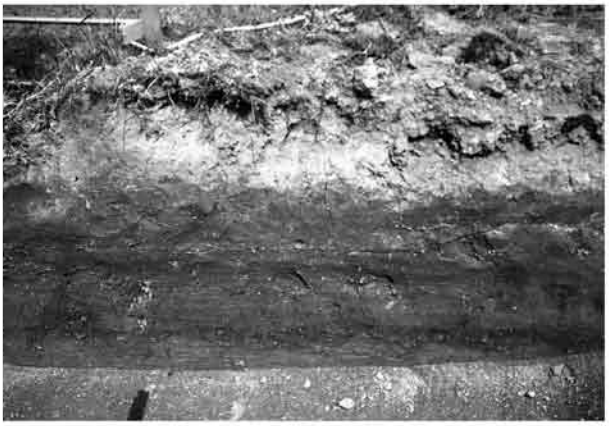
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
せるたにいせき 芹生谷遺跡	集落跡	古墳時代～中世	掘立柱建物・ 土坑・溝・ 条里地割	須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・石器・青磁・白磁・瓦	
要　約	史跡金山古墳の立地する河南台地の開発を示す古墳時代後期の土坑や柱穴が検出された。 条里地割の成立と変遷、耕地の開発を示す古代から中近世の遺構が検出された。				

図　　版

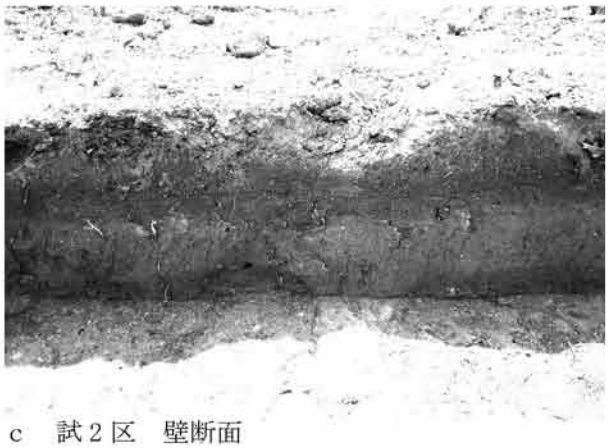
調査区全景（南から）

図版1　試掘調査1

a　調査区より金山古墳を望む

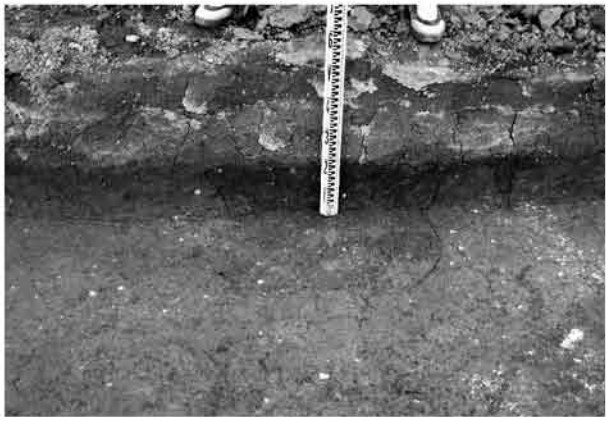


b　試1区 壁断面



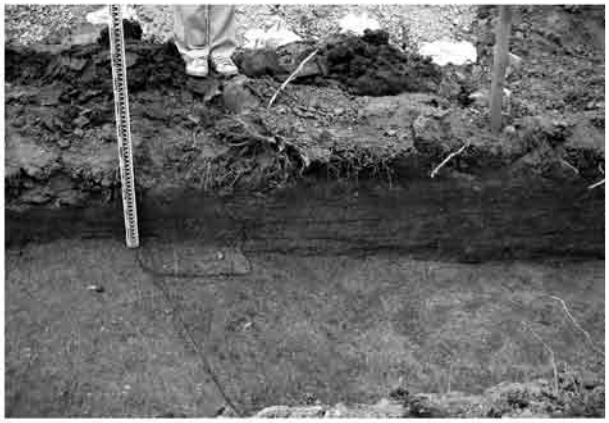
c　試2区　壁断面

d　試1区　南側里道断面



e　試3区　壁断面

f　試3区　遺構



g　試4区　壁断面

h　試4区　遺構

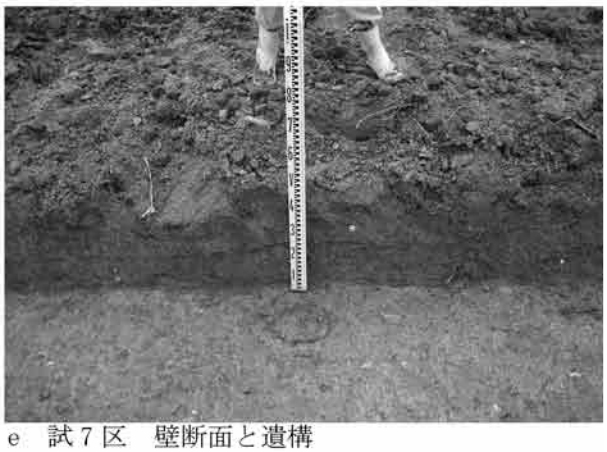
図版2　試掘調査2

a　試5区　壁断面

b　試5区
遺構

c　試6区　壁断面

d　試6区　遺構



e　試7区　壁断面と遺構

f　試8区　壁断面と遺構

g　試9区　遺構

h　試10区　壁断面と遺構

図版3　試掘調査3

a　試11区　壁断面

b　試12区　壁断面

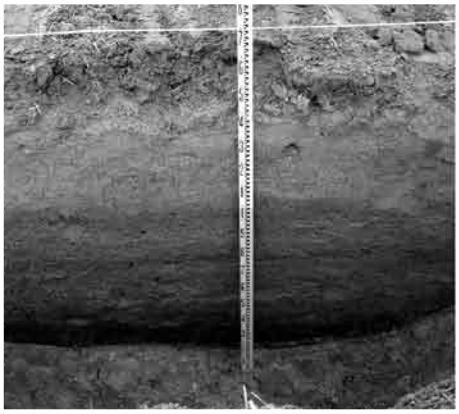
c　試13区　壁断面

d　試14区　壁断面

e　試15区　壁断面

f　試16区
壁断面

g　試17区　壁断面



h　試18区
壁断面

i　試19区　壁断面

j　試20区　壁断面

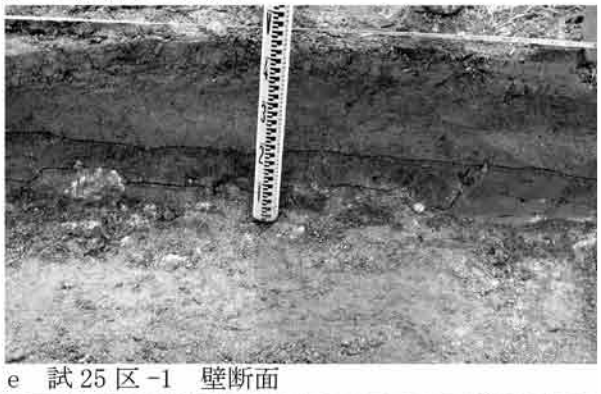
図版4　試掘調査4

a　試21区　壁断面

b　試22区　壁断面

c　試23区　壁断面

d　試24区　壁断面



e　試25区-1　壁断面

f　試25区-2　壁断面

g　試26区　壁断面

h　試27区　壁断面

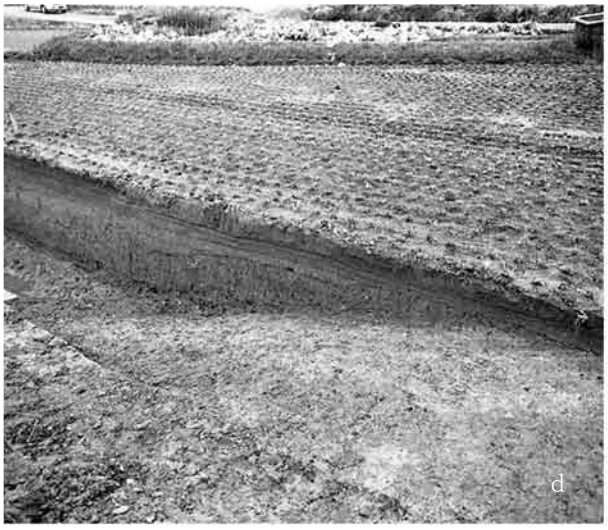
i　出土遺物1

j　出土遺物2

k　出土遺物3

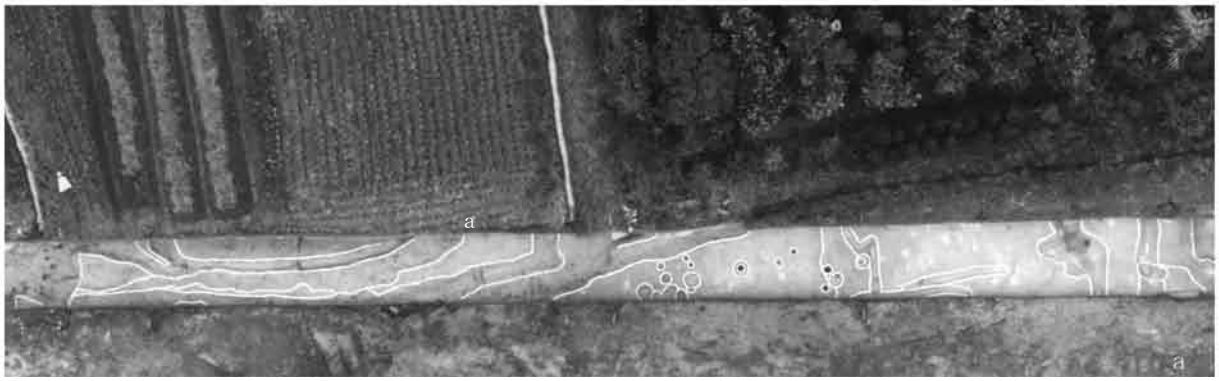
図版5　平成20年度調査区

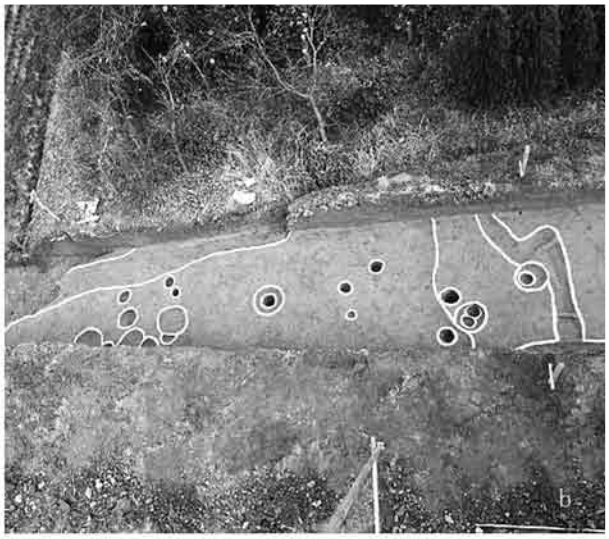
a　調査地全景（中央上方は史跡金山古墳）



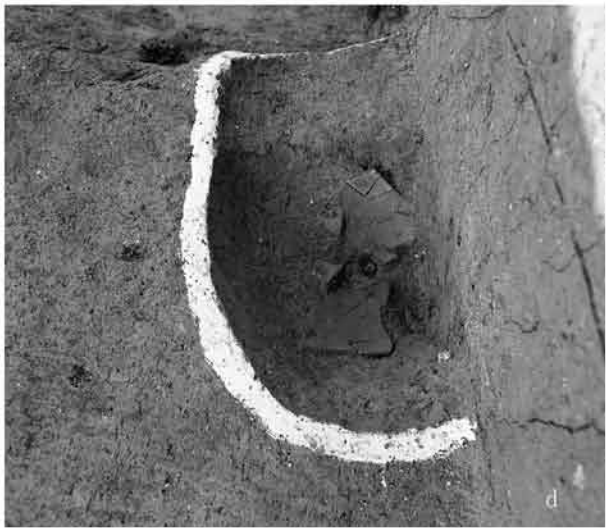
b　20－1区　北端全景　　c　20－1区　東壁断面　　d　20－1区　段検出状況

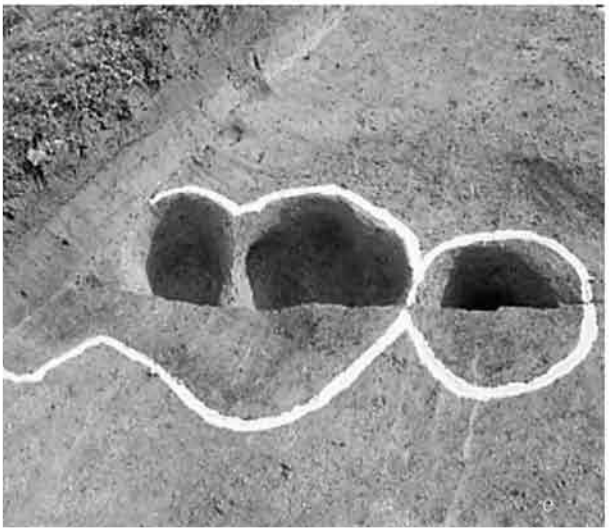
図版6　平成20年度調査区





a　20－1区　中央部全景　　b　20－1区　ピット群　　c　20－1区　焼土坑

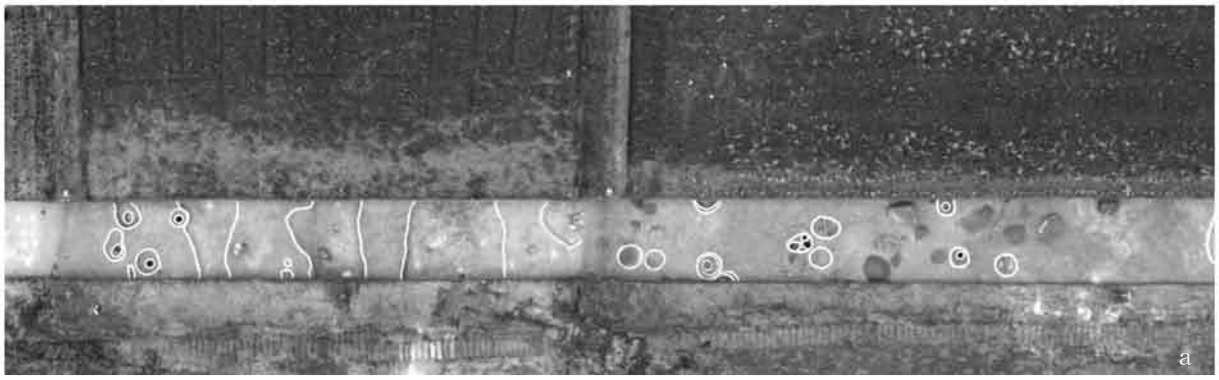


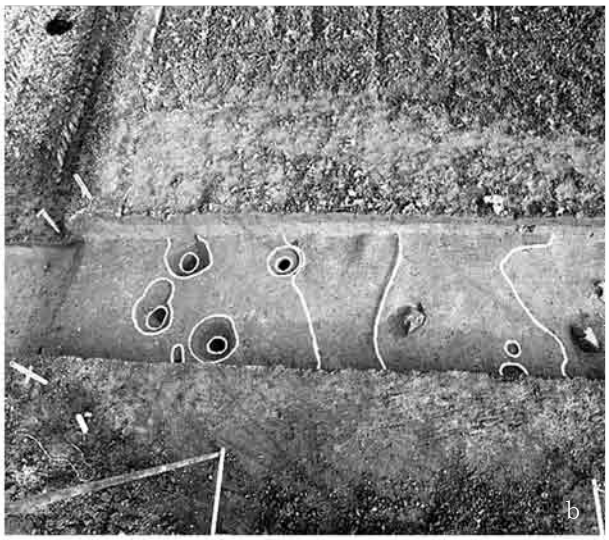


d　20－２区　甕出土土坑　　e　20－1区　焼土坑下層ピット

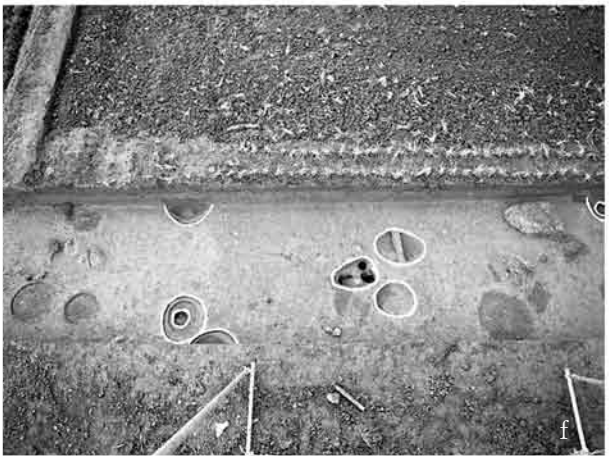
f　20－1区　南端全景　　20－2区　北端全景

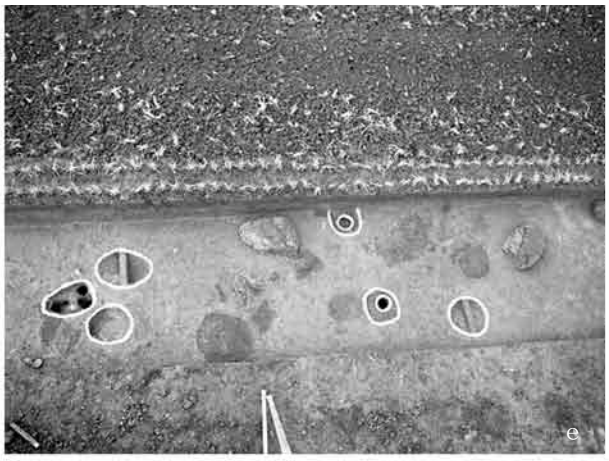
図版7　平成20年度調査区

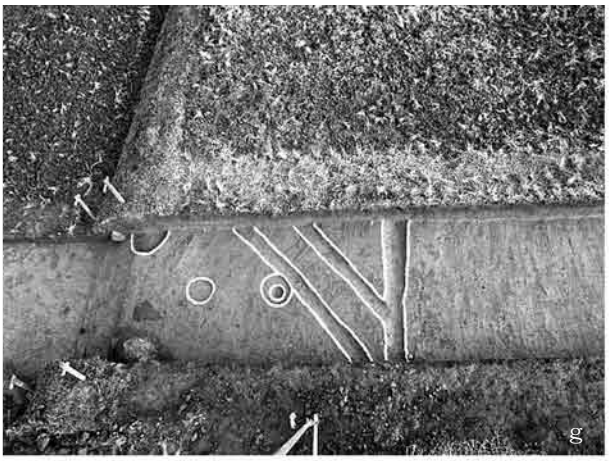




a　20－2区　中央部全景　　b　20－2区　柱穴群　　c　20－2区　溝・土坑

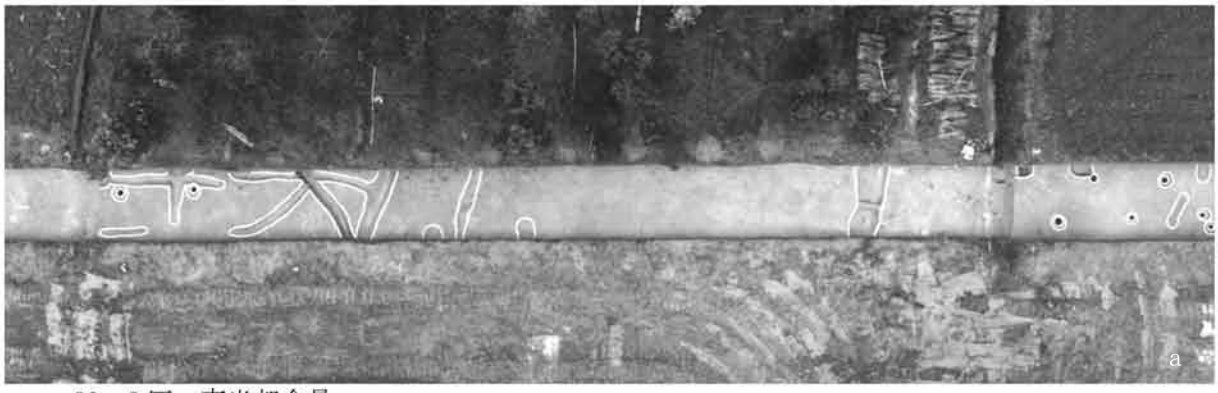






d・e　20－2区　土坑・柱穴群　　f　20－2区　土坑・柱穴群　　g　20－2区　ピット・溝

図版8　平成20年度調査区



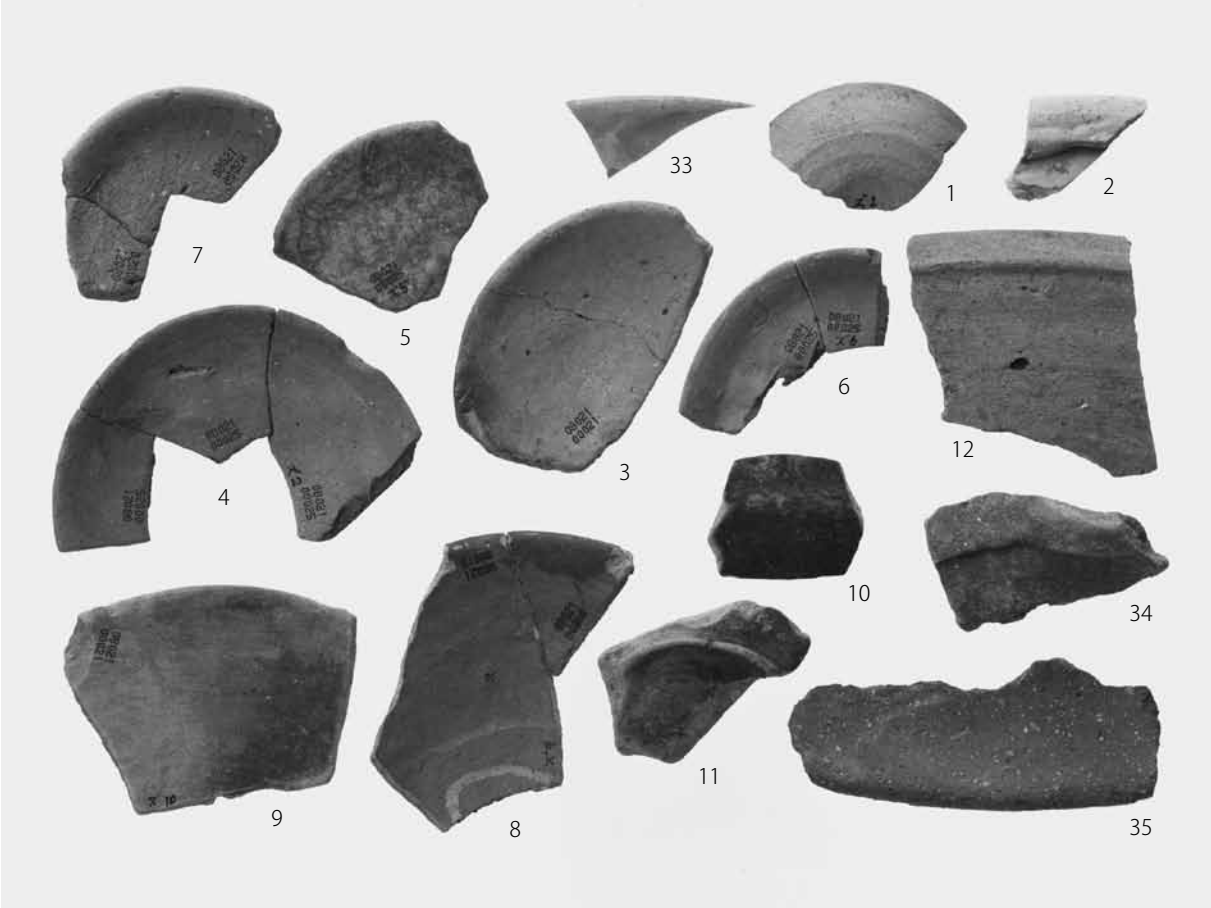
a　20－2区　南半部全景

b　20－3区　北端　20－4区　全景

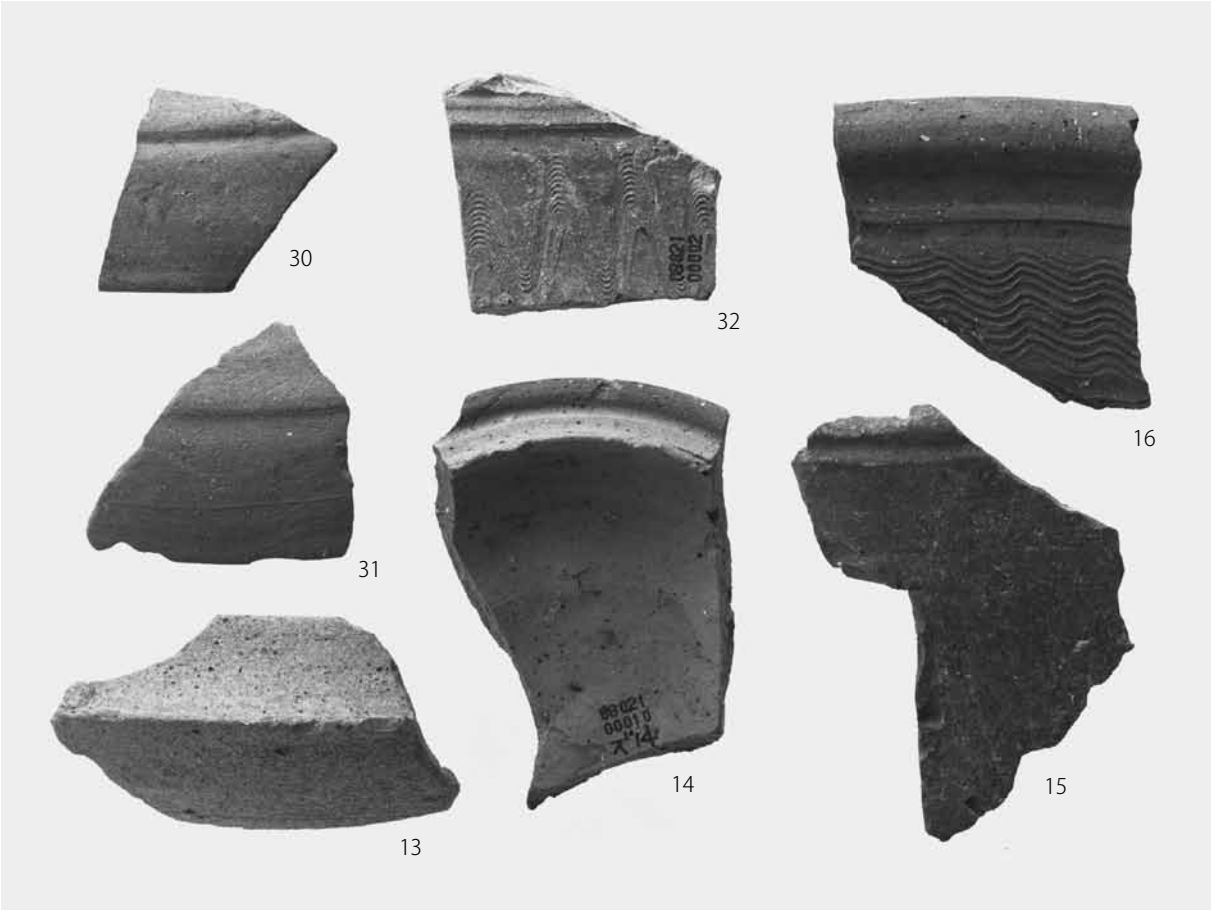
c　20－3区　中央部全景

d　20－3区　中央部全景

図版9　平成20年度調査区　出土遺物1



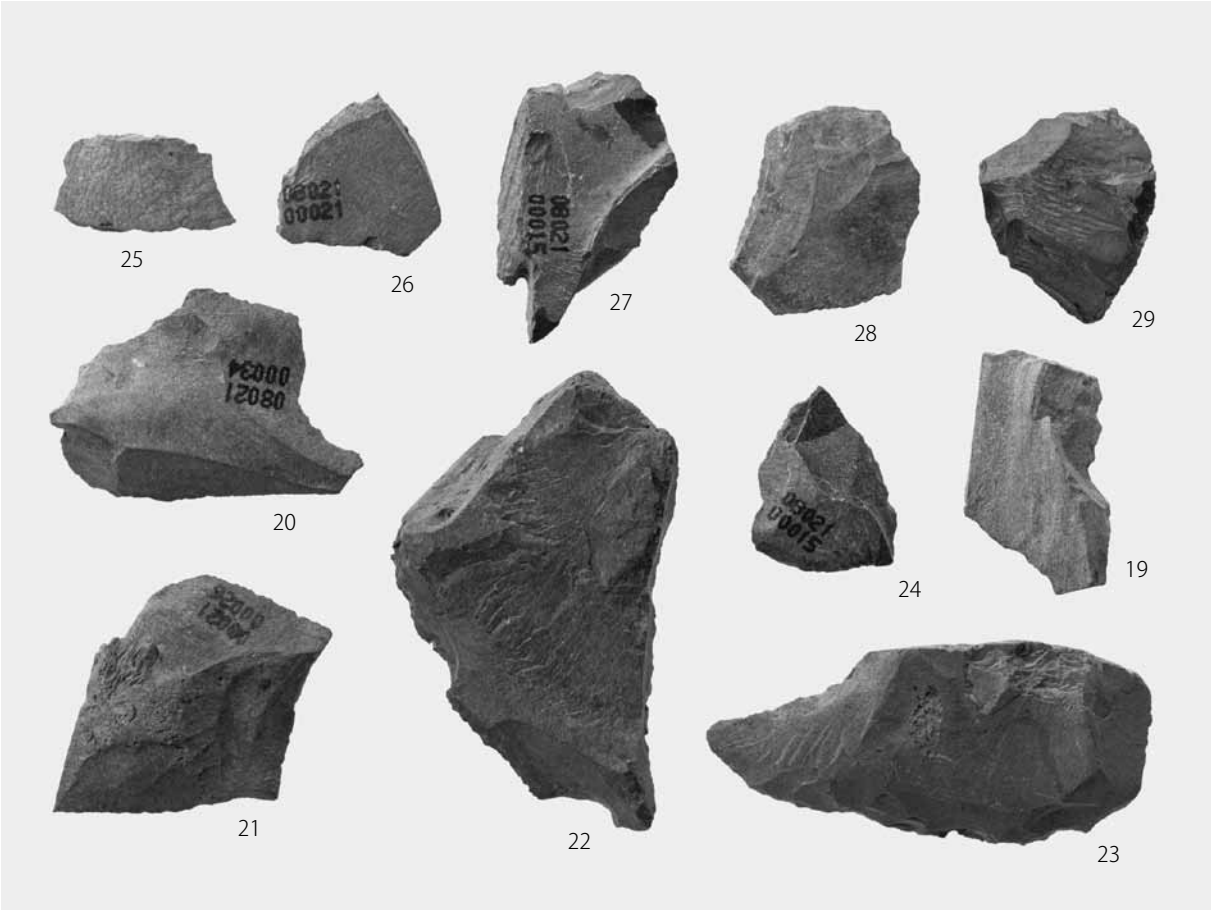
a　土師器・陶磁器



b　須恵器

図版10　平成20年度調査区　出土遺物2

a　土坑 11 出土遺物



b　石器

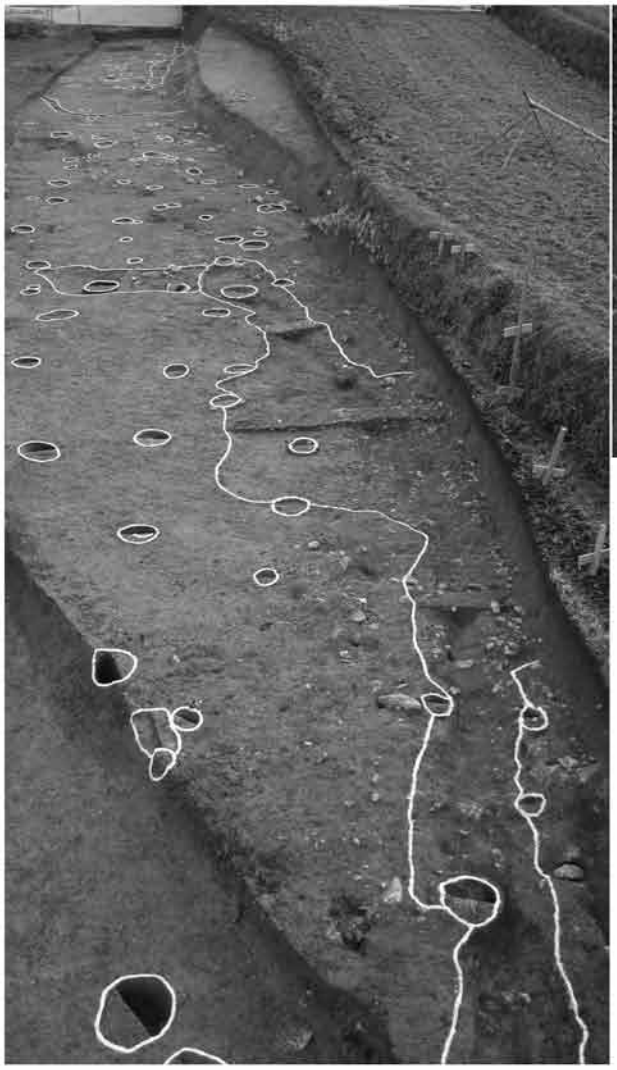
図版11　平成21年度調査区

調査区全景

図版12　平成21年度調査区

a　21-6 区　全景（北から）

c　21-1 区　溝 71（南から）

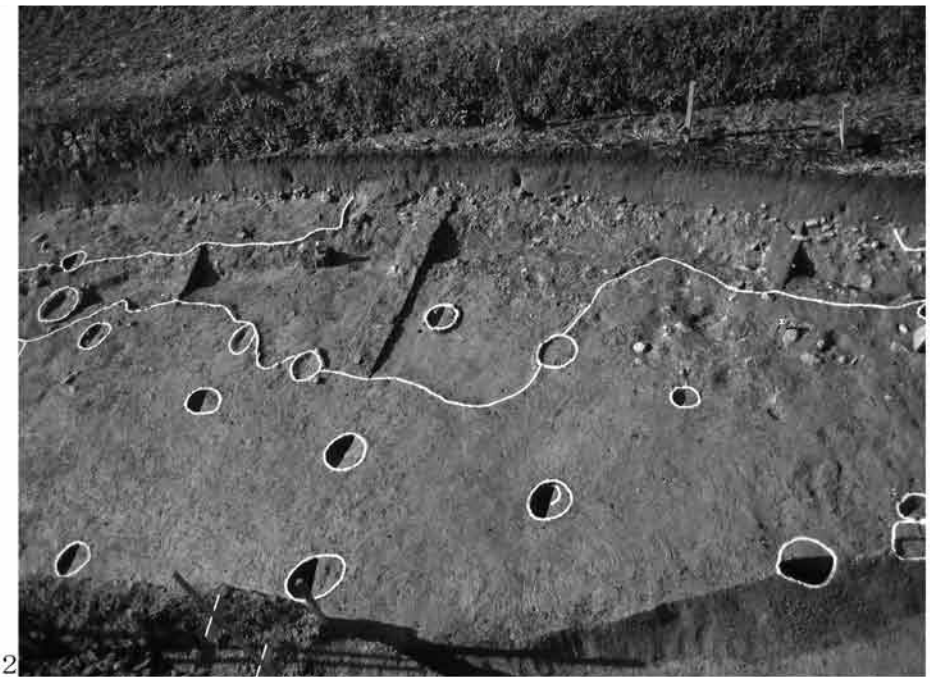


b　21-1 区　全景（北から）

d　21-1 区　全景（南から）

図版13　平成21年度調査区

a　21-1 区　建物配置



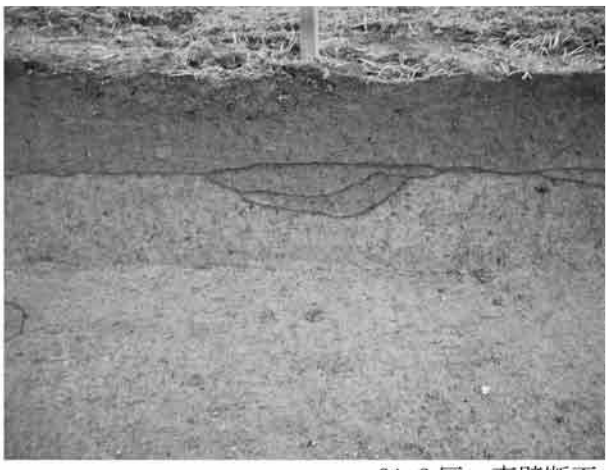
b　21-1 区　柱穴列 2

c　21-1 区　柱穴列 1

図版14　平成21年度調査区

a　21-2区　全景（南から）

b　21-2区　全景（北から）



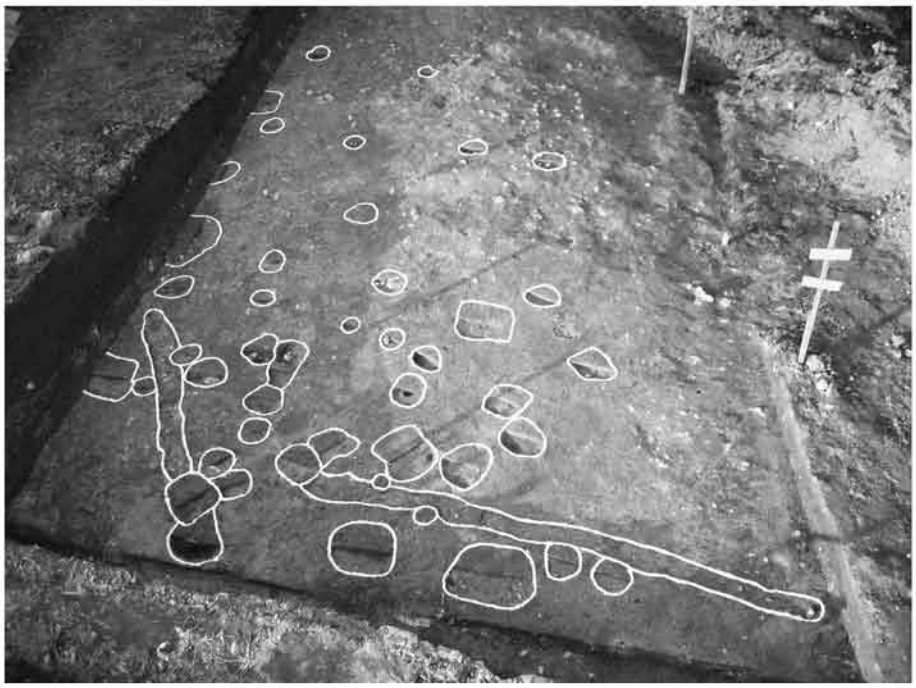
c　21-2区　東壁断面

d　21-2区　溝269・溝280（北から）

e　21-2区　土坑256（南から）

f　21-2区　焼土坑130（南から）

図版15　平成21年度調査区



a　21-3区　全景（南から）

b　21-3区　柱穴列9（西から）

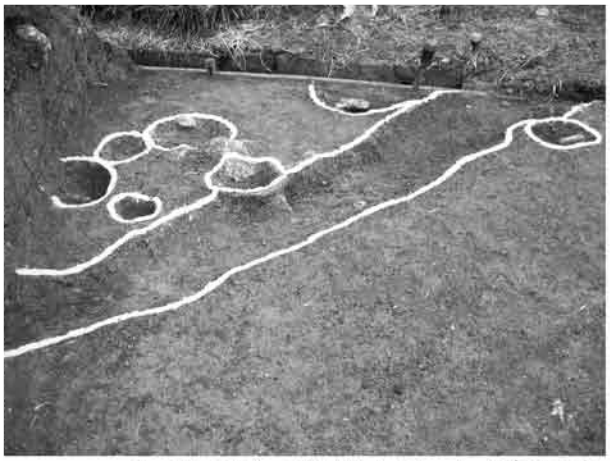
c　21-4区　全景（北から）

d　21-4区　全景（南から）

a　21-5区　全景（南から）

b　21-5区より金山古墳を望む（南西から）

c　21-5区　検出遺構（北東から）

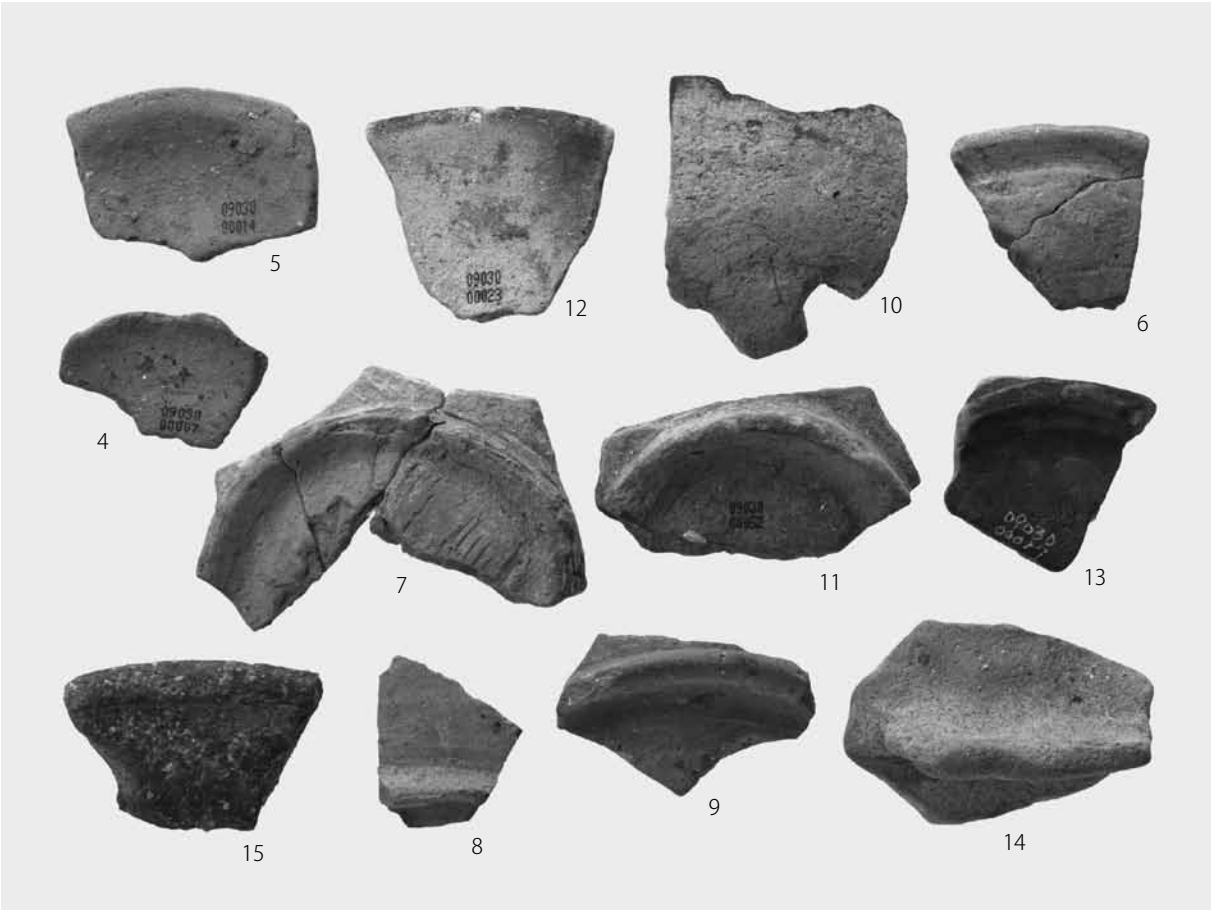


d　21-5区　溝388とピット（南から）

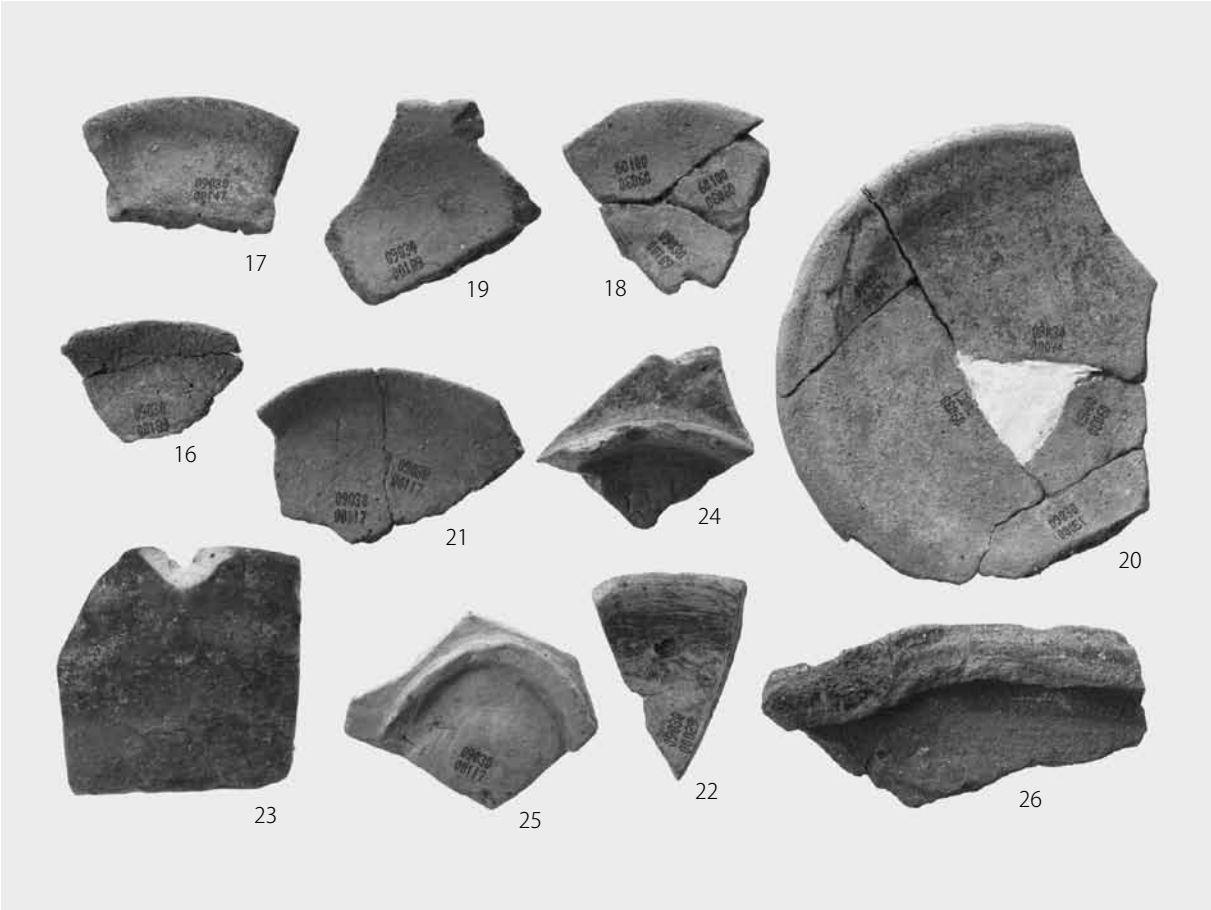
e　21-5区　溝406とピット他（西から）

f　21-5区　溝425・溝426（西から）

図版17　平成21年度調査区　出土遺物1



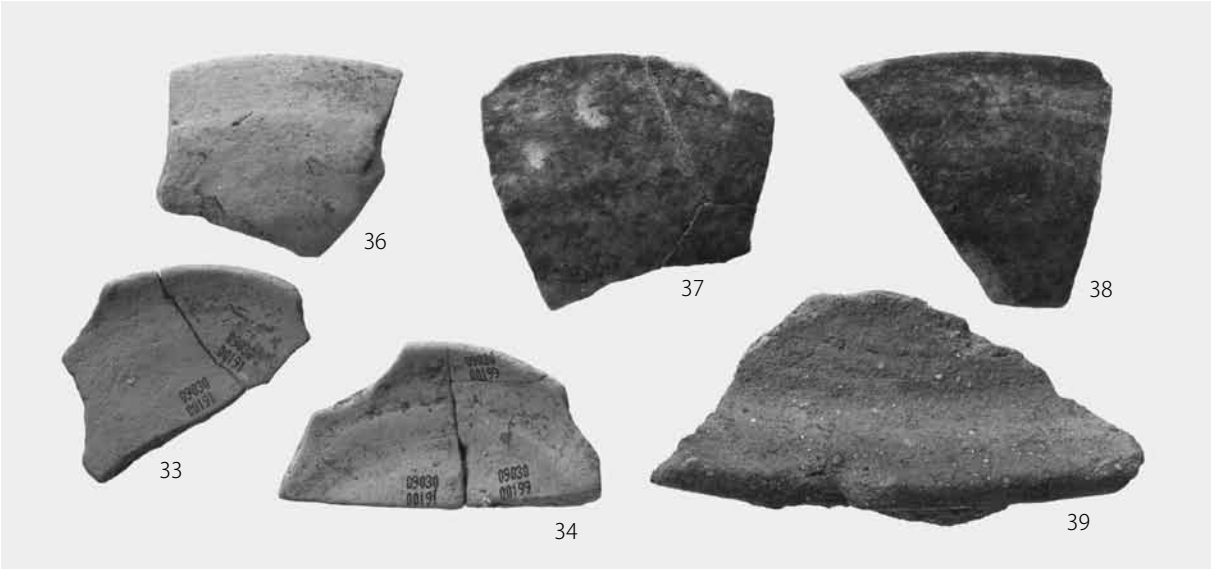
a　21-１区　出土遺物



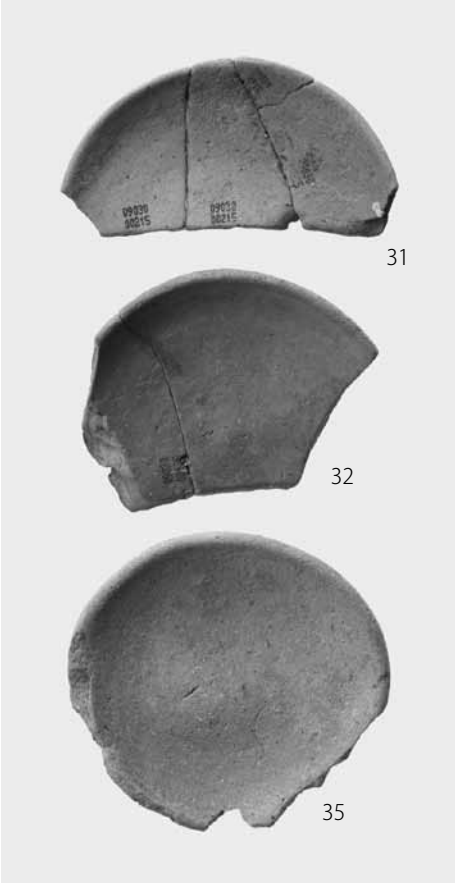
b　21-２区　出土遺物

図版18　平成21年度調査区　出土遺物2

a　21-3 区・4区　出土遺物



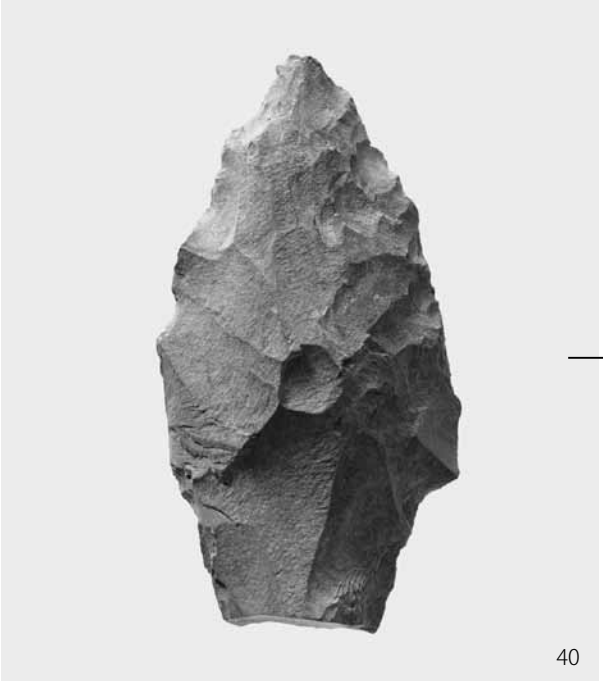
b　21- 5区　出土遺物

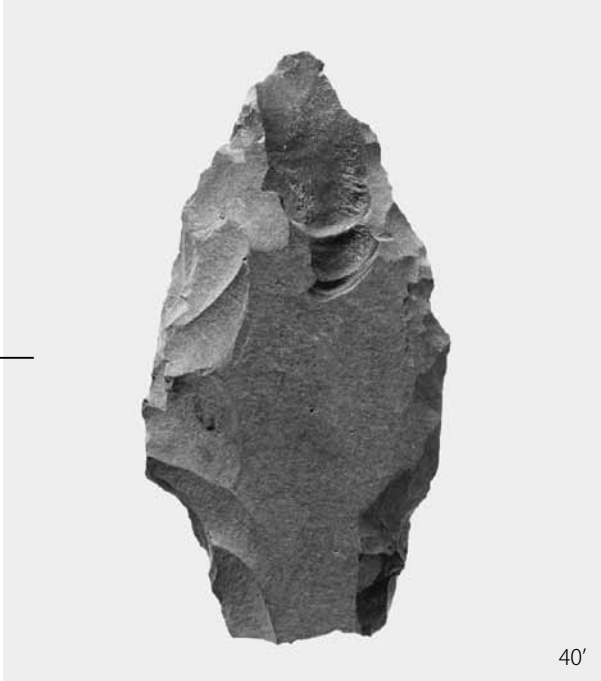


c　5区　出土遺物

d・e　6区　出土遺物

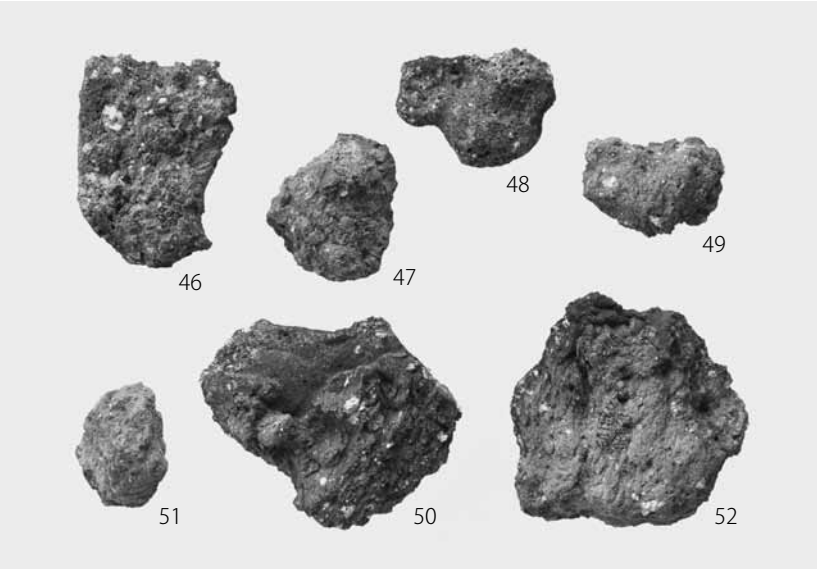
図版19　平成21年度調査区　出土遺物3



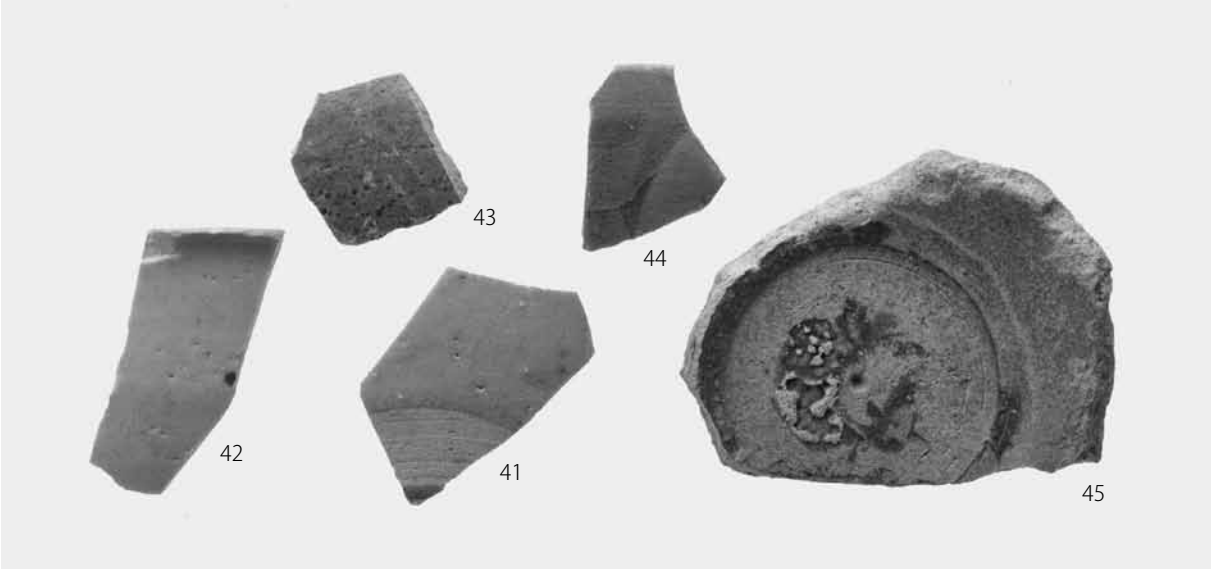


a　石器（槍）

b　ふいご羽口片



c　ふいご羽口片



d　緑釉陶器・青磁・白磁片

大阪府埋蔵文化財調査報告２０１０－９

芹 生 谷 遺 跡

発　行　大阪府教育委員会
〒540－8571　大阪市中央区大手前２丁目
TEL 06－6941－0351（代表）

発行日　平成23年３月31日

印　刷　㈱近畿印刷センター
〒582－0001　柏原市本郷５丁目６番25号